



Title	ラームプラサード・ビスミル自伝
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ラームプラサード・ビスミル自伝

ラームプラサード・ビスミル自伝

わが生涯の瞥見 革命運動の11年

何に譬えんこの声を

肚の底より聞こえる

胸震わするこの声を

命の限り舞えわが剣

ビスミル

目次

はじめに	i
ラームプラサード自伝	1
I はじまり 苦難の日々 家庭 少年期 母 恩師 梵行持戒	
II 愛国心 革命運動 武器購入 マインプリー事件 背信 潜伏 バンディット・ゲーンダーラール	
III 自活 再建 贗札作り 策謀	
IV 団結 窮状 気負う青年たち 列車強盗 逮捕 刑務所 訴追 アシュファーク 処刑場 結び 最期の言葉	
シヴ・ヴァルマー： わが日記の一ページ	73
マンマトナート・グプタ： 「ラームプラサード自伝」について	76
サーンヤールの位置	78
(一) 革命の試みは何故失敗したのか	
(二) 共産主義について	
(三) 革命運動組織と共産主義者	
(四) 「インド共和国協会」－ 綱領と規約	
(五) 「インド共和国協会」の足場について	
あとがき	92

はじめに

本書はバナーラシーダース・チャトゥルヴェディー編のラームプラサード・ビスミルの自伝 बनारसीदास चतुर्वेदी (सं०), अमर शहीद रामप्रसाद 'बिस्मिल' (आत्मकथा - रामप्रसाद 'बिस्मिल'), आत्माराम एण्ड संस, दिल्ली, 1958 の翻訳である。

著者のラームプラサード・ビスミル (1897-1927 「ビスミル」はウルドゥー語詩人としての雅号) は 1925 年 8 月 9 日に英領インドの北部鉄道 (Northern Railway) のサハーランブル - ラクノウ線でラクノウ駅の 2 駅手前のカーコーリー काकोरी 駅 (kakori) と 1 駅手前のアールामナガル आलमनगर 駅 (Alamnagar) との間において 1924 年 10 月にカーンプルで結成された反英武力革命運動組織インド共和国協会 (Hindustan Republican Association) の他の 9 人のメンバーと武力革命運動の活動資金調達のため鉄道公金の強奪を行った。この事件はこれ以前もこれ以後も多数実行された反英武力闘争の中でも富裕な個人や商店, あるいは, 企業に対してではなく政府公金を武力活動の資金源としようとした点が新しかった。(R.C. Majumdar, History of the Freedom Movement in India, Calcutta, 1963, II, p.494)

この事件では 44 名が逮捕されその内 15 名は証拠不十分で釈放された。29 名が当時のインド刑法第 121 条イギリス皇帝に対する宣戦布告, 同第 120 条騒乱共謀罪, 同第 302 条殺人罪, 同第 396 条強盗殺人罪により起訴され特別法廷で 27 名が有罪とされた。首謀者とされたラームプラサードを含む 4 名が絞首刑に処せられたほか, 4 名が終身流刑になり, 共犯証人 (approver) 2 名を含む 4 名が不起訴になった。それ以外の者たちは刑期 14 年から 5 年の禁固刑に処せられた。

以下に訳出したのはこの事件の首謀者とされたラームプラサード・ビスミルが処刑される直前まで獄中で書き記した自伝である。極めて制限された状況で執筆されたものであるだけにその記述には記憶が曖昧であったり不正確であったりしたための不正確さや混乱が存在したことが考えられるのでこれを読むに当たっては注意すべきであろうかと思う。また, その内容の一部については同志内の対立などが言及されているために編者の B. チャトゥルヴェディーは, 本書を「烈士叢書」の一巻として公刊することに躊躇したようであるが, この事件に 17 歳で直接参加して逮捕されたマンマトナート・グプタ (मन्मथनाथ गुप्त) の意見を参考にしてこれを叢書の一巻とした旨を記している。(M. グプタの見解については本書の末尾の文章を参照されたい。)

編者のチャトゥルヴェディーは本書がインド独立後 1958 年に至るまで公刊されることのなかったことをインド国民の忘恩, あるいは, 忘恩の蔓延している時代風潮のせいであるとしている。そしてこれがラームプラサードの処刑後間もなくして刊行されたものの英官憲によって禁書とされたまま 30 年の月日を経てようやく刊行されるに至ったことを嘆いている。ナチスの手により 1943 年 9 月 8 日にベルリンで処刑されたチェコの反ナチ抵抗運動の殉難者である作家・ジャーナリストのユリウス・フーチク (1903 - 1943) が刑務所で処刑前に書き残した手記『処刑台からのレポート』(邦訳は栗栖継訳「嵐は樹をつくる - 死の前の言葉」, 東京・学

芸社、1952 に所収) が 1957 年の時点でインドの 9 言語に翻訳され出版されていることを思い合わせるとその嘆きは当然のことであつたろう。

ゴーラクプル刑務所で処刑を前にして書かれたラームブラサードのこの文章は名簿用紙に鉛筆書きで記されていたと伝えられる。それは同情したというよりも恐らくその人柄に尊崇の念を抱いた看守たちの手によってゴーラクプル市の著名な国民会議派幹部で「スワデーシュ」誌の編集長であったダシャトブラサード・ドゥヴィヴェーディーのもとに 3 回に分けて届けられた。最終回の分は処刑の前日に届けられたという。ドゥヴィヴェーディーはそれをグループのメンバーで後にラーホール陰謀事件で終身流刑になったシヴ・ヴァルマーに委ねた。シヴ・ヴァルマーはそれをカーンプルの Hindustan Republican Association の同志でジャーナリスト・社会活動家で日刊紙ブラタプ(प्रताप)の編集長ガネーシュジャンカル・ヴィディヤールティー गणेश शंकर विद्यार्थी(1890-1931)の手元に届けた。本書の序文を書いている元同志のバグワーンダース・マーホウル भगवानदास माहौरの言によればこのグループの生き残りで後に華々しく烈士として果てたチャンドラシェカル・アーザードやバガット・シンなどは内容に悲観的な要素や内部抗争にかかわる記述が多いとの理由でこれの刊行に反対したもののヴィディヤールティーはこれを『カーコリーの烈士』の巻頭に収めて刊行した。命を代償として書かれたものだけにヴィディヤールティーは官憲から予想される危険箇所を削除した以外には手を加えなかったのだとしてしている。シヴ・ヴァルマー、ヴィジャヤクマール・シンハー、スレンドラナート・パーンデー、ブラフマダットらは秘密武装組織の活動をするかたわらヴィディヤールティーの指導下にカーンプル労働者会の活動を始めていた。パンジャブで結成された青年インド会(Naujawan Bharat Sabha)の中心的な活動家はバガット・シン、バガヴァティーシャラン・ヴォーラー、スクデーヴ、ケーダールナート・サヘガルなどであったがこれらのグループがやがてバガット・シン、アーザードなどの指導下に 1928 年 9 月に Hindustan Socialist Republican Association (Army) の結成へと発展した。なお、ヴィディヤールティーは 1931 年 3 月にバガット・シンの処刑に抗議してカーンプル市で行われた商店閉鎖のストライキに際して発生したヒンドゥーとムスリムの間の対立と衝突であるいわゆるコミューナル騒動の鎮静化に奮闘する中で暴徒に襲われて犠牲者となった。

また、マーホウルはフーチクを書いたものを獄外に持ち出す役割を果たした看守 A. コリンスキーの名をフーチク夫人グスタ・フーチコヴァが感謝の念をこめて前書きに記していることに触れてラームブラサード・ビスミルの手記が獄中で書かれ獄外へ持ち出され刊行されるのを可能にした功績の大半は 24 時間監視の目が光り頻繁に交替のあるなかで身の危険を冒してまでも協力した多数の看守や職員たちにあるとし、インド独立後その功を自ら語るでもなく名を求めるでもなかった人々の名を特定することが出来ないのは偏に自分たちインド国民の忘恩の所業だと編者同様に嘆じている。

本書の編集がどのような作業を経てなされたかについては言及がなく不明であるが、本訳は概ね原本に従っている。

なお、本書での固有名詞の表記は原則としてデーヴァナーガリー文字での表記及びローマ字表記に基づいているが、日本語で広く行われている慣用的な表記をそのまま用いている場合もある。従って特にベンガル語での発音との隔たりがかなり大きい場合があるなど表記に不統一

があることを予めお断りしておく。

参考・引用文献

- D.P.Karmarkar, Bal Gangadhar Tilak - A Study, Bombay, 1956
H.Mukherjee & U.Mukherjee, 'Bande Mataram' and Indian Nationalism, Calcutta, 1957
Hemendranath Das Gupta, Deshbandhu Citta Ranjan Das, Calcutta, 1957
V.P. Varma, Modern Indian Political Thought, Agra, 1961
R.C. Majumdar, History of the Freedom Movement in India, Vols. I,II, III. Calcutta, 1962-63
V.C. Joshi (ed.), Lajpat Rai - Autobiographical Writings, New Delhi, 1965
Arun Bhattacharjee, A History of Modern India(1707-1947), New Delhi, 1976
Motilal Bhargawa, History of Modern India, New Delhi, 1987
Marie Louise Burke, Swami Vivekananda in the West, Calcutta, 1987
Encyclopedia of World Biography, Detroit, 1998
Sho Kuwajima, The Mutiny in Singapore, New Delhi, 2006

- बनारसीदास चतुर्वेदी (सं०), रामप्रसाद 'बिस्मिल' - अमर शहीद रामप्रसाद 'बिस्मिल', दिल्ली, 1958
मन्मथनाथ गुप्त, भारतीय क्रान्तिकारी आन्दोलन का इतिहास, दिल्ली, 1960
इन्द्रविद्या वाचस्पति, भारतीय स्वाधीनता संग्राम का इतिहास, नई दिल्ली, 1960
सुन्दरलाल, भारत में अंगरेजी राज (I, II), दिल्ली, 1960-61
बनारसीदास चतुर्वेदी (सं०), शचीन्द्रनाथ सान्याल - बन्दी जीवन, दिल्ली, 1963
इन्द्रविद्या वाचस्पति, लोकमान्य तिलक और उनका युग, नई दिल्ली, 1964

- フーチク (栗栖継訳), 嵐は樹をつくる - 死の前の言葉, 東京, 1952
J. ネルー (磯野勇三訳), ネルー自伝, 東京, 1955
荒畑寒村, ロシア革命の曙, 東京, 1960
山本達郎 (編), インド史, 東京, 1960
玉城康四郎, 近代インド思想の形成, 東京, 1965
荒畑寒村, ロシア革命前史, 東京, 1972
森本達郎, インド独立史, 東京, 1972
旭季彦, ナロードニキ運動とその文学, 東京, 1991
スミット・サルカール, 新しいインド史, 東京, 1993
ナターリヤ・エム・ピルーモヴァ (左近毅訳), クロボトキン伝, 東京, 1994
辛島昇 (編), 南アジア史, 東京, 2004
内藤雅雄・中村平治 (編), 南アジアの歴史, 東京, 2006

I

はじめ

トーマルダールにはチャンバル川^{*1}沿いに二つの村があるが、その住民が傲岸不遜というか大胆不敵だということで、その名はグワーリヤル藩王国^{*2}の中では知れ渡っている。権力者に遠慮や気兼ねをしないしへつらったりしない。ザミーンダールたちは気の向いた年には地税を納めるが、そうでない年にはきっぱりと断るのである。タフシールダール（郡長）などの役人が来るとこの連中は荒野に入り込んでしまい幾月もの間戻ってこない。家畜なども伴っており食事などもそこでとる。後に残した家には地税の代わりに競売にかけられるような金目の物は一つ残して置かない。ある男は地税を払わなかったおかげでかえってその土地の一部が課税の対象から外されたという話さえある。はじめ何年もの間逃げ回っていたのだが、ある時欺かれて捕らえられた。郡の役人どもがさんざんひどい目に遭わせた。男は幾日もの間飲まず食わずで縛られたままであった。最後には焼き殺すと脅かされもしたし枯草をかけて火までつけられたのだが、その男はおれ一人が地税を納めぬということでグワーリヤルの殿様の蔵に不都合が生じることもあるまい。世間は反抗心だけから時間を費やしている男がいるとは知るはずもあるまい、とうそぶいた。その旨を御上に報告したところ、その男の土地は今後免税にするということになった。似たようなことでこの村の連中が聞いたこともないような遊びを思いついたことがあった。藩王の軍営から60頭ものラクダを盗んで荒野に隠してしまったのである。その報告がなされるとその村は大砲で吹き飛ばしてしまえという命令が下された。ところが、どのような話し合いがなされたのか分からないが、ラクダは返却され役人たちもこれほどの広い領土に勇ましい人間がわずかにこれほどしかいないのだから大砲で吹き飛ばすのは止めたがよからうと説得された。そこで大砲は撤収され村は吹き飛ばされずに済んだということである。この連中は近頃は藩王国の住民を苦しめることはあまりなくなったが、イギリス領の土地へちょいちょい出かけてきては暴れ回り金持ち連中の屋敷を夜襲しては夜の内に荒野へ逃げ込んでしまう。荒野に入り込んでしまうと警察も軍隊も指一本触れようにも触れられないのだ。この2か村はイギリス領（連合州）との境界から約15マイルの距離にあるチャンバル川沿いに位置している。その有名な一族に私の祖父のナーラーヤン・ラールが生まれた。祖父は家庭内の争いと兄嫁のあまりにもひどい仕打ちに余儀なく生まれ故郷を離れ流浪することになった。最後に妻と二人の息子を伴ってシャージャハンプル市^{*3}にたどりついた。二人の息子の兄のほうが私の父のムラーリーダールである。当時父は8歳で父の弟すなわち私の叔父のカッリヤーンマルは6歳であった。その頃この地域は猛烈な飢饉^{*4}に見舞われていた。

（註）

^{*1} チャンバル川 ジャムナー川の支流の一。マディヤ・プラデーシュ州西部のインドール近くのヴィンディヤ山脈山中に発して北東方向へ向かいラージャスターン州を経てその後南東方向へ進んでアーグラ市の東南方でウッタール・プラデーシュ州のイターワーから約40kmのところではジャムナー川に注ぐ全長約1000kmの川。

*2 グワーリヤル藩王国（原文は ग्वालियर राज्य, 英語表記では Gwalior State）現在はマッディヤ・プラデーシュ州の北端に位置する地域だが、インドの独立達成まではインドールやボーパールなどの藩王国と並び Central India Agency と呼ばれた 8 藩王国のグループに編入され Political Officer を介してイギリス副王（インド総督）の支配下にあった。かつてはマラーター同盟の一翼を担ったシンディアー家の興した藩王国。1920 年における藩王国の人口は約 310 万人。なお、藩王はマハーラージャーの称号を持っていた。グワーリヤル県の県庁所在地であるグワーリヤル市は北緯 26.14°, 東経 78.10° に位置する。同県の 2001 年における人口は約 163 万人。

*3 シャーージャハーンプル市 शाहजहाँपुर はウッタル・プラデーシュ州中北部に位置し（北緯 27.54°, 東経 79.57°）同名県の県庁所在地でもある都市。同県の 2001 年における人口は約 255 万人。

*4 脈略からすれば、19 世紀 70 年代後半に西北インドの広域に生じた飢饉の一つと考えられるが特定は出来ない。

苦難の日々

あらゆる手を尽くしてようやくにしてシャーージャハーンプルのある薬種商の店に祖父のナーラーヤンラールは、月俸 3 ルピーの仕事を見つけたのであった。飢饉の頃にそれも 3 ルピーの月収で 4 人の生命を維持して行くのは不可能事であった。祖母は一日一食にしてそれもお腹半分で我慢しながら子供たちには食べさせようと苦心したが、それも無理なことであった。トウジン稗、粟、稗、モロコシ、などで乗り切ろうとしたが、それでもやりくりがつかなかったのでアカザ、ヒヨコマメや一番安価な野菜を買い求めそれに一番安価な穀類を半々に混ぜたものを加えて自分が食べ、夫や子供たちには大麦やヒヨコマメの粉に少量の塩を加えてパンを焼いて食べさせてその日暮らしをしていた。昼中は腹半分でもどうにか過ごせるが夜中に空腹をおさえて朝を待つのはどれほど辛いことであっただろうか。

食べるだけでこの有様であったのだが、その上に衣服と家賃の心配までしなければならない。祖母はどこか暮らし向きのいい家で小麦を石臼で碾く賃仕事でも見つければと思ったが、言葉*1 さえも土地のものとは違っているような見知らぬ者にたやすく見つかるはずもなかった。だれ一人粉碾きをさせてはくれなかった。飢饉の折りである。盗み食いをされてはと心配だったのだ。必死の努力が実って賃仕事をさせてもよいという人が一人二人見つかったが、それまでその仕事をしてきた人に暇を出すのも大変なことであった。このように色々な障害があったのだが、6, 7 セール*2 の小麦を碾く仕事が見つかるようになった。その頃 5 セールにつき碾き賃が 1 パイサー*3 であった。喰うや喰わずで 3, 4 時間粉を碾いて 1 パイサーか 1.5 パイサーが手に入るのであった。それから家に戻っても子供たちの食事の支度をしなければならなかった。

2, 3 年間もこのような状態が続いた。祖父はしばしば故郷へ戻ろうと誘ったが、祖母は、故郷を捨て家、財産を捨ててこのような塗炭の苦しみを与えた人たちのところへ今さらお情けを乞いに行くよりもいっそ死んでしまったがよい。いつまでもこのままではあるまい、と言って頑として夫の話に応じなかった。こうしてあらゆる苦労を味わいながらも祖母は故郷に戻らなかった。

4, 5 年経つと立派な家柄の人とも顔見知りになり祖母自身も良家の出なのだが今は不遇をか

こっているのだということが知れると多くの奥様たちも祖母を信用してくれるようになった。飢饉も去り時には良家の人から頂き物をするようになり食事に招かれるようになった。そうこうしている内に、子供のない裕福な家庭の人が祖母にあの手この手を弄して子供を一人養子にすれば、お金はいくらでも出すという話を持ちかけられた。けれども祖母は理想の母としてそのような誘惑には一瞥もくれずどうにかながらも二人の子供を育てたのであった。

祖父は必死の思いで仕事に励み、それにバラモンとしての仕事^{*4}をしたので僅かながらもお金が貯まった。幾人か親切な人の口利きもあって私の父は学校に通えるようになった。祖父は精を出したので給金も増えて月に7ルピーとなった。その後、祖父は勤めをやめ両替を始めそれが日に6、7アンナの収入になった。苦難の日々も努力と勇気で乗り切ってしまったが、それというのも皆祖母のおかげであった。祖母のあの勇気と忍耐力は正に神様から授かった力だと言うべきであろう。そうとでも言わなければ説明がつくまい。全くの見知らぬ土地に来て賃仕事をして食べ物心配から子供に教育を受けさせることまでどうして出来たであろうか。それも祖母は、それまで他人の家で働いたこともなくこれまで暮らしてきたところとは言えばヒンドゥー教の風習が厳しく守られ、その遵守のためには人の命など爪の垢ほども考えない人たちの住む土地であった。彼の地ではバラモン、クシャトリヤ、あるいは、ヴァイシュヤの妻女であれば外出の際には必ず深々とグリーンガト^{*5}をせずには絶対に外出出来ないのだ。シュードラの女たちでさえも道を歩む際には必ずグリーンガトをすることになっていたが、その衣裳からして見れば直ちにいわゆる卑しい身分の者と分かる独特のものであったのだ。それは非道と言うべき風習となっている。かつてあるチャマルの女がイギリス統治下の土地から嫁に来たことがあった。ところが、その女はチャマルの衣裳こそ身につけていたのだが、ビチュワー^{*6}をはめていたのだ。地主はその足元に目をとめ訊ねてみるとチャマルの嫁であることが分かった。地主は靴を履いたまま近付いてお辞儀をしようと跪き地主の足元に触れようとした女の手の指を思いきり踏みつけた。指は切れた。地主は、チャマルの女如きがビチュワーをはめるようになったら高いカーストの女たちは一体何をはめればいいのか、と言った。この連中は全く粗野で蒙昧でありながらカーストの驕りに酔いしれているのである。どんなに貧しくて無教養のバラモンやクシャトリヤであれ、またその年齢がどうあろうとも、連中がシュードラの部落を通る時には、どれほど富裕であろうともたとえ年長者であろうともシュードラのほうにはわざわざ地に伏して挨拶をしなければならないのだ。それをしなければ、バラモンやクシャトリヤはその男を足蹴にすることが出来るし皆がその男が悪いのだと言って侮るだろう。娘や妻が不品行であったと疑われると何の配慮もなく殺され、チャンバル川に投げ込まれるのである。同じようにだれか未亡人が不身持ちをしでかしたり、またそのような疑いをかけられたりすると、たとえ身ごもっているすぐさま切り刻んでチャンバル川に投げ込んでしまう。それもだれにも気付かれないように。彼の地の男たちも身持ちはいい。だれの嫁であろうと娘であろうと、わが嫁わが娘と考えて遇する。女子を守るためには自分の命など何とも思っていないのだ。このような土地に嫁いで色々な風習を目にしながら祖母はかほどの勇気を示したのであった。祖母にしか出来ないことだったのだ。

神様の慈悲の下、苦難の日々は去った。父は僅かながらも教育を受け祖父は家も一軒手に入れた。他人の軒先を乞うて歩いた一家はゆっくりと腰を伸ばす場所をようやく得た。祖父母は私の父と共に実家に行き私の父に嫁を取らせた。2、3ヶ月間そこで過ごした後、嫁を連れてシャージャハーンプルに戻って来た。

(註)

*1 出身地のグワーリヤル藩王領からシャージャハーンブルまでの距離は直線でも約 300km ほどはある。シャージャハーンブル地方は東部ブラジ・バーシャー語の話される地域でありグワーリヤル地方は南部ブラジ・バーシャー語、もしくは、ブンデーリー語の話される地域に入る。

*2 当時は 1 セールは約 930 グラムに相当したものと考えられる。

*3 旧通貨単位では 1 パイサーは 64 分の 1 ルピー、1 アンナは 16 分の 1 ルピー。

*4 冠婚葬祭などヒンドゥー教徒の家庭内の祭事にかかわる仕事。ここでは副業的な仕事を指す。なお、ラームブラサードがパンディットという敬称をつけて名を呼ばれるのは彼がブラーフマンの出身であったからである。

*5 成人女性、もしくは、少女期を過ぎた娘たちが外出時や家庭内でも特定の関係にある男性の前でサリーなどの着衣の一部などで顔を覆う慣習。

*6 ビチュアー बिछुआ 夫が存命である女性の幸せな境涯のしるしとして女性が足の指につける銀や真鍮などで作られる指輪。ビチャー बिछिया と呼ばれる。親指につけるものをビチュアー、その他の指につけるものをビチャーと区別する表現もある。ここでの脈略ではいけば最も差別の対象となってきたチャマール・カーストの女性がこの地域ではつけてはならないとされていた装身具と思われる。

家庭

結婚後、父は月給 15 ルピーで市役所に勤務することになった。これと言うほどの高い教育を受けていたわけでもなかったので仕事になじめなかった。1、2 年の内に勤めを辞めて自分で仕事を始めようと骨を折った結果、裁判所で収入印紙の販売を始めた。父は生涯の大半はこの仕事に励んだ。平均的な所帯持ちとしてこの仕事に従事するかたわら子供に教育を施し家族を養い近所では名も知られるほどになった。金貸しもしていたし、牛車を 3 台こしらえて賃貸もしていた。身体鍛錬に熱心な人でとても頑丈な体格の持ち主だった。決まったようにレスリングの稽古場に出かけては稽古をしていた。

最初男の子が産まれたのだが亡くなりその翌年にこの私がヴィクラマ暦の 1954 年^{*1}のジェート月の白半月の 11 日に生まれた。あれこれ願を掛けたりお守りやお札を受けたりして祖母は私の命を懸命になって護ってくれた。多分赤子にとりつく病魔がわが家にいたのだろう。私も先に生まれた子と同じようになりかけた。生まれてひと月かふた月ほど経った頃のことである。だれかが、もしも子供に病魔がとりついていたら、白兔を私の体の上でぐるぐる回してから地面に下ろしてみれば、兔は直ぐに死んでしまうだろうと言った。実際にそうなったのだと言うのだ。白兔を一羽私の体の上から地面から下ろすと兔は 3、4 回ぐるぐる回ったあげく死んでしまったという。それは若干あり得ることかとも思う。と言うのは、医薬には (1) 神的なもの、(2) 人的なもの、(3) 鬼的なものの三種がある。第三のものはいろんな畜生や鳥類の肉や血が用いられるものであって、これは医術の書物にも載っている。その中の一つで好奇心をかき立て驚嘆させさせるものは小児病のクループ（偽膜性喉頭炎）に罹った子供の前に蝙蝠を引き裂いて置いてやるとその生後 1,2 か月の子供がその蝙蝠の血をすすり病気が治癒するというのだ！これはなかなか効能のある薬であって、ある上人様が教えて下さったものである。

私が7歳になると父はヒンディー語の文字を教えてくれるとともにあるマウルヴィー^{*2}のところへウルドゥー語の勉強に行かせてくれた。父がレスリングの稽古場へ出かけて行っては自分よりも腕力もあり体格もよい連中を投げ飛ばしていたのを私はありありと記憶している。それから間もなくのことだが、父はベンガル出身の人（チャタルジー氏）と昵懇になった。チャタルジー氏は西洋の薬を商っておられたが大変なマリファナ好きであった。一度に半チャターンク^{*3}ものマリファナを吸うほどであった。父も付き合いをしているうちにマリファナを吸うようになりそのため体はとても衰弱した。10年の間に体はすっかり生気を失い骨皮だけになった。チャタルジー氏は酒も飲むようになり肝臓が肥大してついに命を落とすことになった。私がうるさく父を説得したので父はマリファナを吸うのを止めたが、それは大分後になってのことであった。

私の後に続いて妹が5人、弟が3人生まれた。祖母は家の風習^{*4}に倣い女の子を殺すようにと言ったが、母が反対したので妹達は命拾いをした。私の家の系統では娘の子を育てたのは始めてのことだった。しかし、そのうち妹と弟が二人づつ亡くなったので、今現在（1927年）生き残っているのは10歳の弟と3人の妹である。母の努力で妹たちは3人とも立派な教育を受けたし立派な結婚式も挙げてもらった。これまではわが家系では一人の娘も嫁がずじまいだった。と言うのは生かしてもらえなかったからなのだ！

祖父はとても真っ直ぐな性格で亡くなるまで両替の仕事をしていた。それに牛を飼うのが大好きで自らグワーリヤルに出かけて行っては立派な牛を買い求めて来ていた。よい牛は毎日10セールから15セールほどの乳を出す。牛はとてもおとなしくて搾乳の際に足を縛りつける必要もないし好きな時にだれが搾ってもよい。子供の頃私は牛の乳首に直接口をつけて乳を吸ったものだった。全くあの辺りの牛は見事な体格をしているものだ。

祖父は私にたんまり乳を飲ませてくれた。チョウサル遊び^{*4}が大好きな人だったが、夕方には欠かさずシヴァ寺院に詣でて2時間ほどご詠歌を唱えたりお祈りを捧げたりしていた。およそ55歳で亡くなったのだと思う。

父は私が小さい子供の頃から教育には熱心だった。私がちょっとした間違いでもすればひどく打たれたものだった。今でもはっきり覚えていることなのだが、私はナーガリー文字の習い始めにどうしても(स)「う」の字が書けなかった。一生懸命に努力はするのだが父が裁判所に出かけて行くと私も遊びに外へ出かけていた。父は家に戻ると私にすの字を書けと命じる。私には書けなかった。私が遊びに出かけていたのを知ると父は金属製の物差しでそれがひん曲がるほど激しく私を叩いた。私は祖父のところへ逃げ込みようやく助けてもらうのだった。私は小さい時から相当な悪童だった。父が蟻を喧しくしていたのだがそれでもひどいいたずらをしていたものだった。一度はどこかの果樹園に行って桃の実を皆たたき落としてしまった。園丁が追いかけてきたが捕まえられはしなかった。園丁はたたき落とされた桃をみな拾ってわが家まで持ってきた。その日はしこたま叩かれたので二日間は起きあがれなかった。このように叩かれながらも私のいたずらはどうしても止まなかった。子供の頃それほど叩かれたおかげで恐らくこんなに頑丈で忍耐力のある体になったのだと思う。

(註)

^{*1} ヴィクラマ暦 1954 年のジェート月は西暦 1897 年の陽暦 6～7 月に当たる。

^{*2} マウルヴィー これにはイスラム教法学者の意もあるが、ここではペルシア語やアラビ

ア語、ウルドゥー語などを教えていた寺子屋のような私塾の教師や住み込みで雇われていたような家庭教師を指す。

*3 チャターンク (छातर्क) 1 チャターンクは 16 分の 1 セールに相当する重量単位。(→ 苦難の日々 註 **3 セール)

*4 家の風習 原文には घर की प्रथा के अनुसार とある。高カーストの女兒の結婚難を避ける風習の一つとして行われていた嬰兒殺しと考えるべきものか。

*5 チョウサル (चौसर) 二人が 3 個のサイコロを用いてそれぞれ 2 色 8 個の駒を用いて対局するゲーム

少年期

私がウルドゥー語課程の 4 年級を終えて 5 年級に進んだのは 14 歳の頃だったかと思う。その間、父の金庫から金を盗み取る癖がついてしまった。盗んだ金で小説を買って求め大いに読んだものだ。本屋の主人は父の知り合いだったので父に言いつけた。そこで私は警戒されるようになった。そのためその店からは本を買わないことにした。まだ他にも一、二悪い癖がついた。たばこを吸うようになったことだ。それに時にはバーング¹を飲むようになった。子供のうちに自由に金が入りウルドゥー語の恋愛小説やガザルを読みふけていたおかげでその悪影響が現れて来たわけである。不良になりかかろうとしていたところへ幸いに神の助けがあった。ある日バーングを飲んだ後、意識もはっきりせずぼんやりしている状態だったので父の金庫がかたっと音を立てた。母が不審に思い私をその場で捕まえて鍵を取り上げてしまった。私が物入れに用いていた箱も取り調べられ中からかなりの金が出てきたので何もかもばれてしまったのだった。小説の類はその場で引き裂かれてしまった。

盗みが露見したのは神の慈悲だと思う。そうでなければ後 2、3 年の内にどのような人間になっていたかは見当もつかない。その後も私は幾度も機を窺ったが、父は錠前を取り替えていた。どうにもならなかった。それから折りがあれば母の金を失敬することにしていた。このようなことで悪癖に染まっていたものだから 2 度もウルドゥー語中級の試験に落第した。そして私は英語を習いたいと言った。父は英語を習わせたくなくて何かの職に就かせたかったのが母の力添えで英語を習いに行けることになったのだった。翌年にウルドゥー中級の試験で不合格になった時、壁一つ隔てた隣のお寺に一人のプジャーリー (堂守) がやって来られた。大変立派な方だったので私はその方のところへ伺うようになった。

寺に出入りしヒンドゥー教の祈祷法や礼拝の儀礼について学ぶようになりプジャーリーがなさる有り難い説教に感銘を受けるようになった。それから多くの時間を礼拝や読書に費やすようになった。師は私にブラフマチャリヤ^{*2}、すなわち、禁欲について熱心に教え諭された。師は私を導いて行く案内者・先達になられたのであった。それから私はまた別の方の見よう見まねで肉体の鍛錬をするようになった。もう私はバクティ・マールガ^{*3}、すなわち、信愛道に喜びを見出すようになり 4、5ヶ月の内に体の鍛錬も熱心をするようになった。それまで身についていた悪癖も妄想も無くなってしまった。学年が改まると私はミッションスクールの 5 年生に入学した。それまでには私の悪癖も無くなっていたのだが、ただ煙草だけは止められずにいた。吸う分量も多く一日に 5、60 本は吸っていたのだ。一生涯止めることが出来ないのかと思

うと残念で仕方がなかった。入学して間もなく同級生のスシールチャンド・セーン君と特に親しくなり同君のおかげで喫煙を止めてしまった。

お寺に参詣するのを見込んでムンシー・インドラジート氏が私にサンディヤー^{*4}をするようにと薦められた。同氏はその寺に住んでいたある人のところに入りしっておられた。体の鍛練に励んだおかげで私の体はしっかり引き締まり血色までよくなった。サンディヤーとは何のことか知りたくなった。氏はアーリヤ・サマージ^{*5}について若干教えて下さった。その後、私は『サティヤールタ・プラカーシャ』^{*6}を読んだ。心境に一大転換を来した。これを読んだことが私の生涯に新しいページを開くことになった。それからその中に書いてあるブラフマチャリヤ（梵行）に関する厳しい戒律を守るようになった。板の上に毛布を一枚広げて寝ることにし、朝は4時に起床する。沐浴や朝の礼拝のサンディヤーを済ませてから体操をする。しかし、心は落ち着きを得ない。夕食はとらないことにして僅かばかりの牛乳を飲むことにした。いきなり悪癖を止めようとしたために時々夢精があったりした。そこでまたある人の言に従って塩も摂取しないようにした。茹でただけの野菜や豆汁のみの一日一食とした。唐辛子や酸味のものは一切口にしなかった。こうして5年の間、塩は一切とらなかった。塩断ちしたおかげで体の穢れはすべて失せ、人にも誇り得るような健康体になった。皆は私の健康な様子に驚きの目を見張ったものである。

間もなく私はアーリヤ・サマージの熱心な会員となり会の集会によく出席するようになった。サンニャーシー^{*7}やマハートマー^{*8}たちの説教も傾聴した。どなたかサンニャーシーが寺に來られることがあるとその方のそばでありとあらゆるお世話をした。というのも制息の行であるプレーナーヤーマ^{*9}を習いたい一心からであった。サンニャーシーの名を耳にすると町から3, 4マイル離れたところにもお世話をしに出かけて行ったものだった。それにその方がどの宗派に属する方でも構わなかったのである。英語課程の7年級に在籍していた時のことだが、サナータナダルミー^{*10}のバンディット・ジャガットブラサード師がシャージャハーンブルにお見えになられたことがあった。師はアーリヤ・サマージを論難された。そこでアーリヤ・サマージ側の人たちはそれに反駁すると共にバンディット・アキラナンダ師を招き論戦を展開していただいた。論戦はサンスクリット語で行われ人々により影響を与えた。私のしていることを見て近隣の人たちが私の父に言いつけた。父はアーリヤ・サマージは論戦で負けたではないか。もう会との関係を断てと言った。私は、アーリヤサマージの教えは永劫不変のものだからだれにも絶対に負けはしないと父に言い返した。随分と議論したが、父は意地になって、もしお前がアーリヤ・サマージとの縁を切らなければ寝ている間に殺すことになるから会を辞めるか家を出るかのどちらかだ、とまで言った。私も父がもしこれ以上に興奮して何か物でも投げつけて思いもかけぬ不幸なことが起こってはつまらないので家を出るのがよいと考えた。私はカミーズ（シャツ）を一枚着たきりで立っており、パージャーマーを脱ぎドーティーに着替えようとしているところだった。パージャーマーの下にはランゴート（下帯）を締めてはいたのだが、父は私の手からはドーティーをはぎ取り、「出て行け」と言った。私も怒りに駆られた。私は父の足元にひれ伏して挨拶をして家を出た。行くあてもなくどうすればいいのかわからなかった。町の中には匿ってもらえるような知り合いもなかった。私は林の方へ歩き、まる一昼夜樹上に腰かけていた。ひもじくなれば畑に生えているヒヨコマメ（雑豆）の実を採って食べ、川で沐浴し水を飲んだ。翌日の夕方バンディット・アキラナンダ師の講演がアーリヤ・サマージの寺院で予定されていた。私がそこへ行き一本の木の下に一人立って話を聞いているところ

へ父が二人の人を伴ってやってきて私を捕まえた。父は私をそのまま学校の校長のところへ連れて行った。校長はクリスチャンであった。私は事の次第を全部話した。校長は父に、ものの道理をよく弁えている息子をむやみに打ったり叩いたりしてはならないと諭した。その後私にもいろいろと説諭した。その日からは父は私に手をかけることもなくなった。それというのも私が家出すると家族全員が苦痛を味わったからであった。一昼夜だれ一人食事もしなかった。一人息子が入水したのではないか、鉄道線路に飛び込んだのではないかなどと大変な心配をしたのであった。父も心に大きな痛手を受けたのだった。それからは父は私の言うことすることの何かにつけて我慢するようになり反対することもなくなった。私も勉強に励み成績もいつもクラスで一番になるようになった。これは8年級まで続いた。私が8年級の時、ソーマデーヴァ・サラスヴァティー師がシャーージャハンプルのアーリヤ・サマージにおいてになられた。師の説教は民衆に深い感銘を与え幾人かの方の要請もあって師はしばらくアーリヤ・サマージ寺院に逗留された。お体の具合がすぐれずシャーージャハンプルの空気がよからうということと逗留されたのであった。私は師のところへ出入りし本当に一心不乱に師にお仕えした。そのおかげで私の生涯に新しい変化が生じた。日中はもちろんのこと、夜中の2時や3時までご養生のお世話をした。いろいろな薬剤も用いてみた。幾人か心配してくれる人もあったが、病はよくならなかった。師は色々な形で私を教導して下さいました。私はそのお導きを実行に移そうと努力を惜しまなかった。正に私の師であり先導者でいらしやう。師の下された教訓が私の精神力を目覚めさせたのであるが、これについては改めて記す。

青年たちが数人集まってアーリヤ・サマージ寺院内にアーリヤ青年会を設立した。毎週金曜日に会合があって宗教書を読んだり特定の題目について文章を書いたり討論も行った。青年会の代表として私は人前に立って話をする訓練を積んだ。街に交易の市が立つ時には青年たちはちょいちょい連れだって宗教活動に出かけたりしていた。市場で講演をしてアーリヤ・サマージの教義を広めていた。そのようなことをしているうちにイスラム教徒と言い争いになった。警察は喧嘩や騒動になるのを懸念して街頭での講演を禁じた。アーリヤ・サマージの会員たちは青年会の活動を見て青年会を自分たちの指図に従わせようと思った。しかし、青年というのは不当な干渉であれば受けつけないものだ。アーリヤ・サマージの寺院には青年会の連中が会を開かないようにと鍵がかけられるようなことになった。その上、もし会合を開けば警察を呼んで追い出してしまおうとまで言われた。数カ月間われわれは広場で会を開いていたが、青年たちのことである。会はいつまでもは続かずとうとう解散になってしまった。そこでアーリヤ・サマージの会員たちは安心したというわけである。青年会の名は町では知られていたのだがラクノウで कांग्रेस, すなわち、インド国民会議派の年次大会が開催された時にインド青年連合会の年次総会も開催された。その時最も多くの賞を受けたのはラーホールとシャーージャハンプルの青年会であった。新聞でも称賛されたものである。

その頃ミッションスクールのある生徒と親しくなった。時々青年会の会合に顔を見せていたが、私の演説にかなり感激していたようである。もともと私の家の近くに住んでいたのであるが、お互い親しくはしていなかった。交際をしているうちに親しみも増して行った。農村部の出身で実家は大きな村にあった。そこの人たちは皆免許もなしに銃砲刀剣を所持しており、多くの人は銃や短銃を所持していたが、それらはその村で製造されるものであった。いずれにも雷管がついていた。件の友人も小型のピストルを一丁所持しており外出時には携行していた。親しくなると友人は私にピストルを貸してくれた。私はかねてからこの種の武器を持ちたいと強

く願っていた。と言うのは、父に敵意を抱いている人間がいて理由もなく棍棒で父を打ち叩いたことがあったからである。ピストルが手に入ったら父の敵をやっつけてやろうと思っていたのだ。友人はこのピストルを所持はしていたのだが実際に撃ってみたことはなかった。私が実際に撃ってみたところ全く役に立たないことが判った。私はそれを友人のところへ持って行って返却した。その友人とはすっかり昵懇になり私は夕方キール（乳粥）を入れた皿を持って彼の家に行き二人一緒に食べたりするほどの仲だった。友人はソーマデーヴァ師のところへも私と一緒に出かけていた。友人の父親が田舎から出てきて私たちの交友関係を知ると甚だ不快に感じ、息子のところへ遊びに来たり一緒に連れ出したりしないようにと私を叱りつけた。もし言うことを聞かないなら村から人を連れてきてひどい目に遭わせるとまで言った。私は友人のところへ出かけるのを止めてしまったが友人は相変わらず私のところへやってきていた。

およそ 18 歳になるまで私は汽車に乗ったことがなかった。私は一度友人たちと三等車の切符を買ってインタークラス^{*11}の車輛に乗った際にはそうするのがいやで仲間たちにこれは盗みと同じだから皆はインタークラスの代金を駅長に払わなければならないと言うほど真っ正直になっていた。一度は父がある民事事件の訴訟に関わった際、弁護士に何か用があれば息子に言いつけて代わりにさせて下さいと言いつ残して出かけて行ったことがあった。何か必要が生じて弁護士が私を呼び寄せて父に代わって委任状に署名をするようにと言った。私はこれは人の道に反することだからどういうことになるうともそれは出来ないことだと即座に断った。弁護士はこれは百ルピー以上の金を巡る訴訟だとかこちらの訴えが却下されることになるか言っているいろと説得したのだが何の効果もなく私は署名しなかった。たとえどのような結果になろうとも嘘だけは吐かずにきた。

母は私の信仰上のことや教育上のことについては大変力になってくれた。朝は 4 時には起こしてくれた。私は毎日決まって護摩を焚いていた。妹の結婚のために両親はグワーリヤルへ行った。祖母はシャージャハーンブルに残っていた。私は学年末試験があったのでそれを済ませてから式に参列するため出かけた。花婿の行列はすでに到着していた。村の外れで行列の中に芸者が呼ばれてきているのが判明したので家にも行かず式にも参加しなかった。式には一切参加しなかった。私は母に少しお金をくれるよう頼んだら 125 ルピーほどもらったのでそれを持ってグワーリヤルへ行った。リボルバーを手に入れる絶好の機会だった。藩王国では簡単に武器が手に入ると耳にしていたからである。懸命に探し回った。雷管のついた銃やピストルは手に入るのだが、実包の入ったものについては全く様子が分からなかった。ようやく手には入ったものの 75 ルピーした雷管つきの五連発のリボルバーはつかまされた代物だった。藩王国製の弾薬と雷管を若干売ってくれた。私はそれを手に入れて嬉しくなりシャージャハーンブルに真っ直ぐ帰った。リボルバーに弾を装填してみたが弾は 20 メートルほども飛ばなかった。弾薬がよくなかったからだ。甚だ不快な思いがした。家に戻った母が何を買ってきたのかと訊ねたが私は曖昧な返事をしておいた。金はほとんど使い果たしていた。20 ルピー足らずの金貨が一枚残っていただろうか。もっともそれは母に返したが。私は金の必要があるといつも母に頼んだ。母は私の願いをいつも叶えてくれた。私の通っていた学校は家から 1 マイルほどのところにあったので自転車を買ってくれるように頼んだら 100 ルピーほど出してくれた。それで自転車を購入した。その頃私は英語の 9 年生になっており宗教に関するものやインドに関する書物が欲しい時には母に頼んで金を出してもらっていた。ラクノウでのコングレス（インド国民会議）の年次大会に出掛けたくて仕方がなかった。祖母と父はずっと反対していたが、母は金

を出してくれた。ちょうどその頃シャージャハーンブルにインド国民会議年次大会開催の支援をする奉仕団が結成された。私は一生懸命に奉仕団の活動に協力した。父や祖母は私がこのような活動をするのを嫌っていたが、母は私の情熱が潰されないようにしてくれていた。そのため母は父から叱責され打たれることもあった。正に母は私にとって天の女神である。私がいささかなりとも活力と勇気を得たとしたらそれは母とソーマデーヴァ師のおかげである。祖母と父は私に結婚するようにとうるさいほど勧めたが、母は学業が終わってからにしたほうがよいだろうと話していた。母の励ましと正しい行動がどのような危難に遭っても自分の決心を翻さない堅固な意志を私の心に育んでくれたのである。

(註)

*1 バーング 大麻の葉をすり潰して濾し水や果汁などの飲料に混ぜて向精神性物資の一として飲まれる

*2 ブラフマチャリヤ ヒンドゥー教で四住期と呼ばれる人生の四つの階段の第一段に当たる時期。学生期とか梵行期とか呼ばれる。また、独身を守ること、禁欲することをも意味する。

*3 バクティ道(भक्ति मार्ग) 信愛道とも訳されることがあるが、ヒンドゥー教においてひたすら信愛、あるいは、親愛の情により神との関係を持ち絶対的な帰依に至る信仰の在り方

*4 サンディヤー・संध्या これは本来、昼夜の境目のことを指す。従って日の出の刻と日没の刻の二つのサンディヤーがあるが、一部の人は正午にもう一つのサンディヤーを認める。アーリヤ・サマージにおいては独自の礼拝様式をサンディヤーと称する。朝夕と正午の一日三度に斎戒沐浴と口すすぎを行い特別のマントラ(ガーヤトリー・マントラ)を唱える儀礼。

*5 アーリヤ・サマージ(आर्य समाज) 1835年にダヤーナンダ・サラスヴァティー師(1824-83)によりボンベイに設立された近代におけるヒンドゥー教改革運動の有力な一派。特にパンジャブ地方や連合州(現今のウッタルプラデーシュ州)などの北インド地方に大きな影響力を及ぼした。

*6 サティヤールタ・ブラカーシャ(सत्यार्थ प्रकाश) アーリヤ・サマージの創設者ダヤーナンダ・サラスヴァティー師の著作。

*7 サンニャーシー・संन्यासी 出家者。世俗を離れ修行・求道に専念する人。

*8 マハートマー(महात्मा) 出家し世俗の生活規範の外にある人。高僧などの称。

*9 プラーナーヤーマ(प्राणायाम) 呼吸を調整して心の安定を得るヨーガの実習法の一。調気法。制息。調息。

*10 サナータナダルミー(सनातनधर्म) 永遠の法に従う人の意であるが、近代におけるヒンドゥー教の改革派に対して正統派の意を持つ一派。

*11 インタークラス(Interclass) かつてインドの鉄道で2等と3等の中間に存在した等級。

母

母は11歳の時に嫁入りしてシャージャハーンブルに来了。当時は全く教養のない田舎娘同然であった。母が来て間もなく祖母は自分の妹を呼び寄せた。その祖母の妹が母に家事を教えたので間もなくすると家事全般を覚え、料理なども立派にこなすようになった。私が生まれて5、6年経ってから母はヒンディー語を習い始めた。自分から進んで習いたいと思うようになった。

たもので近所の教育のある婦人が家に来ることがあると文字を習うのであった。そうして家事に暇を見つけては勉強するという努力の甲斐があつて間もなくするとデーヴァナーガリー文字の書物を読むようになった。私の妹たちは幼かった頃には母から読み書きを教わっていた。私がアーリヤ・サマージに入会してからは母とよく語り合ったものだった。当時に比べてみれば現在の母の考えは幾分寛容で幅広いものになってきている。もしこのような母のもとに生を受けていなかったなら私も凡庸の一人として世を過ごしたことであろう。教育ばかりでなく革命運動についても母はちょうどマツツィーニ^{*1}の母親と同じように私を助けて下さった。それについてはいずれ言及することになる。母が私に与えた至上の命令は決して人の生命に危害を加えるなということであった。たとえ仇であろうともその命を奪ってはならないというのが母の信条であった。私は母のこの命令を遵守するために自分の立てた誓いすら破らなくてはならなくなったことが1、2度あった。

私に生命を与えて下さった母上、今生では報恩の真似事すらなし得ず今生のみか幾たび生まれ変わって努めようとも到底その御恩に報いることは出来ずまい。この卑しい身を正しく導こうと注がれたあの愛情、あの意志の堅固さは言葉に言い尽くせぬものであります。神のお告げの如きお言葉でこの身を諭し正された過ぎし日の出来事の一つ一つが思い出されます。母上、手前が報国の精神に燃えたのも母上のおかげなのです。信仰についてもやはりお力添えがあったのです。教育を受けられたのもすべてが母上のお力によるのです。いつも心地よい口ぶりで諭して下さいたことを思い出すと母上の明るいお姿が目に見え、頭が下がります。たとえば私を叱責なさらねばならなくなった際にもとても優しく説明なさろうとなさいました。私が仮に烏滸がましくも口答えすることがあっても優しい言葉でお前の好きなようにしてよいがこうするのは正しくない、こうすれば結果が良くないだろうと話されました。母上は私を生み育てて下さったばかりでなく常に私が精神的にも信仰上もそして社会でも成長するのを援けて下さいました。幾たび生まれ変わってもこのような母を神様がお授け下さいますように願ひ上げるのであります。

如何なる危難に際しても私を落胆させなかった母上、常に慈愛の言葉で慰めて下さった母上。そのおかげで、生涯私は苦痛を味わったことがありません。この世には享けたいと願う楽しみも快樂も何一つないものの、ただ一度なりとも真心こめて母上にお仕えしこの世に生まれてきたことを意義あらしめたいと切に切に願うのであります。しかし、この願ひは叶えられそうにありません。母上には私の死が告げられましょう。母上、自分の息子は母の中の母たる至高の母、すなわち、母国インドの祭壇に自分の命を捧げたのであって母の名を汚すことなく自己の誓いを固く守ったのだ、とお考えになって勇気を出して下さい。独立したインドの歴史が書かれる折にはそのページに母上の名も輝かしく記されるであります。グル・ゴーヴィンド・シング^{*2}の御令室は息子たちの悲報を耳にすると大いに喜び、信仰を守るためにその犠牲となった息子たちを祝福して祝いの菓子をお配りになられたのでした。母上、どうか最期の時もゆるぎなく母上の御足を拝んで神を念じながらこの身を捨てることが出来るように私に力をお授け下さい。

(註)

^{*1} マツツィーニ Giuseppe Mazzini (1805-72) ジェノーヴァ出身の弁護士。ガリバルディなどと並びイタリアの独立と統一に尽力した。青年イタリア党の創設、秘密結社への参加、ゲリ

ラ活動、亡命などを経た民族主義者であったが、共和制を固持した。彼の伝記は早くインドにもたらされた。Swami Vivekananda の弟子の Sister Nivedita (Miss Margaret Noble) がそれを草創期の Anusilan Samiti に贈呈したことやその一部分が複写され広く頒布されたことが伝えられている。(R.C.Majumdar, op.cit. I p.464) また、Lala Lajpat Rai も 19 世紀 80 年代のはじめに Surendranath Bannerji の英文での演説集を介してマツィーニを知り大きな感銘を受けその後マツィーニを自分の師としたとまで述べている。また、その一部をウルドゥー語に翻訳して刊行した。(Lajpat Rai, Autobiographical Writings, New Delhi, 1965, pp.81-83) また、S.N. Sanyal がバナーラスで革命運動家をリクルートする際に読書するように推奨した文献の中にバンキム・チャンドラの『アーナンド・マト』やスワミー・ヴィヴェーカーナンドの著作などと並んでマツィーニの自伝が入っていた。R.C.Majumdar, ibid, II pp. 302-303

*2 グル・ゴーヴィンド・シング (1666-1708) シク教の第十代グル (指導者・教主) その 4 人の子がムガル朝皇帝アウラングゼーブの命によって殺害されたことについて触れている。

恩師

母以外に私の生涯及び教育に確たるものを与えて下さったのはソーマデーヴァ師 *1 であった。師の本名はブラジュラール・チョープラーでバンジャールはラーホール市のお生まれであった。師の祖父がマハーラージャー・ランジート・シング *2 の大臣の一人であったという名門の出であった。誕生後間もなく御母堂を喪われたため父方の御祖母のもとで養育を受けられた。一人子でいらっしやったので成長されると、わが子への遺産分与が多くなることを狙う父方の叔母たちに 2, 3 度毒を盛られたことさえあった。師の叔父は甥を非常に可愛がり教育などについても特別の配慮をしておられた。父方の従兄弟たちと一緒に英語学校に学んでおられたが、大学入学試験の結果、ご自身が一番で合格されたのに従兄弟たちは不合格となった。家の中は悲嘆に包まれその日は形ばかりの食事さえこしらえられなかった。皆から祝いの言葉をかけられることもなく食事を勧める人もなく全く疎んじられたのであった。すでに師の心は傷ついてしたが、このことは更に追い打ちをかける出来事であった。叔父上の熱心な説得で入学の手続きはしたものの深く憂愁に沈まれることになった。心は憐憫の情に満ちていたので自分の書物や着物を級友に分け与えることもしばしばで自らは古着を着て新しい衣服は他人に分け与えられることも度々だった。一再ならず叔父上は、あの子には服もこしらえてやらないものだからぼろをまとっているのではないかと他人から言われることがあった。叔父は何着もこしらえてやっていたので大変に驚いて衣装箱を調べてみるとそこには古着が 2, 3 着あっただけなので問いただしてみると新しくこしらえたのは貧しい学友に与えていたことが判った。叔父は自分の衣服を人に与えることがあれば私に言うてくれ。その子にこしらえてやるからと話された。師は貧しい友だちを食事に招くことが幾度もあった。叔母や従兄弟たちに悩まされることが多かったので師は結婚をなさらなかった。家庭内の虐待に愛想を尽かして家出の心を固め、ついにある夜皆が寝静まってから着の身着のまま気付かれぬように家出をなさったのであった。長い間さまよい歩きそのうちにハリドゥワール *3 に辿り着かれた。そこであるヨーガ行者に巡り会いかねて求めておられたものを手に入れられたのであった。このハリドゥワールで師はヨーガの行の精髓を会得され 20 時間ほども続く三昧境に入るほどになられた。数年間その地で過ごされてついには水の上を地上同様に歩行するほどにまで身を軽くするヨーガの行に通じられ

るに至った。やがて遊歴して学問を修めようと思い立たれ実行されたのであった。ドイツやアメリカから専門書を取り寄せられたこともあった。ラーラー・ラージパトライ⁴が国外追放に処せられた際、師はラーホールにおられた。師はそこで新聞の論説欄に声明文の掲載を申し込まれた。当時は行政区の副長官はだれが書いたものであらうとも新聞での声明文の発表を許可することはなかったのであるが、師に会った副長官は感服し声明文の発表を許可したのであった。その先頭を切った論説には「イギリス人への警告」という見出しが付いていた。それは非常な衝撃を与えるものであったので、直ぐに売り切れてしまい民衆から強い要請があったので増刷しなければならなくなったほどであった。副長官に声明文についての報告がなされたので副長官は師を呼びつけた。副長官は激しく怒りその論説を読む声は震え、興奮のあまりテーブルを叩いた。しかし、その最後の行を読むと黙り込んでしまった。論説の一部には次のように記されていた。「もしも今なおイギリス人が事態を理解しようとしなければあの1857年の光景が再現されイギリス人の子らが殺害され婦人たちが辱めを受ける日が訪れるのも遠くはあるまい。…しかし、これはすべて夢の中のことだ。」副長官は「これはすべて夢の中のことだ」と言う文句を読んで「これでは君をどうすることもできない」と言った。

ソーマデーヴァ師は遊行してボンベイに至りその地で行われた説教に民衆は大きな感銘を受けたのであった。アブルカラム・アーザード氏⁵の兄上が師の言葉に感激し師をご自分の家に案内された。その頃までは師はまだ法衣を纏っておられずだるんギーとクルター、それにターバンを身につけておられた。アーザード氏のご先祖はアラビアの人であって御尊父はボンベイに多くの弟子を抱えておられた。法話をなさるだけで何千ルビーというお供えがあるほどだった。ところでそのアーザード氏の兄上は經典の読誦に外出されることもなくなり四六時中師の側を離れられないほどの心酔ぶりであった。師がどこかへ行くなどと言われると「私は師の教えに全く感服しております。この世には何の未練もありません。」と言って一日中涙を流されるような有様だった。ある日のことあまりのことに師がそっと叩かれたところ一日中涙を流し続けられたほどであった。家族の人や弟子たちも説得してみたが、法話にも出かけられない。弟子たちは自分たちの師匠が異教徒に丸め込まれてしまった、として大いに怒った。ソーマデーヴァ師がある日のタペー人海岸へ散歩に出られた後、弟子たちが師を殺そうと銃を持って家に押し掛けて来た。ソーマデーヴァ師の生命に危険が及ぶということでアーザード氏の兄上はボンベイを去られるように師に願ったのであった。朝方ある駅で師はアーザード師の兄上が自殺されたとの電報を受け取られた。その電報は師を激しく苦しめた。そのことを思い出す度毎に師は悲しげであった。ある日、タペの祈りの時、かなり暗くなっていたが私は師のお側に坐っていた。師が深い溜息をつかれたので見てみると師の目からは涙が流れ落ちていた。私は驚いてそのわけを教えて下さるよう数時間お願いしたところようやく先に記した話を語られたのであった。

師の英語の知識は優れたものでありヒンドゥー教聖典に関する造詣も大変深かった。だれに臆することもなく自分の意見を述べておられた。その才腕を見込んでマドラスの国民会議派委員会は全インド国民会議派総会に師を代表として選出し派遣したことがあった。アーグラでのアーリヤミトラ会の年次集会で師の講演に感銘を受けたラージャー・マヘンドラ・プラタープ⁶は師に感服し自分の邸宅に案内された。それ以来幾度も師の説法を聴聞し師事しておられた。全く師ほど何の畏れもなく自分の意見を述べる人にお目にかかったことはない。私が始めて師の講演を拝聴したのは1913年にシャージャハーンプルにおいてのことだった。アーリ

ヤ・サマージの年次総会に来ておられたのだが、当時はバレーリーに居を定めておられた。非常に瘦躯であったが、排尿時に出血があるという奇妙な病気に罹っておられた。60cc から時には 900cc 以上もの出血があるほどだった。痔疾ではなくヨーガの行で体に変調を来したのだと話しておられた。腸が壊死しかけたので開腹手術をして腸を一部切除しなくてはならなかった。からのことだという話だった。著名な医者から薬を調合してもらわれたが効果はなかった。そのように衰弱しておられたのだが、講演の際にはそのお声は 7,8 百米以上も離れたところまではっきり聞き取れるほどのものであった。3 年間ほどアーリヤ・サマージの年次総会の度毎に招待されておられたが、1915 年に嘆願する人が 2, 3 人ありシャーージャハーンプルに落ち着かれることになった。その頃私は師の身辺のお世話に加わるようになったのだった。

師はいつも私に宗教と政治について教えて下さりまたそのような関連の書物を読むようにと勧められた。政治に関する認識も深く、ラーラー・ハルダヤール^{*7} とよく意見を交わしておられたし一度はマハートマー・ムンシーラーム（故シュラッダーナンダ師）^{*8} を警察の手から救われたこともあった。ラームデーヴァ氏やクリシュナ氏とも親交があったが、政治については私にはあまり打ち解けた話はなさらなかった。いつも大学入学資格試験に合格したらヨーロッパを旅するようにと話しておられた。イタリアに行ってマツツィーニの生誕地を是非とも訪れるようにと仰せになった。1916 年にラーホール陰謀事件^{*9} が起こった。私は新聞でその記事を熱心に読んでいたものだった。バーイー・パラマーナンド氏^{*10} にはその著『インドの歴史』に感銘を受けていたので心服していた。ラーホール陰謀事件の判決が新聞に載りバーイー・パラマーナンド氏に死刑とあるのに私は激しい憤りを覚えた。あのような人格者を死刑にするようなイギリス支配には正義はなくイギリス人は不法者であると考えた。この仇はきっと討ててみせる。命の続く限りイギリス支配を破壊してやろうと誓ったのであった。この誓いを立ててから師のお側に行き情報をお聞かせし新聞をご覧に入れた。新聞を読まれた師は大変悲痛な表情を見せられた。そこで私が自分の決意のほどを口にすると師は、決心するのは容易なことだが実行するのは簡単なことではない、と話された。私は、師のお力添えさえあれば決してこの誓いに背くことはありません、と手を合わせて恭しく申し上げた。その日から師は私に少し打ち解けられいろんなことを話して下さるようになった。その日こそ私が革命運動に入った日であったわけだ。師はアーリヤ・サマージの教えを全く信奉しておられたのだが、パラマハンサ・ラーマクリシュナ^{*11}、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ^{*12}、スワミー・ラーマティールト^{*13}、それにマハートマー・カビールダース^{*14} の教説についていつも語っておられた。

私が宗教的にまた精神的に強い信念を抱くようになったのは師の正しいお教えのおかげである。師のお力によって私はブラフマチャリヤを貫き得た。師は私の将来を予言しておられたが、文字通り全くその通りになってしまった。余の肉体は滅び汝の行く手には様々な難問が現れるであろうが、だれもそれを解決してはくれないであろう。不可能事ではあるが、万が一にも余の生命が減びなければ、汝の生涯はこの世に範とすべきものとなろう、といつも語っておられた。師の肉体の終焉が間近に迫っていたことは私の不幸と言うほかない。その頃師は私にヨーガの修行について若干教えようという気持ちになられたのだがすでにほんの少し体を動かしたり十歩あまり歩まれると意識を失われるほど衰弱しておられた。それからもう二度と起き上がって坐法を教えるほどには回復されずじまいであった。余はヨーガを過った。余の息の絶える時には側にいて余が一体次にどこに生を享けるのかと余に訊ねるのだぞ。答えられるかも知れないからなどと語っておられた。毎日の出血は 1 セールほどにも達していたが決して

て心を乱されることはなかった。お声も弱まるではなく並ぶべきものなき雄弁家であり著述家であった。師の書かれたものや書籍がある信奉者の手元にあったのだがいつとはなしに紛失してしまった。一部の書き物や書物はスワミー・アヌバヴァーナンダ・シャーント師^{*15}が持って行かれてその一部は公刊もされた。およそ 48 歳で遷化された。ここに私の特に愛好する、そして有益と思われる大聖カビールダースの不滅の詩句を記しておく。

- (1) 人の身は旅籠なり。 主の機嫌よければ楽しきものなり。
- (2) ひもじさは折りを妨ぐる犬なり。足蹴にして恐れを去り神を念じよ。
- (3) 眠気は死の先触れなれば目覚めよ。一切を捨て名号の妙薬のみを用いよ。
- (4) この世に生ずれば去るは必定なり。かような幸運の身を何もて飾らん。
- (5) 世人は己の屋敷に忍び込む盗賊を退治すれどわれは一切の持ち物を惜しみなく与う。
- (6) 言い争うこともなく競い合うこともなければわれとかれは一つとなり消え失せるなり。
- (7) 眼のねや（闇）に瞳のしとね（褥）を敷きまつげをすだれにして愛しき人を喜ばせん。
- (8) 命をかけて愛の盃を傾けよ。愛を叫べど欲深き者は首を差し出すことあたわず。
- (9) おのが首をはね地に置きて来る覚悟なら従うがよい。
- (10) 己を誇る人に近づけ。さすればひとりにて汝が心輝く。

（註）

^{*1} ソーマデーヴァ師 ビスミルは師に対して पूज्यपाद श्री 108 という敬称を用いている。同師についての詳細は不詳。

^{*2} ランジート・シング (महाराजा रनजीत सिंह) (1780-1839) 19 世紀前半に現今のインド及びパキスタンのパンジャブ地方を中心にした広大な地域に築かれたシク教徒による王国の創建者。

^{*3} ハリドゥワール हरिद्वार ウッタラーンチャル・プラデーシュ州のガンジス河沿いヒンドゥー教聖地。ハルドゥワールとも呼ばれる。

^{*4} ラーラー・ラージパト・ラーイ (1865-1928) パンジャブ出身。教師、弁護士、政治家。アーリア・サマージの指導者としても活動。民族運動の指導者として活躍。1907 年 5 月には農業問題をめぐっての農民扇動による治安妨害の嫌でビルマのマンダレーへ 6 か月間国外追放された。1928 年 10 月サイモン委員会に対する抗議行動の際に重傷を負いそれが原因で翌月死亡した。

^{*5} アブルカラム・アーザード (Maulana Abul Kalam Azad (1889-1958)) デリー出身の父親とメッカ出身の母親の間にメッカで生まれた。イスラム教思想家・政治家。カイロのアズハル大学で教育を受けた後、インドへ来住。後に M.K. ガンディーの国民会議派指導者の一人となり独立インドの初代文部大臣となった。

^{*6} ラージャー・マヘンドラ・プラタープ राजा महेन्द्र प्रताप (1886 - ?) アワド・アーグラ連合州 (United Provinces of Awadh and Agra) のハートラス हाथरस 出身の革命的インド独立運動家。第一次大戦中に Maulana Barkatullah などと共にドイツ側との協力による反英武力闘争を計画し 1915 年にカーブルでインド暫定政府（自由インド政府 आज़ाद हिन्द सरकार）を樹立し大統領に就任するなどした。

^{*7} ハルダヤール लाला हरदयाल (1884-1933 ?) デリー生まれ。1905 年に英国留学。パリ在住のシャームジー・クリシュナ・ヴァルマーとの接触があったが、1908 年に帰国した。パン

ジャーブで反政府活動の準備をしたあと若い活動家を残して 1911 年にアメリカを活動の場として選んだ。一時はスタンフォード大学でインド哲学の講師をしたが、人種差別を受けていたアメリカ及びカナダへのインド人移民労働者の反対運動を組織化し 1913 年にガダル・パーティーの結成に至りその中心的人物となる。1914 年にジュネーヴへ追放され機関紙 ‘Bande Mataram’ を発行した。第一次大戦中ドイツの支援による独立運動を試みたが失敗に終わった。

*8 マハートマー・ムンシーラーム महात्मा मुन्शीराम (1856-1926) その前半生はハルドウワール近くのアーリア・サマージの学校グルクル・カーングリーの創設者・教育者として知られるアーリア・サマージの指導者。1917 年に出家してスワミー・シュラッダーナンド (स्वामी श्रद्धानन्द) となつてからはアーリア・サマージの活動家として被抑圧者救援の社会活動、民族運動で活躍した。1890 年代からの元ヒンドゥー教徒のヒンドゥー教への再改宗を目指したシュッディ運動の中心人物でもあり 1906 年に結成されたヒンドゥー・マハーサバーでも重要な役割を果たした。1926 年に宗教的動機からイスラム教徒により暗殺された。

*9 ラーホール陰謀事件 लाहौर षडयंत्र केस この表現も含めて反英武力抗争事件はすべて英語で conspiracy, すなわち、陰謀 (団) 事件、もしくは、謀議 (団) 事件と表現されている。ヒンディー語での表現にはその訳語が用いられている。1915 年 2 月 21 日を期してラースビハーリー・ボース (Rash Bihari Bose), シャチンドラナート・サーンヤール (Sachindra Nath Sanyal), カルタル・シン (Kartar Singh), プリトウヴィー・シン (Prithvi Singh), P.G. ピングレー (P.G. Pingley), バルワント・シン (Balwant Singh), ウッタム・シン (Uttam Singh) などによりパンジャブやベンガルに至る北インドの各地に駐屯する連隊のインド兵の決起による叛乱の試みがなされたが、事前に露見し失敗に終わった。そのためインド防衛法による特別法廷での裁判により数十名が絞首刑や終身流刑などの重刑に処せられた事件。事件の発生は 1915 年であったが裁判は翌年にかけて三次に亘り行われた。

*10 パーイー・パラマナンド भाई परमानन्द (1874-1947) パンジャブ出身の思想家、民族運動家。最初ラーホールの D.A.V. College の教授であった。アーリヤ・サマージの指導者、後にヒンドゥー・マハーサバーの指導者にもなった。上記のラーホール陰謀事件との関連で最初死刑の判決を受けたが後にインド総督により終身流刑に軽減された。1920 年に断食闘争を行い釈放された。後に数年間インド中央立法会議のメンバーを務めた。

*11 ラーマクリシュナ・パラマハンサ (1836-86) ベンガル出身の宗教家。修行と神秘体験により宗教の対立を超越した境地に到達したと伝えられる。ヴィヴェーカーナンドの師とされる。

*12 スワミー・ヴィヴェーカーナンド (1863-1902) 近代インドの宗教家。ラーマクリシュナ・パラマハンサの弟子となり近代インドの宗教や社会面の覚醒に貢献したばかりでなくインドの民族主義に精神的な基盤を与えたとされる。

*13 スワミー・ラームティールトスワमी रामतीर्थ (1873-1906) パンジャブ出身の数学者、ヴェーダーンタ哲学者、思想家。青年たちの民族主義的覚醒や精神の高揚に大きな影響を与えた。スワミー・ヴィヴェーカーナンドの感化を受け出家した。

*14 マハートマー・カビールダース महात्मा कबीरदास (15 世紀半ばから 16 世紀初?) サント・カビールとも呼ばれる。ヒンドゥー教やイスラム教といった宗教の枠を超越して唯一の神への帰依と既存の宗教の形式主義や権威主義を批判する立場に立った。

*15 スワミー・アヌバヴァーナンド・シャーンタ (स्वामी अनुभवानन्द शान्त) アーリヤ・サマージの指導者の一人と考えられるが不詳。

梵行持戒 *1

現在わが国では富裕で世に重きをなす人たちの家庭においてはその九割九分までが宝玉にもたとえるべき子弟の養育を使用人に任せきっているような憂えるべき状況にある。その使用人たちのなすがままである。中流家庭においてもそれぞれの生業や勤めに追われているために子弟の養育にはあまり注意を向けることが出来ないでいる。安上がりで間に合わせの使用人を雇い、その連中に子弟を任せきりにしてろくでなしにしてしまうのだ。たとえ幸いにして使用人の手からは逃れ得たとしても子供たちが不純で不潔な近所界限から逃れ出ることは容易なことではない。仮に良いところが残っていたとしても今度は学校に行つて完全なものになってしまうのだ。今日の青年たちは大学生になる頃にはありとあらゆる洗礼を受けて大したものになってしまっている。大学生になると新聞の広告を見ては薬を取り寄せ金の無駄遣いを始める。九割五分の者は目を悪くしている。一部は体力の無さが原因であるが、一部には流行を追つて眼鏡をかけるような悪弊に陥るのだ。耽美の心性は連中の身体の節々にまで染みついて行く。恐らく艶話の一つもないような学生は一人としていないであろう。全く筆にするのも不愉快で奇妙なことを耳にするものである。たとえだれかが品行を正そうと努め、学校や学生生活の中でよい教訓を得たとしても生活の場の周辺はその人の向上を妨げるのが現実である。学生たちは折角この世に生まれてきたのだから僅かの愉楽もあつていいではないか。困ったことや不都合が生じては薬を用いるか栄養のある食物を取ればよくなるだろうと考える。これは大変な間違いなのだ。英語にも‘only for once and forever’という言い慣わしがあるとおり、ただの一度は一度では済まないのだ。薬も何の役にも立たない。玉子スープを吸おうが肝油を飲もうが肉を食べようが何の効能も及ばないものだ。一番大切なことは品行を正すことである。学生さらには教師たちも母国の窮状を悲しみ自己を正すべきである。梵行こそこの世におけるあらゆる力の根本なのだ。梵行戒を守らずしては人生は全く無味乾燥なものに思えるのだ。この世に現れた偉人たちの多くは梵行戒の威力によるものであつて何百年何千年の後にもその令名を称えることに人々は喜びを見出すのである。梵行戒の威光を知ろうと思うならば、パラシュラーマ *2, ラーマ *3, ラクシュマナ *4, クリシュナ *5, ビーシュマ *6, イエス・キリスト, マツティーニ, バンダー *7, ラーマクリシュナ, ダヤーナンダ, あるいは、ラーマティールトといった方々の伝記を読むがよい。

幼年期に悪癖に陥り、あるいは、悪い仲間との交際から品行を過つたものの立派な教訓を授かれれば品行を改めようと努めながらもうまく行かない人たちも失望落胆すべきではない。人生とは修練の集積に他ならない。心の中に生じてくる種々様々な想念の中から一番気の向くものがまずはじめに実行される。同じ行為は繰り返して行っていると主体的な気持ちは失せて反射的な刺激が生じるようになる。反復の結果もたらされるその反射的な行為が習性と呼ばれるものである。人の品行とはすなわちこの習性によって作り出されるものである。習性とは言い換えれば習慣のことであり性癖であり癖なのだ。習性には良いものと良くないものがある。常に良い考えが思い浮かぶのであればその結果として良い習性が身につくであろうし、もしその逆であればその結果も必ず逆のものである。心とは欲望の中核であつて人はその充足に努めざるを得ないものだ。習性は第一に先祖から受け継いだものによる。すなわち、両親の習性が子供の習性を形成する上で支えとなるものである。両親の習性に従うことからこそ子供の習性を形

成する上での助けとなるものである。第二にどのようなところに住むのかどのような環境で過ごすかによって習性も異なってくるわけである。第三にその人の努力によっても習性は作り出されるものである。それは先祖伝来、あるいは、育ちや暮らしの環境によって作り出された習性にも打ち勝つほどに強力なものである。われわれが為す行動の一つ一つは習性によるものである。もし習性を通じ行動が自然なものに感じられないとすると人生は随分と苦痛なものに感じられることであろう。ものを書く習慣やどのような衣服を着用するか、如何なることを学習するかなどはその明確な実例である。事に当たるのに常にその最初に取り組み始めた時と同じような注意を払いながら行動しなければならないとするといかほど不自由なことであろうか。同じことなのだが、這っていた幼児が立ち上がれるようになるまでは非常な困難を味わうのだが、それがやがて幾マイルも歩くことが出来るようになるのである。歩きながら眠る人まで少なからずいるのだ。例えば、刑務所の外壁に掛かっている時計にねじを巻く係員は休みなく6時間歩かなければならないのだが、しばしば歩きながら眠ってしまうのだ。

気持ちを浄め心をしゃにむに高邁な理想に向けさせる修練をすることによって間違いなく成功を収めることが出来るものだ。全ての青年、学生にして梵行戒を保とうと欲する者は自己の日課を定めることから始めるべきである。飲食には特別注意を払い聖人の伝記、行跡に関する書物を読み愛の語らい、小説に無駄な時間を費やさず、暇があればひとりで過ごさず、良からぬ考えが浮かべば直ぐに冷水を飲んで散歩するか自分より目上の人のところへ行行って話を伺うべきである。卑猥なガザルなどの詩歌は読まず聴かず、婦女子を目にせぬようにすべきである。母親や妹であろうとも二人きりでは顔を合わせてはならない。容貌のすぐれた級友などと体を触れ合わせたり抱き合ったりする癖をつくってはならない。学生は日の出よりも一時間前に床を離れて用足しを済ませた後に体操をするか、広場で散歩に出かけるべきである。日の出の五分か十分前に沐浴を済ませて自己の信仰に応じて神を念じるべきである。沐浴は常に井戸の新鮮な水で行うべきである。井戸水が得られない場合には冬の間は水を少々温めて、夏には冷水で行うべきである。沐浴後は固いタオルか手拭いで身体をよく摩擦すべきである。礼拝を行った後に果物や干した果実、牛乳などの軽い食事をとるべきである。一番よいのは粗礫にした小麦粉を炊いて好みに応じて甘味ないしは塩味をつけて食べることである。その後学習をして十時から十一時の間に食事をする。食事の中には肉や魚、その他刺激性の強いものは含めないこと。玉ねぎ、にんにく、唐辛子、マンゴーから作る酸味のスパイス、その他香辛料の多く入ったものなどを摂取してはいけない。魂を浄め高める食事を心掛けるべきである。固く乾燥した食べ物を食してはいけない。出来るだけ野菜を多く食べるようにしてよく噛むことである。熱過ぎたり冷え過ぎている食物も避けるべきである。学校から戻ったらしばらく休憩して一時間ほど勉強してから遊びに外へ出ること。広場で散歩するのもよい。散歩と称して繁華街の汚れた空気を吸いに出かけるのはよくない。清浄な空気を吸わなくてはならない。夕方にも必ず用足しをすること。しばらく黙想の後に軽い食事をする。出来れば夜は牛乳だけを飲むようにするか、果物だけを食べるようにすること。夢精などの病気は単に満腹になっているだけで起こるものだからである。食べたものがうまく消化されない日に体調が崩れる。あるいは、また精神が清浄でないためによく眠れず夢精が生じるものである。夜は十時まで勉強して就寝すること。常に風通しのよいところで眠ること。あまり柔らかい寝床で眠ってはいけない。出来る限り板の間に毛布か織り目の粗い敷布を敷いて寝ることだ。長時間勉強する際には九時半、もしくは、十時に床につくこと。朝は三時半か四時に起床してうがいをしてから冷たい水

を飲むこと。用足しを済ませてから勉強を始める。日の出前にはいつものように体操をするか散歩をすること。体操の中では腕立て伏せが一番よい。出来ればラームティールト教授の方法にならって行くことである。教授の方法は学生には一番よい。短時間に十分な運動をすることが出来る。腕立て伏せの他にはシールシャ・アーサナ^{*8}とパドマ・アーサナ^{*9}をするのがよい。部屋には英雄や偉人の肖像画を掲げるのがよい。

(註)

^{*1} 梵行持戒 原文には ब्रह्मचर्यव्रत पालन とある。先述したブラフマチャリヤを自ら守るべき戒行として誓い守り抜こうと決意したことを指すものと思われる。スワミー・ダヤーナンドがその著『サティヤールタ・プラカーシャ』(第3章)の中で述べているところによれば、男子にとってはブラフマチャリヤには三段階がある。第一は24歳まで禁欲を守る人、その間学業に励み結婚後も身を慎むならば、70～80歳までの寿命を得る。第二は44歳まで禁欲を守る人。第三は48歳まで禁欲を守る人。そうすればあらゆる疾病を免れ人生の四大目標である法、財、愛、解脱を得ることが出来る。禁欲の期間は男女で異なり、男子の25歳までに見合う女性のそれは16歳、男子の30歳に見合うものは女性においては17歳、男子の36歳に見合うものは女性においては18歳、男子の40歳に見合うものは女子においては20歳、男子の44歳に見合うものは女性の22歳、男子の48歳に見合うものは女性の24歳までとされる。男子の48歳以上と女性の24歳以上は梵行を保つべきではない、とされる。結婚を望まない者にあつてはこの埒外であるが、愛欲を抑え感官を支配することは甚だ困難なことである、とする。

^{*2} パラシュラーマ(परशुराम) ヴィシュヌ神の化身の一。クシャトリヤの横暴を抑制するために生まれたとされる。

^{*3} ラーマ(राम) ヴィシュヌ神の第七の化身。叙事詩ラーマヤナの主人公でアヨーディヤーのダシャラタ王の長子。

^{*4} ラクシュマナ लक्ष्मण アヨーディヤーのダシャラタ王の王子でラーマの忠実な弟。

^{*5} クリシュナ कृष्ण ヴィシュヌ神の第八の化身。

^{*6} ビーシュマ भीष्म 叙事詩『マハーバーラタ』の最重要人物の一人。クル族のシャンタヌ王とガンジス河の女神ガンガーとの間に生まれた。父のために生涯独身を貫く誓いを立てたとされ、堅固な意志、深い学識と思索、剛勇・勇気の人であり過酷な運命を壮烈に生きたとされる。

^{*7} バンダー बंदा ジャンムーの出身で元はバイラーギーと呼ばれるヴィシュヌ派の一派の修行者であつたが1705年にグル・ゴーヴィンド・シングに出会いシク教に入信。入信後の名はバンダー・シング・バハードゥル。グル・ゴーヴィンド・シング亡き後に一時的ながらイスラム勢力に対抗しグルの受けた屈辱に対し報復を行った。その後ムガル軍に捕らえられ残忍な取り扱いを受け斬殺されたが、その猛烈な反抗心と忠誠心がシク教徒の信仰心を一段と強めた。

^{*8} シールシャ・アーサナ(शीर्षासन) ヨーガの坐法の一、逆立坐法。

^{*9} パドマ・アーサナ(पद्मासन) ヨーガの坐法の一。蓮華坐。

愛国心

恩師のソーマデーヴァ師が亡くなられた後、英語課程の9年生になってからインドに関する書物を読み始めた。シャージャハンプルにはパンディット・シュリーラーム・ヴァージュペーイー氏が奉仕会を創設しておられたので私もそれに熱心に参加した。他者へ奉仕するという気持ちが胸に湧き起こってきた。国民同胞は実際に苦難に喘いでいるのだということが少し分かりかけてきた。その年には近所の者や親友たちは大学の入学試験に合格して大学に進んだ。大学の自由な空気の中で彼らの胸の内にも愛国の情熱が目覚めた。ちょうどその年（1916年12月）にラクノウ市で全インド・ कांग्रेस（全インド国民会議派）の年次大会が開催されたのでそれに私も参加した。幾人かの人に出会った。インドの現状について若干の見通しを得て母国のために何か特別の働きをしなければならないと決意したのであった。現今の我が国に生じていることの責任は政府にこそあるのでありインド人の苦しみと窮状の責任は正に政府にあるのであるから政府を転覆させる努力を為すべきである。私もこのような考えに与するようになった。この総会にはマハートマー・ティラク^{*1}が来臨されとの情報があったので急進派の人たちが多く参集していた。会議の議長の歓迎が盛大に行われた。その翌日ロックマーンニヤ・パールガンガーダル・ティラク氏の乗った特別列車が到着するとの情報が伝わった。ラクノウ駅は大変な人だかりだった。実行委員会の委員たちからロックマーンニヤの歓迎式典は駅前のみにて行い市街での乗り物に乗せての歓迎は行われないと伝えられた。というのは実行委員会の委員長はパンディット・ジャガットナーヤーヤン氏であってその他の主立ったメンバーの内ゴーカランナート氏をはじめとする人たちは穏健派の人たちが多かったのである。そのため穏健派の人たちにとってはティラク氏の歓迎行列でも出そうものなら会議派の議長以上の歓迎ぶりになって好ましくないという懸念があったからであった。そこでティラク氏が駅に到着されるなり車に乗せて市外へ連れ出そうという手はずが整えられていた。そういうことを知らされて青年たちは非常に憤った。これに対してカレッジの修士課程の学生たちが是非ともティラク氏を盛大に歓迎するべきであると言って反対した。私もそれに賛成した。そうして数人の青年たちが、氏が駅に到着したら皆で取り囲み氏を自動車に乗せ行列を出すことに決めた。特別列車から最初に降り立ったのはティラク氏であった。実行委員会の委員たちは奉仕隊のボランティアの人たちに氏を取り囲ませて車に乗せた。私と修士課程の学生のひとりがその車の前に行って地面に伏してしまった。あれこれと様々な説得を受けたがだれの言葉も聞き入れなかった。私たちにならって数人の青年も自動車の前に座り込んでしまった。その時の私は激しい気合いのため言葉らしい言葉も発せずただ涙が溢れ出る中「車を出すならおれの上を通るがいい」と叫ぶばかりであった。実行委員会の委員たちに会議派議長を運ぶ車を貸してくれるように頼んだのだが応じてもらえなかった。ひとりの青年が自動車のタイヤを破った。ティラク氏が随分と説得されたのだがだれひとりそれに応じる者はいなかった。貸し馬車を一台引いてきて馬を解き放しティラク氏を恭しくそれに乗せ皆で引き始めた。こうしてロックマーンニヤはだれよりもどの幹部よりも盛大な歓迎を受けられたのだった。人々も一度でいいからその車に手を触れさせてくれ、この世に生まれた甲斐があったというものだ、などと言うほどの熱狂振りであった。歓迎の花吹雪が舞いその落ちた花を人々は拾い上げ着物につけていた。ロックマーンニヤが踏みつけられた土が皆の額につけられていくのであった。またその土を手拭いに包んで持ち帰る人もいた。この歓迎振りに穏健派の人たちは全く顔色なしという有様だった。

(註)

*1 バールガンガーダル・ティラク बाल गंगाधर तिलक(1856-1920) 当時のボンベイ州ブーナ出身の政治家、思想家。ジャーナリスト、社会活動家としても社会への広く深くかかわりを持つ政治活動を行った。民族運動の急進派を代表する存在であったがために 1908 年から'14 年までの 6 年間ビルマのマンダレーで投獄された。ここにはこのようなティラク氏への青年たちの熱誠と穏健派に対する対抗意識が言及されている。なお、マハートマーとロークマーニヤ（人民・民草の敬愛する）という二つの敬称が用いられているが、後者のほうが一般的であった。

革命運動

ラクノウでの国民会議派大会の会合の折りに革命運動を主眼とする秘密結社のあることを知った。その話を聞いて間もなく私も革命結社に参加することになった。ある友人を介してそのメンバーになった。間もなくして私は執行委員会の委員に選ばれた。結社には金は全くなく一方では武器も必要としていた。家に戻ると、書物を出版してそれで利益があれば武器を購入してみてもどうだろうかということを考えた。しかし、その書物を出版する費用はどうするかという問題があった。あれこれ考えているうちに一つの策を思いついた。私は母にちょっと儲かる商売をしてみたいのでお金を出してもらえれば有り難いのだと話してみた。母は 200 ルピーを用意してくれた。『アメリカは如何にして独立を達成したか』という題で原稿を仕上げたのでそれを出版する手筈を整えた。もう少し金が必要だったので母に更に 200 ルピーを借りた。本が売れるとまず母にその金を返済した。それでも 200 ルピーが手元に残った。それに本はまだ残部があった。ちょうどその頃、『同胞に告ぐ』というビラを刷った。というのはパンディット・ゲンダーラール^{*1} がブラフマチャーリーの率いるグループともどもグワーリヤルですでに逮捕されていたからであった。そこで学生たちは一段と思いを熱くして責務を果たそうと誓い合ったのだった。ビラは幾つかの県で貼り出されたし配布もされた。そのビラも『アメリカは如何にして独立を達成したか』も連合州政府により没収処分を受けた。

(註)

*1 ゲンダーラール・ディークシット (パンディット) पंडित गेंदालाल दीक्षित についてはこの後のマインプリー事件及びパンディット・ゲンダーラールの項を参照。

武器購入

一般に藩王国ではだれでも武器（リボルバー、ピストル、ライフル銃など）を所持しており、銃などの所持についてのライセンスは不要だとも考えられている。事実、藩王国ではこの種の武器は容易に入手できるし武器の所有につきライセンスも不要であり、だれにでも銃を所有する自由があるというのは正しい。しかし、実弾（弾薬筒）をこめる武器を所有している人は非常に少ないものだ。というのは、その実弾、すなわち、外国製の弾薬筒を購入するに当たっては警察への届け出が必要だからである。その上、外国製の弾薬やそれを用いる武器を売る店は存在しないのであって、更に、外国製の弾薬や雷管すら手に入らないものだ。そうしたものは

みな外国から取り寄せなくてはならないからである。この種の物品を外国から取り寄せるに当たってはそれぞれの藩王国に駐在するレジデント^{*1}の承認を要する。レジデントの承認がなければ武器の類は何一つ入り込めないのである。従ってこの煩瑣な手続きを逃れるためには藩王国の中でトーピーダール・バンドウクスなわち、撃発雷管 (Percussion cap) のついた銃が製造され弾薬も硝石、硫黄、炭などを用いて製造される。雷管は密かに取り寄せる。そうでなければ雷管の代わりに鶏冠石とカリを別々に粉末にしてから混ぜ合わせたものを使用する。武器を所有するのは自由なのだがそれでも農村では撃発雷管銃や小型のピストルを所有しているのは少数の金持ちや地主たちに限られている。それらの武器には領内で作られた弾薬を使用する。その弾薬は雨季の間に湿気を帯びるので役に立たなくなる。一度私はひとりでリボルバーを買い求めに出かけたことがあった。当時の私は銃器店があるだろうからそこへ行って代金を払い買い求めて来ようと考えていた。店という店を一軒残らず覗き込んでみたが銃砲店などの広告、あるいは、それらしきものは目にすることが出来なかった。そこで馬車に乗って市内を回って見た。馬車屋が何が要るのかと尋ねるので、びくびくしながら用件を述べるとその男が2、3日かけずり回って雷管付のリボルバーを手に入れてくれ、それに地元で作られた弾薬もある店から取り寄せてくれた。何の知識もなかった私は一度に2セルもの弾薬を買い込んでしまったが、それは梅雨時になって湿気にやられて駄目になってしまった。非常に残念な思いがした。革命運動の結社の一員になってからのことなのだが二度目に仲間の了承もあって200ルピーを持って武器の購入に出かけた。その時は随分頑張ってみた結果、ある古道具屋らしい店に幾振りかの短剣と刀、それに撃発雷管付の銃が2挺置いてあるのをようやくに見つけた。勇気を振り絞って男にこれは売り物かと尋ねると男は頷いたのでそれらを手に取ってみた。価格を尋ねてみた。そうこうしながら実包の入った銃は売らないのか、どこか売ってくれるところはないかと尋ねてみた。すると男は詳しいことを話してくれた。店には雷管付で砲身が一つの小型のピストルが2挺あったので2挺とも買い入れ刀も一振り求めた。男はまた訪れるのであれば実包のついたのを取り揃えておくようにすると約束した。欲とは恐ろしいものだと思う。正にその諺通り欲に駆られたこともありわれわれにすれば他に武器を手に入れられる伝もなかったので私は数日後再び出かけて行った。今度はその男がすばらしい弾薬筒付のリボルバーを売ってくれた。古い弾薬筒を幾つかわけてくれた。男はこちらが武器を購入するのは間違いないと確信して必死になって数挺のリボルバーと2、3挺のライフルを取り揃えてくれた。男にもいい実入りとなっていた。1挺につき20〜30ルピーの口銭を取っていた。幾つかのものについては倍の利益を挙げていた。その後われわれの組織の2、3人のメンバーが一緒に出掛けた。店主もこちらが強く欲しがっているのを知るとあちこちから古い武器を仕入れて修理をした上で新品のようにして売るようになった。随分と暴利を食った。われわれには何の知識もなかったのだ。このような経験を経てわれわれはものの新旧が見分けられるようになったのであった。別の一人の刀剣研ぎ師の男と知り合いになった。その男自身は特別な知識を持つてはいなかったのだが、幾人かの資産家の地主にわれわれを引き合わせてくれると約束した。リボルバーを1挺持った男と面会した。こちらが購入したいと言うと男は1挺につき150ルピーを要求した。新品ではあった。かなり駆け引きをしたところ菓莢を100個つけて155ルピーで売った。150ルピーは自分を取り5ルピーは口銭として仲介した研ぎ師に支払うことになった。リボルバーはぴかぴか光る新品だった。高価なものに違いないと思った。購入はしたがこのように暴利を食られていては駄目だということになりどうにかして情報を得ようという

ことになった。随分苦労してようやくのことでカルカッタやボンベイの銃器販売人のリストを手に入れてみたところ目が覚めた。われわれが入手したリボルバーや銃は1挺を除きすべて相場の2倍の値を支払っていたのだった。155ルピーで入手したリボルバーはわずか30ルピーの品だった。薬莢は100個が10ルピーであったから合計40ルピーのものに155ルピーを支払わなければならなかったわけだ。残念無念であったがどうにもこうにも他には講じる手立てがなかったのであるから仕方のないことではあった。

しばらくして武器製造工場のリストを携えて3、4人のメンバーで出掛けた。念入りに調査し探索した。幾らかの糸口を掴んで藩王国の警察がわれわれの動きを嗅ぎつけた。秘密警察の刑事が私に接触してきて幾つかの武器を手配しようと約束した。そして警部補の家へ案内した。たまたまその時警部補は留守だった。門口に私のよく知っていた警官が腰をかけていた。その近所で刑事の目を盗んでその家はだれのものかと尋ねると警部補の家だと判ったのでそくさとその場を去りすぐさま宿泊場所を変えた。その時すでにわれわれはライフル2挺、リボルバー2挺、ピストル2挺を買い入れて所有していた。刑事は苦心してわれわれがいつも武器の修理を依頼していた職人からわれわれの仲間の一人がちょうど去ることになっていたのが判ったので四方八方の駅に手配の電報を打った。列車での捜査が行われたが、警察の不注意によりわれわれは九死に一生を得たのであった。

金の威力は恐ろしいものだ。ライフル銃を一挺所持していた一人の警視がそれを手放すのが判ったのでわれわれはそこへ出向いた。われわれは藩王国の中に居住していると告げた。警視は事実確認をしようとして色々な質問をした。われわれが未成年であることには違いがなかったからである。警視というのはすでに退官した人でイスラム教徒であった。われわれの話に完全には得心できず私たちの住所を管轄している警察署長に人物証明書を書いてもらってから来いということになった。私は出掛けて行き住所を名乗っていた地区の署長の名前を調べ更にその地区の二人ほどのザミーンダールの名前を調べ自分はそのザミーンダールの息子でありこの人物をよく知っている旨の書類をこしらえそれにザミーンダールのヒンディー（デーヴァナーガリー）文字の署名と署長のローマ字での署名を書き込んで警部補のところへ持参して差し出した。元警視は慎重に目を通した後、警察署で確認するから君も署に出掛けてライフルを購入するという届けを出したまえと言った。私は、あなたに納得していただこうと思ってこれまでの面倒を辛抱してきましたし10ルピー以上も金を使いました。それでも納得していただけないのであれば仕方がありませんから警察署には参りません、と伝えた。ライフルの値段は価格表には180ルピーと記されていたのだが、警部は250ルピーを求めており実包も200個つけるということだった。こうして警視は新品のライフルの代価を要求していたのだった。こちらでも250ルピーを出すつもりだった。警部は満額が手に入るわけだし息子もいなかったのだから250ルピーを受け取りライフルを売ってくれた。警察にも問い合わせに行かなかった。ちょうどその頃、州のある高官の使用人を抱き込んでリボルバーを1挺盗ませたことがあった。相場では75ルピーのものだったが100ルピーを支払った。モーゼル銃も1挺盗ませた。相場では200ルピーのものだった。何としてもそれを手に入れたかったのだ。懸命の努力の結果手に入ったが、それには300ルピーを支払わなくてはならなかった。弾は一つも手に入らなかった。古い知り合いの古道具屋がモーゼル銃の弾を50発持っていた。それが大いに役立った。仲間のどれ一人もそれまでモーゼル銃を見たことがなかった。使用法さえ不明だったので随分苦労して理解したようなことであつた。12口径のライフルを1挺、雷管付の銃を2挺、リボルバーを

3挺、雷管付のリボルバーを5挺購入した。それぞれに50発から100発の実包を買い入れた。これらを手に入れるのに合計しておよそ1千ルピーを費やした。短剣や刀なども購入した。

(註)

*1 レジデント (resident) 英領インドの一部の大きな藩王領に英国政府の代理として駐在した総督代理。

マインプリー事件 *1

われわれが活動に忙しくしていた頃、マインプリー事件のメンバーの一人が指導権を握りたくなって狂ってしまい、自分の指揮する別個の組織を立ち上げた。武器も少々集めた。資金不足になったためメンバーの一人にその親戚筋の家に強盗に入らせろ、と言った。言われたメンバーは返事をしなかった。すると命令書が出され命を取るぞと脅されたのでそのメンバーは警察に訴え出た。ことが露見してマインプリー *2 での逮捕が始まった。われわれも知らせを受けた。

デリーで国民会議派の会合 *3 が開催されようとしていた。『アメリカは如何にして独立を達成したか』という本を連合州政府が発禁処分にしたのだが、それを kongress (国民会議派) の集会の際に販売しようと思いついた。大会の際にシャージャハーンブルから参加する奉仕団と一緒に救急医療隊を率いて出掛けた。救急隊員は会場のどこへでも制限を受けずに自由に出入りが許可されていた。会議派の大テントの外で青年たちが公然と政府が発禁処分にした書物だと言って販売していたため秘密警察がテントを取り囲んだ。ちょうどその前にアーリヤ・サマージが設営したテントがあった。書籍を販売していた人たちを警察が取り調べ始めた。私は実行委員会の委員長や書記局長の許可がなければ警察に立ち入りを許可することはないと考えたものだから会議派のテントにボランティアたちを派遣したのであった。アーリヤ・サマージのテントに出掛けてみた。書籍は一つのテントの中にまとめてあった。私はおよそ200部はあったろうと思われる冊子をオーバーコートに包み肩に担ぎ警察の前を通り抜けた。制服を着てヘルメットを被り救急隊の赤い大きな腕章を腕につけていた私はだれからも怪しまれることもなく冊子は無事だった。

デリーでの会議派大会からシャージャハーンブルに戻ったが、そこでも逮捕が始まっていた。われわれは同地を去って他の町の一軒に泊まっていた。夜間に家主が戸口に外から錠を下ろした。11時頃に仲間の一人が家の前に来て錠が下ろされているのを見て声をかけた。われわれも疑わしく感じたので塀を乗り越えてその家から離れた。闇夜のことであった。少し進むとにわかに「だれだ。止まれ。」と誰何する声が聞こえた。われわれは7、8人の仲間であったが包囲されたと思った。足を速めようとした途端、再び「止まらなと撃つぞ」という声がした。警部が銃口をわれわれに向け肩にリボルバーを掛け数人の警官を従えて近付いてきた。「だれだ。どこへ行く。」と問われたので「私たちは学生です。駅に向かうところです。」と答えた。「どこへ行くのだ。」と問われて「ラクノウです。」と返事をした。時刻は午前2時だった。ラクノウ行きの列車は5時発だった。警部は怪訝に思った。カンテラが持ってこれられわれわれの顔が照らし出された。警部は「夜間はカンテラを持参するようにしたまえ。疑って済まなかった。」と言った。われわれはお辞儀をしてそそくさとその場を離れた。公園に茅葺きの四阿があった

のでそこに腰を下ろしたが雨が降りだした。土砂降りになりびしょぬれになった。地面も水浸しになり一月のことであったのでかなり冷え込んでいた。夜通し雨に打たれて震えていた。随分と辛いことだった。早朝ダルムシャーラー *4 に行き服を乾かした。翌日、シャーージャハーンプルに戻り銃を地中に埋めブラヤーグ *5 に向かった。

(註)

*1 マインプリー陰謀事件 मैनुपुरी षडयंत्र केस 後述のパンディット・ゲーンダーラール・ディークシット मेंदा लाल दीक्षित (1888-1920) が中心となり革命運動の資金調達のため強盗団を組織して活動したが失敗した事件。首謀者のディークシットは愛国心から発する行動を採ったものと思われるが、この組織に参加した者たちはごく一部を除きこの地域に多かった従来の強盗団の仲間であったようだ。ラームプラサード・ビスミルもムクンディーラールもこの事件に関与しており後に官憲の追及を受ける身となった。ゲーンダーラール・ディークシットについてはこの後別項がある。ただし、M. グプタによれば、この事件は連合州で発生した陰謀事件の内唯一ベンガル人が参加していないものであるとのことだ。

*2 マインプリーはシャーージャハーンプルの南西、アグラーから約 100km 東方に位置する同名県の所在地。

*3 1918 年 12 月にデリーで開催された国民会議派の年次大会。

*4 ダルムシャーラー 多くは寺院付属のものか篤志家によって営まれる巡礼者や旅行者のための無料もしくは低料金の宿泊所。

*5 ブラヤーグ ガンジス川とヤムナー川の合流するこの地はヒンドゥー教の聖地であるが、アラーハーバード (イラーハーバード इलाहाबाद) と呼ばれることも多い。ただビスミルはこれを多く用いている。

背信

ブラヤーグのダルムシャーラーに 2, 3 日逗留する間に精神力の面でひ弱な仲間が一人いるのでもしこの男が捕まることがあれば一切の秘密は暴露されることになるため男を始末しようかという意見が出てきた。私は人を殺めるのはよくないと言った。だが、最終的には翌日ブラヤーグを離れその男を始末することになった。私は無口になった。われわれ一行は四人だった。四人全員が午後にはジュンシー *1 の城跡の見物に出掛けた。戻ると夕暮れ時になっていた。ちょうどその時刻にガンジス川を横切ってヤムナー川の岸辺に着いた。用足しを済ませて夕べの祈りをするため砂の上に腰を下ろした。仲間の一人が言った。「ヤムナーの近くに腰を下ろそう。」私は岸から離れた高いところに腰を下ろしてそこから動かずにいた。他の三人も私の側に来て腰を下ろした。私は目を閉じて瞑想していた。しばらくするとかちやつという音がした。仲間のだれかが何かしているのだろうと思った。その瞬間弾が一発発射された。弾は私の耳を掠めて飛んだ。自分を狙って発射されたのだと思いレボルバーを取り出しながら前方に走った。振り返ってみると例の男がモーゼルを手にして私を狙って撃っている。数日前その男と言い争いはしたが後で仲直りをしたのだった。だが、その男はそれにもかかわらずこのような行動に及んだのだった。私も撃ち返そうと身構えた。男は三発目を発射すると逃げ出した。ブラヤーグに逗留していたあと二人の仲間もその男と一緒にいた。三人とも逃げ去った。リボルバーが

革のケースに入っていたので私の対応が遅れたが、ほんのあと少しの間三人の内の一人でもその場に立っていたなら私の弾の標的になっていたことだろう。みな逃げて行ったので弾を撃つのは無駄なことだと思いその場を離れた。九死に一生を得たようなことだった。2メートルも離れていないようなところからモーゼルを発射されそれも私は腰を下ろしている状態だったのだ。どうして命拾いしたのか理解できなかった。一発目は弾が出なかった。3発も発射されたのに。私は心の震える思いで神を念じた。喜びの余り放心したようになり手からリボルバーもケースも地面に落ちた。その時だれかが近くにいれば私を容易に殺すことができたであろう。一分間ほどもそうしていたであろうか。するとだれかが言った。「立て」私は立ち上がりリボルバーを拾い上げた。ケースを拾った記憶はなかった。1月22日のことであった。私は上着と腰布をまとっているだけだった。髪の毛は伸びており頭には被りものもなく裸足であった。このような状態でどこへ行こうか。様々な思いが次々と脳裏に浮かんでいった。

色々な思いの浮かぶ中私はヤムナー川の岸辺をさまよい歩いていた。ダルムシャーラーに戻り鍵を壊して荷物を取り出そうと思いついた。また考えた。ダルムシャーラーに行けば弾が飛び交うことになり無益な血を見ることになるであろう。今すぐはよろしくない。一人で復讐するのは適当でない。何人かの仲間と連れだって復讐しよう。これらのこととは無関係な私の一人の友人がブラヤーグに住んでいた。その友人のところへ行つてようやくのことでチャーダル（上掛け・掛け布兼用）を一枚もらって鉄道でラクノウに向かった。ラクノウに出ると調髪してもらった。ドーティーや靴を買った。金は自分の手元にあった。たとえ現金の持ち合わせのないときでもいつも40～50ルピーの値打ちの指輪はつけていたので役立てることは出来た。戻ると他のメンバーに会いことの経緯を詳しく話した。数日間人気のないところに潜んだ。出家しようかという気持ちになった。この世には何もないではないか、と。しばらくしてから母のもとに戻り一切のことを話した。母は私にグワーリヤルの郷里に行くように命じた。数日後両親を始め全員が大叔父（祖母の弟）の家にやってきた。私もそこへ行った。四六時中どうしても復讐の念が頭から去らなかった。ある日は誓いを立てリボルバーを携えて仇を殺そうとの思いで出掛けたのだが不首尾に終わった。このように煩悶しているうちに発熱に苦しむようになった。幾月もの間具合が悪かった。母は私の考えを理解してくれた。そして慰めの言葉を掛けてくれたが、お前を殺そうとする人たちをお前は殺さないと言った。私が口実を設けて誓いに応じないでいると母はお前が返すべき親の恩の代わりに私はお前に誓わせる。どうするつもりだ、と問うた。私はすでに誓いを立ててしまったのだと答えた。母は私が逃げられないようにして私に誓いを破らせた。母は自分の言葉を翻すことはなかった。私のほうが頭を下げるしかなかった。その日から私の熱は下がりはじめ快方に向かったのだった。

（註）

*1 ジューンシー झून्सी ジューシーとも呼ばれる。ブラヤーグから東約9kmのヤムナー川沿いに位置する歴史の古い町。

潜伏 *1

村人たちと全く変わらぬような服装をして村に住み始めた。農業にも従事するようになった。見る人が見てもせいぜい町中に住んだことがあり少しは学校へ通ったことがあることぐらいし

か判らなかつただろう。畑仕事には特に念を入れた。もともと体は頑健であつた。短時日の間にそれなりの農夫になつた。あの固く乾いた土地で農業を営むのは容易なことではなかつた。アラビアゴムモドキやインドセンダンの他には樹木と呼べるようなものはない。まれにマンゴーの木が1, 2本見かけられる他は見渡す限りの茫漠たる荒れ野というか砂漠である。畑に出掛けると少し進めば足はイヌナツメの刺に囲まれる。初めの頃はとても辛かつたがそのうちに慣れてしまった。その近辺の力持ちの男子が一日に耕すことの出来る畑を自分も耕していた。顔は真っ黒に日焼けしていた。その間数日の間シャージャハーンブルに出掛けたことがあつたが、一部の人は私に気付くことさえ出来なかつた。シャージャハーンブルに着いたのは夜中であつた。汽車は出てしまつていて。昼中歩いていると一人の警官が私に気付いた。その警官が同僚たちを呼びに行っている間に私は逃げ出した。前日の疲労があつたのはもちろんだ。20 マイルほどは歩いてたのだが、その日も35 マイルは歩かなくてはならなかつた。

両親には助けてもらった。苦勞もなく過ぎた。母の蓄えは全て私が潰してしまつたのだ。父は役所から息子のマインプリー事件にかかわつて出ている逮捕令状の執行保証という名目で祖父の資産の内息子の相続分を競売に付すと伝えられた。父は驚愕して2000 ルピーの家屋を800 ルピーで売りその他の家財も安価に売り払つてシャージャハーンブルを後にした。妹2人の結婚を済ませた後に残っていた財産も全てなくなつた。両親はまた貧乏人同然になつた。逃亡した仲間のメンバーたちも惨めな有様となつた。幾月もの間ただだヒヨコマメをかじる羽目となつた。友人や支援者から得られる2, 3 ルピーの金で暮らさなければならなくなつた。やむなくリボルバーや銃を売り払つて命をつないだ。他人に話せることでもなく逮捕の恐怖から仕事を始めることも人に雇われることも出来ないでいた。

そのような状況で私は商売をすることを思いついた。すでに亡くなつていた同級生で友人のスシールチャンドラ・セーン君の思い出にベンガル語を勉強したことがあつた。弟が生まれた時には名前をスシールチャンドラとつけた。思いついたのは叢書の刊行であつた。金にもなるだろうし難しい仕事でもない。ベンガル語からヒンディー語への翻訳書を刊行することだ。経験は全くなかつた。ベンガル語で書かれた「ニヒリストの奥義」の翻訳を開始した。その時のことを思い出す度に笑いがこみ上げてくる。草をはませに何頭もの牛や水牛を引き連れて荒蕪地に出掛けていた。することもなくじつと腰を下ろしていなければならなかつたので帳面と鉛筆を持参して翻訳に取りかかるのであつた。牛や水牛が遠方に行つてしまうと翻訳を止めて棍棒を手にして牛を連れ戻しに出掛けるのであつた。しばらくの間、一人のサードゥの庵に通つたものだった。そこでは多くの時間を翻訳作業に費やした。食事のためには小麦粉を持参した。4, 5 日分の小麦粉を携えていた。自分の手で調理していた。書物が出来上がるとスシール叢書として刊行した。書名は『ボルシェビキの活動』*2 とした。二冊目は書名を『胸打つ波』*3 として刊行した。この仕事でおよそ500 ルピーの損害を被つた。大赦令*4 が布告され政治犯が釈放されたのでシャージャハーンブルに戻り何か商売を始めようと思つてのことだった。両親にいささかなりとも恩返しになるようにと思つたことだった。自分が生きている間に二度とこのシャージャハーンブルの町に足を踏み入れ自由に歩けるようにはなるまいといつも思つてたのだが、神様の思召しは人智を越えるものだ。何とその日がやつてきたのであつた。私は再びシャージャハーンブルの住人になつたのであつた。

(註)

*1 マインプリー事件で逮捕状が出ていたために警察の追及を逃れて潜伏していた時期のことである。

*2 『ボルシェヴィキの活動』は原文では“बोलशेविकों की करतूत”である。内容不詳。

*3 『胸打つ波』 原文では“दिल की लहरें”である。内容不詳。

*4 大赦令 欧州大戦（第一次大戦）後の1919年12月23日にインドの政治犯に対する大赦令が出された。

パンディット・ゲーンダーラール・ディークシット *1

パンディットはヤムナー川のほとりバテーシュワル *2 近くのマイー村にお生まれになった。マトリキュレーション、すなわち、大学入学資格試験までの英語課程を修めておられた。パンディットはイターワー県 *3 のアウライヤー *4 でD.A.V. スクール (Dayanand Anglo-Vedic School) *5 で教師をなさっておられた時にシヴァージー会 *6 を設立されたのであった。パンディットが目指されたのはシヴァージー *7 のように団体を結成して略奪を行いそれからチョウト *8、すなわち、四分の一税を徴収し武器を購入し団体にそれを提供することであった。それをやり遂げようとして藩王国から武器を運搬中に一部の若者の不注意のためにアーグラの駅近くで逮捕された。パンディットは大変勇ましく気力の横溢した方であった。静かに座していることをご存じない方だった。常に青年に何かしら説き聞かせておられた。一週間もの間編み上げ靴も脱がず制服も脱がずに過ごされることがあった。パンディットはブラフマチャーリー氏のもとへ助力を求めに行かれた際に不運にも逮捕されたのであった。ブラフマチャーリー氏の団体は藩王領内ではなく英領インド内で幾つかの強盗事件を起こしていた。強盗事件を起こしてはチャンバル川流域の荒野に身を隠すのであった。英領インドの州からグワーリヤル藩王宛に書簡が送られた。この一団を逮捕する手筈が整えられた。英領の州政府は州のインド人部隊を派遣した。部隊はアーグラ県内のチャンバル川周辺に長期に亘って留まった。騎馬警官が配置された。それでも彼らは怯えることはなかった。パンディットは裏切りのために捕らえられたのであった。ブラフマチャーリー氏のグループの一人を警察が抱き込み箠絡したのであった。強盗を働くために遠方のある場所が選ばれた。そこへ行くまでに途中で休憩しなければならなかった。その途中、一行は疲れたので休憩した。警察に通じたその男が近くに住むというその男のだれか親類の家があったので食事を持って来ると言って出掛けプーリーをこしらえてもらって戻った。皆がプーリーを食べ始めた。ブラフマチャーリー氏は食事はいつもは自分の手でこしらえて食べるかサトイモを焼いて食していたのだが、その日はそのプーリーを食することに同意された。皆が食べ始めた。ブラフマチャーリー氏もプーリーを一枚食べられた。舌がもつれだしたくさん食べた人たちは倒れ込んだ。プーリーを持ってきた男は水を持ってくると言ってその場を離れた。プーリーには毒が盛られていた。ブラフマチャーリー氏は銃を手に取りその男を銃撃した。その銃の発射と同時に四方八方から銃撃が始まった。警官たちが潜んでいたのだ。ブラフマチャーリー氏は銃撃を受け全身に傷を負った。パンディット・ゲーンダーラールは左目に弾が当たり視力を失われた。幾人かの人には弾に当たって死亡した。こうして80人のうち30人ほどが殺害された。残りの全員が逮捕されグワーリヤルの城内に収容された。城内でわれわれが面会した際にはパンディットは手紙を寄越されてことの次第を全て伝えられた。ある日は城内でわれわれにも嫌疑が生じたが、一人の職員の協力で逃げ出すことが出来たので

あった。

マインプリー事件の裁判が始まるとパンディット・ゲーンダーラールの身柄を検察側はグワーリヤル藩王国に求めた。グワーリヤル城内の刑務所の環境は極めて悪かった。パンディットは結核に冒されていた。マインプリー駅から刑務所へ向かう途中で11度も座り込むほどの衰弱振りであった。警察の取り調べに対しパンディットは何故若者たちを逮捕したのかと述べられ取り調べには自分が一切を話すとおっしゃった。警察はその言葉を信じて刑務所から共犯証人^{*9}たちが収容されていたところへ移した。そこでことの顛末を知りパンディットは夜半に一人の共犯証人を伴って脱出された。ある村の小屋に身を潜められた。同行の男は市場に用があつて出掛けたまま戻っては来なかった。小屋の戸は鎖で閉じられていた。パンディットはその小屋に3日間飲まず食わずの状態で閉じ込められた。パンディットは、男は何か面倒な目に遭っているに違いないと思った。ようやくのことで鎖がはずれた。金は全てその男が持ち去っていた。手元には一銭もなかったのでコーターから徒歩でアーグラへ出てようやく実家にたどり着かれた。病気は重篤だった。家族に累が及ばないようにと厳父は警察に届け出ようとされたがパンディットは懇願して思いとどまってもらい2、3日後に自ら家を出られた。われわれを随分探されたのだからだれの所在の手がかりも得られずデリーのあるピャーウー^{*10}での仕事に就かれた。体調は日に日に悪化していた。容態は極めて悪くなりつゝあった。実弟と夫人を呼び寄せられたが、弟は茫然とするばかりであった。何をどうすることが出来たであろうか。公立病院への入院のためために連れて行った。夫人をよそへ連れて行き病院に戻って見ると、何とそれを書くこの手が震えるのだが、パンディットはすでに息絶えておられた。遺憾だけがそこにあった。母国のために奮迅する中でパンディット・ゲーンダーラール・ディークシットは孤立無援の中で自らの身を最後の生け贄として捧げられたのであった。ご自分の行動には露ほどの迷いもなかった。パンディットは銃弾での死を願っておられた。インドの偉大なる魂が消えたというのに国民のだれ一人にも知られることがなかった。パンディットの詳しい伝記は月刊誌の『ブラッパ』にすでに発表されている。マインプリー事件の指揮官はパンディットと考えられている。この事件の特徴は中心人物のうち二人だけが当局に捕らえられたが、そのうちの一人ゲーンダーラール・ディークシットは共犯証人を伴って逃亡し、シヴクリシュンラール・ディークシット氏は脱獄したまま捕らえられなかった。半年後には有罪とされた人々も大赦により釈放された。秘密警察の怒りは完全には鎮まらず大いに不名誉なこととなった。

(註)

^{*1} パンディット・ゲーンダーラール・ディークシット(1888-1920) パンディットはブラーフマンや学者に対する敬称であるが、ディークシットはこの地域のブラーフマンのサブカーストの一。彼はアーリヤ・サマージの会員であったようだ。Manmath Nath Gupta が記している「マインプリーの誓い」というこのグループの隊歌とも言ふべきものは確かに叙事詩「マハーバーラタ」のインドの伝統を背景にしている。彼のグループには80名ほど参加していたとされる。彼自身は革命運動のための資金調達を試みたのであろうが、職業的強盗団から参加した者たちの動機は全く別のものであったと考えたがよいだろう。

^{*2} バデーシュワル बड़ेसर उट्टालブラデーシュ州アーグラ県アーグラ市の東方約55km 南東のジャムナー(ヤムナー)川右岸に位置する古くから拓けた町

^{*3} イターワー(इटवार) ウツタル・ブラデーシュ州中南部ジャムナー川沿いの県。同名の

同県の県都は北緯 26.47° 東経 79.2° に位置する。

*4 アウライヤー (औरैया) イターワール県の南東端。イターワール市の東南部のジャムナー川左岸沿いに位置する。

*5 D.A.V. スクール Dayanand Anglo-Vedic School の略称。アーリヤ・サマージでの教育振興運動の一として英国式教育を基盤とする考えの下に各地に設立された教育機関。

*6 シヴァージー会 शिवाजी समिति

*7 シヴァージー (शिवा जी) (1627-80) マラーター王国の創建者であるが、近代インドの独立運動では民族独立運動の象徴的な人物・英雄となった。

*8 チョウト (चौथ) 四分の一税。チョウトとはチョウターイー (चौथाई) と同じで四分の一の意。マラーターの支配者がその支配地の領主たちから課税評価額の四分の一を上納させたことからの命名。

*9 共犯証人 英語では approver (密告者, 共犯証人, 共犯者告発人)。ヒンディー語ではサルカーリーガワーフ सरकारी गवाह, すなわち, 検察側証人。

*10 ピャーウー (प्याऊ) 一般に人通りの多い道端などで通行人に水を飲ませるために慈善家や公共機関などにより設けられる無料の公共給水所。

III

自活

大赦令が出た後シャージャハーンプルに戻ったが、街の様子がそれまでとは違ったものになっているのを知った。だれ一人近寄ってくる人がいない。私が相手のそばへ近付いて立てば挨拶をして立ち去る。警察が大変な威力を発揮していた。間断なく影の形に添うが如くに警察が私の後をつけていた。このような暮らしをいつまで続けるべきか。機織りの仕事を習い始めた。機織り職人のジュラーハートたちはとてもつらく当たった。だれも仕事を教えたがらなかったが、どうにかして少しは習得することが出来た。ちょうどその頃ある工場でマネージャーの仕事があるというのでそれに就こうと努力した。500 ルピーの身元保証金を求められた。その頃の生活は何とも惨めなものだった。三日間も続けて食べ物がなかったことがあった。だれからも何の助力も受けるまいと決心していたのだ。私は父には一言も告げずに家を出てきていた。500 ルピーの金をどうやって調達するか。二、三人の友人に 200 ルピーぼっきりの身元保証金を貸してくれるように頼んだが、きっぱりと断られた。あたかも雷に打たれたような打撃を心に受け世の中が真っ暗になったように思えた。しかし、そのあと一人の友人の情けで仕事が見つかった。以前と比べれば少しましな状況になった。人並みの紳士のような時間を過ごすようになり手元に幾ばくかの金が入った。以前 200 ルピーの保証金を依頼した相手の友人が私のところに 4000 ルピーもの金が入った財布や銃、免許証や鑑札などをみな預けて行くようになった。私のところが安全だと言うことだった。変われば変わるものだとおかしく感じたことであった。

このようなことでしばらく時が過ぎた。以前尊崇の眼差しで見えていた 2,3 人の方たちと接する機会があった。この人たちは私が地下に潜行していた時の様子を幾つか耳にしていた。私に会ったことをとても喜んでくれ私の書いたものにも目を通してくれた。その頃私は自分の三冊

目の著書である『キャサリン』*1を書き終えていた。出版の仕事では以前に大赤字を出したことがあった。叢書の刊行は中断してしまっていた。『キャサリン』はある出版社に委ねた。有り難いことに僅かの修正を施しただけで刊行してくれた。これを見て親しい友人たちは大変喜んでくれた。私に執筆を続けるようにと随分励ましてくれた。『スワデーシーラング』*2というもう一冊も執筆し出版社に送りそれも刊行された。

随分と力を入れて『革命的な生き方』*3 (क्रांतिकारी जीवन) も執筆した。何軒かの出版社に当たってみたがどこも出版する勇気は示さなかった。原稿はアーグラ、カーンプル、カルカッタなどのあちこちに回ったあげく手元に戻ってきた。私の文章は幾つかの月刊誌に「ラーム」とか「無名氏」の筆名で出ており読者に好んで読まれていた。どこかで文章の修練をしたわけではなかったが時間を見つかれば何かを書いて発表していたものだった。多くはベンガル語や英語の書物からの翻訳をしたいと考えていたものだった。その後間もなくしてオロビンド・ゴーシュ氏*4のベンガル語の『ヨーガ修練』を翻訳した。2,3の出版社に出版の話をしてみたが極めて少額の翻訳料でならんということだった。近頃はヒンディー語の物書きや翻訳者が増えたので出版社の鼻息は荒くなってきている。ようやくのことでバナーラスの出版社がその刊行を約束してくれた。だがそれから間もなく店主自身が「文学館」に錠を下ろして姿を消してしまった。原稿はその後どうなったのか未だに不明である。最高の内容のものだったのだが。刊行されていけばヒンディーの文学愛好家にはなかなか有益なものとなっていたはずなのだが。手元には『ボルシェヴィキの活動』と『胸打つ波』が売れ残っていたので原価を割る値段でカルカッタのディーナーナート・サガティヤー氏に引き渡した。私が売ったのはほんの僅かな分量だった。ディーナーナート氏は代金をごまかした。請求書を送り訴訟を起こした。およそ400ルピーの支払いについて裁判所の命令が出たのだが、彼は全く行方知れずになってしまった。カルカッタを去りパートナーへ行き、パートナーでも幾人もの貧乏人の金をごまかして姿をくらましたのだ。経験がなかったものだからこのようなことで躓くことになった。道案内してくれる人も協力者がいて忠告してくれることもなかった。無駄な仕事や活動に精力を浪費していたものだった。

(註)

*1 『キャサリン』 ヒンディー語原文では कैथेरिन とある。これは恐らくローマ字表記の 'Catherine Breshkovsky' か 'Katerina Breshkovskaia (/ E. Breshkovskaya)' を音写したものと思われる。この作品は帝政ロシアの19世紀70年代のナロードニチェストヴォ(人民主義運動)に参加してそのため長期の流刑を受け、後に「ロシア革命の祖母(おばあさん)」と呼ばれたロシアの革命家ブレシコ=ブレシコフスカヤ・エカテリーナ(Ekaterina Breshkovskaia (/ Catherine Breshkovsky)) (1844-1934)の伝記に拠ったものと思われる。エカテリーナは自伝を著しているのでその英語訳を翻訳したものか、それとも伝記の翻訳なのか、あるいは、それらを参考にしてビスミルが執筆したものかは不明である。彼女を紹介したものとして英文では古くは次のものがある。Blackwell, Alice Stone, ed. Little Grandmother of the Russian Revolution, Little, Brown, 1919 エカテリーナについては後述する。(→「結び」*6)

*2 स्वदेशी रंग 内容不詳

*3 『革命的な生き方』 原文はक्रांतिकारी जीवनであり『革命家人生』と訳せぬでもないが内容が不明なので特定できない。ただ、出版社が刊行する勇気を示さなかったとあるので政治的に過激な内容のものであった可能性が多分にある。

*4 オロビンド・ゴーシュ(1872-1950) अरविन्द घोष インドの哲学者、思想家。20世紀初頭のインドの民族主義運動の興隆期に過激な立場でその推進に参加したが、後に民族主義運動や政治運動を離れヨーガの実習に進み哲学的思索を深めた。後に南インドのポンディシェリーに修道所を開設した。

再建

尊敬していた方々が私に革命運動組織の再建を期待する意向を表明された。これまでの経歴や経験から心は深く沈み込んでいた。私が無気力なのを見てこの人たちは私を大いに激励し、君には総括的な仕事をしてもらうのであって、他の仕事は自分たちです。若干の人員は自分たちがすでに集めており財政的にも十分である、などと告げられた。尊敬する人たちの態度を見て私も賛同した。私は自分の手元にあった武器を提供した。集められていた人たちの中で指導的な立場の人を紹介してもらった。その人物は大変に勇敢な人であるとの触れ込みであった。学歴のない農村出身の人だった。私はこれは悪党ども、もしくは、欲深い連中の徒党だと判断した。そのグループの長は私にグループの監督の仕事をするようにと依頼した。その仲間には戦場帰りの元軍人たちもいた。自分はそれまでこの手の人たちと関わりを持った経験は一度もなかった。私は二人ほどの人を連れてこの連中の仕事を監督するために出掛けた。

数日後、このグループの頭目が遊女を一人連れて来た。男はその女にリボルバーを見せて、もし逃げ出そうものなら撃ち殺すぞ、と言った。この話を聞いた仲間の一人が激怒して私に知らせようとした。ちょうどその頃だが頭目を知っていた別の男が捕らえられた。頭目は金製の宝飾品ともども逮捕された。この男は勇猛な人物だということで甚だ評判が高かったのだが、幾人もの名前を警察に伝え共犯証人となった。およそ30~40人が逮捕された。

もう一人実に勇ましい男がいた。警察が必死になって追跡していた。ある日、警部が騎馬警官と武装警官30~40人を従えてその家を包囲した。男は屋上に上がり二連銃で300発ほど発射した。銃は熱のため形が崩れた。警察は家の中には幾人もの人がいるものと判断した。警官は身を潜めて夜明けを待った。男は隙を見て家の裏手から飛び降りた。一人の警官がそれを見つけた。男は警官の鼻をめがけてリボルバーの銃床を打ちつけた。警官は悲鳴を上げた。警官が叫び声を上げると同時に家の中から発砲した音が聞こえた。警察は男は家の中にいるに違いないと思った。警官たちはだまされたのであろう。男は林の中に逃げ込み別のグループと合流した。林の中でも男は警部と遭遇したことがあった。銃撃になった。男の足にも弾が当たった。男は大胆不敵になっており、警官がどのように身を隠すかを知っていた。一味はばらばらに散らばっていた。男は私のところに身を隠そうとした。私はやっとのことでこの男から逃れた。すると男は林の中で別の一味と合流した。そこで悪事を働いたため一味の頭目がこの男を銃殺した。その頭目もその仲間が銃殺した。このようにして皆はばらばらになってしまった。逮捕された連中に対しては幾つもの強盗事件の裁判が行われ、30年の刑に処せられた者もいれば50年の刑に処せられた者や20年の刑に処せられた者もいた。どの事件にも全く無関係だったのに敵対関係にあったがために冤罪を被りはめられてしまった気の毒な男がいた。その男は絞首刑になった。あらゆる強盗事件にかかわり強奪品も凶器も発見され警察と銃撃までした男は最初絞首刑の判決を受けたのだが控訴がうまく行き高裁では絞首刑だったのがわずか5年の懲役に改まった。刑務所の連中とぐるになって強盗事件の証人確認を行わせなかったのだ。この

一味の活動はこのようにして終わった。幸運にもわれわれの所持していた武器は無事に手元に残った。リボルバーが1挺押収されただけだった。

贋札作り *1

ちょうどその頃ある友人が贋札作りをするという人物と知り合いになったことがあった。友人は大きな期待を抱き遠大な計画を立ててこう話した。贋札作りをするという男と知り合いになった。なかなかいい腕の男なんだ。私自身も出来上がった贋札なるものを見てみたいと強く思いその贋札作りの男に会ってみたいと話した。贋札作りの男は会ってみると大いにこちらの興味をそそる話をした。私は場所と経済的な支援をするからこしらえてくれと頼んだ。男の言う通りに準備をした。ただその男には贋札をこしらえる際には自分も立ち会わせてもらうからと念を押した。説明してくれなくてもいいが、その製法は是非自分の目で見てみたいとも伝えた。

男は最初 10 ルピーの札を作ることにした。私に 10 ルピーの新札を求めた。9 ルピー分の薬品を購入すると言って金を受け取って行った。夜贋札作りの段取りになった。ガラス瓶が 2 本運び込まれた。紙も少々運び込まれた。2, 3 本のガラス瓶に何か薬品が入っていた。その薬品を混ぜ合わせて一つのプレートに入れ白紙を浸した。私の持参した 10 ルピーに白紙を重ね合わせて一緒に浸した。次に白紙にそれを包んで一人の仲間に手渡し火に炙ってくるように命じた。火は少し離れたところに燃えていた。しばらくの間火にかざした後その包みを持ってきて返した。贋札作りの男は包みを開き 2 つのガラス瓶につけ、薬品で洗い紐で瓶を結わえておいてから 2 時間経ったら贋札が出来上がると言った。瓶を下に置いた。話をしていると男はこの作業には大変な費用が掛かるのだと言う。少額の紙幣をこしらえてもなんの利益にもならない。作るならば利益の上がる高額紙幣でないといけない。所用があるので出掛けるといって男も立ち去った。2 時間後に来るということになった。

私はお札に白紙を重ねることでどうして新札が出来上がるのだろうかと考え始めた。自分は印刷の仕事も習ったことがあり写真術もいささか知っていた。理科の学習もしていたので札から札がどうして刷り出されるのかさっぱりわけが分からなかった。一番の問題は札の番号がどうして刷り出されるのかと言うことだった。まったくあやしいぞという思いがした。2 時間後に出掛けた時にはリボルバーに弾を込めてポケットに忍ばせておいた。男は時間通りにやってきた。瓶の蓋をあけて紙を取り出しそれをもう一度一つの薬品につけて洗った。そこで 2 枚の紙を引き離した。1 枚は私の持ってきた紙幣でもう 1 枚は 10 ルピーの新札であり 1 枚 1 枚はがしたものを乾かした。「どうです。立派な札でしょう。」と男が言った。私は手に取ってみた。2 枚の紙幣の番号を比べてみた。両者は全く違っていた。私はポケットからリボルバーを取り出し男の胸元に突きつけて言った。「おい、お前はあちこちでこんな風に人を騙しているのだな。」男は震え上がって床に這い蹲った。私はその男に、こんなインチキは田舎の人には通用するかも知れないし不用心な人なら教育を受けた人でも騙されるかも知れないが、おれには通用しないぞ、と言った。最後に男に誓約書を書かせ二度と同じようなことをしないようにその誓約書に男の両手の 10 本の指の指紋を押させた。男は指紋を押すのを嫌がったが私はリボルバーを取り出し弾が飛び出るぞと言ったらすぐさまそれに応じた。男はすっかり怯えていた。私は 10 ルピーを費やしていた。私は友人たちに見せてやろうと思い 2 枚の札と瓶、薬品などを全てを没収した。その後で男を解放してやった。男は火に炙ると言った作業の際に紙の包みを

手渡したが、その時に男の仲間が2枚の札が入っていた包みと取り替えたのだった。こうして贋札が出来上がったのだった。この類の大きな贋札作りのグループがありインド全体を股にかけて数千ルピーを儲けている。この手法で5万ルピー以上の荒稼ぎをしている男のことを私は知っている。この連中の手口は周旋人と言うか手先を配置していることだ。手先が一般人のところへ近付き贋札作りの話を持ちかける。金が手にはいるのを嫌がる人はいないものだ。贋札作りを依頼する。最初は10ルピー札をこしらえて手渡す。市場で通用させる。次に100ルピー札をこしらえて渡す。それも市場で通用させる。通用しないはずがない。そのお札は本物である。それが策略である。その後は1000ルピー札や500ルピー札を持ってこさせる。無理をしても人は金儲けの話になると工面して持ってくるものだ。白紙を瓶に結わえる。1000ルピー札は懐に入れてドロロンする。札を預けた人は待っているが贋札作りの行方は知れぬ。いよいよ仕方なく瓶を開けてみると白紙以外には何もない。自分の頭を叩くしかない。警察に届けると逆にひどい目に遭うのでだれにも話せない。口惜しさに地団駄を踏むばかりだ。警察はこういう連中の一部を捕らえてもいるのだが連中は警察に規則通りに上納金を納めているので連中の身の安全は守られているというわけだ。

(註)

*1 贋札作り 1910年に贋金作りによる革命運動の資金調達がベンガルで行われたとの記録があるが、この件はビスミルたちのグループがそのような方法を試みようとして詐欺師に欺かれそうになった記録である。(M.N.Gupta, op.cit. p.57) また、サーンヤール (Sanyal) はその後もダーカー (ダッカ) のアヌシーラン・サミティ (オヌシロン党) が贋札作りの無駄な努力をしていたことを記録している。शचीन्द्रनाथ सान्याल, बन्दी जीवन, पृ० 337

策謀

幾人かの先輩たちが秘密結社の規約をこしらえて私に見せてくれた。規約の一つに結社の活動に従事する者には結社の方から一定額の月俸を支給するという文言があった。私はその規約を無条件で受け入れるのに応じなかった。一切の時間を結社のために費やす人には結社から生活費のみを支給するところまでは私も賛成であった。何かの職業に就いている人に幾らかの手当を与えるのは適当ではない。結社の財政から幾らかが支給される人たちも何かの職業に就くのが望ましいのである。完全に結社の支援に頼り全くの雇われの身にならないためである。若干の人の生命の責任を負いそして僅かでも秘密を漏らすだけで甚だ危険な結末が生じ得るのであるから全くの雇い人に秘密結社の仕事をさせることは適切ではない。その後その先輩諸氏は次のように合意した。すなわち、一定額の財源を結社のメンバーに支給するためのものとして確保する。収入源の内訳はダカイティー、すなわち、強奪により得られるものの半分を結社に納入し半分は結社のメンバーに平等に分割する、というものであった。私はこの種の提言に同意出来なかった。目的の一つが飯を食うことであるような秘密結社に協力することを私は断った。私のこのような考えを知るとその先輩たちは一つの策略を巡らした。

この先輩たちはこれらの提言や規約などを私が拒否すると黙ってしまった。私自身も今まで自分に随分信頼を寄せていた人たち、すなわち、私に様々な希望を抱かせ革命党の再建を依頼した人たち、実に様々な期待を抱かせた人たち、何事も自分自身が行うことを約束した人たち

が私にこの手の規約を作るようにと要求するようになったのだ。私は大変驚いた。先に私がマインブリー事件のメンバーとして皆と一緒に活動していた際にはメンバーのだれ一人として個人の出費に結社の金を使うというのは全くの罪悪と考えていたものだ。出来る限り自分の小遣い銭は親元から持ってきて結社の費用に費やしていたものだ。故に私はこのような規約に同意する勇氣は持たなかった。時が移り多くの金が入るようになれば一部のメンバーは利己的になり多くの金を取るようになりお互いに気まずい思いが増すことになろうと思った。その結果は実に恐ろしいものなのだ。従って私はこのような活動に協力することを適切だとは思わなかった。

このような私の様子を見て一部の者たちは私に対する策略を巡らした。私が彼らの言う通りの規約を認めて私が所有している武器を私から取り上げて自分たちの思い通りにしようとした。私が武器を取り返そうとしたら私と戦い折りを見て私をどこかへ連れ出して殺害するというのである。三人がこの策略を巡らし私を騙そうとしたのであった。偶然にもその内の一人が私を少し気の毒に思ったのだった。その男が私のところへやってきて一切の秘密を暴露した。それを聞くと甚だ残念な思いがした。自分が父親同然に敬愛してきた人たちが私をやっつけるためにこのような卑劣な行動をしようとしているのだ。私は気を取り直し警戒を始めた。再びブラヤグで起きたような事件が起こらないようにその人たちを警戒するようになった。秘密を漏らしてくれた人はリボルバー一挺をしきりに手に入れたがっていた。そのため私を信用させようと秘密を明かしたのだった。その人はリボルバーを貸してくれと私に言った。私が貸せばわがものとするに決まっている。私は困り果てた。今やリボルバーを手に入れるのは容易なことではなかった。その後ようやくのことでこの策略から逃れ出た。

それからは私はそちらの方には一切心を向けず熱心に仕事をするようになった。少し金を貯めるというつもりで仲介業や口入れなどの仕事をしていた。そうして父の担っていた重荷を僅かばかり分かち合った。末の妹はまだ結婚していなかった。父の力だけでは良家に嫁がせるのは難しかった。私は金を貯めて妹をあるザミンダールの家に嫁がせた。父の荷は少し軽くなった。後は両親と父方の祖母と弟を養うことであったが大して難しいことではなかった。母は今度は私の縁談をどうしてもまとめようと懸命になった。幾つも良縁と言うべき縁談があったのだが十分な資産が出来るまでは結婚生活に束縛されてはならないと思い勤めをやめて自営業を始めた。一人の友人が協力してくれた。絹織物の工場を設立した。仕事に熱を入れた。神様の思召しで仕事は順調に行った。1年半ほどで立派なものになった。3, 4 千ルピーの資本で始めた仕事だったが1年後にはおよそ2千ルピーの純利益があった。気持ち盛りがりあと二つほどの事業も始めた。ちょうどその頃、連合州の革命運動組織^{*1}の再結成が進行しているのを知った。活動は始まっており私自身も協力を約束したのだったが、事業にかかわっていたので半年後に事業をパートナーに譲って自由にすれば運動に参加できるからとして半年間の猶予をもらった。半年の間に工場の仕事を片付け後始末について一切をパートナーに説明した。それから約束通りに活動への協力に努めることになった。

(註)

^{*1} 革命運動組織 原文にはकृतिकारी दल とある。革命党とも訳すことが出来るが、特定の組織や党を指すものではない。ラームブラサードは一般的に革命運動の団体を示す際にはこの語を用いているようだ。

IV

団結

もう二度とこの種の活動には参加するまいと決心していたのだが、再び革命運動に手を染めることになった。と言うのは、私の渴きは癒されていなかったし願望はまだ胸の内に留まっていたからだ。非協力運動^{*1}はすでに沈滞してしまっていた。非協力運動に参加していた青年の大半は革命運動に協力し熱心に活動するものと全幅の信頼・期待がかけられていた。われわれの活動が始まり非協力運動の活動家たちに探りを入れてみると非協力運動に対する以上に随分と冷淡になってしまっていた。若者たちの期待にはすでに冷水がかけられてしまっていた。自分たちの元手は尽きてしまっておりまるで家の中では静かに断食による願行が行われているような有様だった。将来の展望も特に見るべきものはなかった。国民会議派内にもスワラージ党^{*2}が勢いを持ち始めていた。いささかでも資産があり親しい仲間たちの組織がある人たちは立法参事会や立法会議の議員になっていた。このような状況でもしも革命組織の活動家たちが十分な資金を持ち合わせていたならば非協力運動家たちを掌握して彼らに活動をさせることが出来たであろう。しかし、どれほど本当の活動家であろうとも生身の人間でありそれぞれの日常があり生活がある。飢えを凌ぐためにはたとえ僅かであろうとも食べ物なくてはならない。また、体を包む衣類もなくてはならない。すなわち、日常生活を営むことの出来るだけの段取りがなくてはならない。資産家で愛国者の人たちは非協力運動に力一杯の協力をしてくれた。その他にも一部の心ある人たちはいささかなりとも経済的な支援をしてくれていた。州内の各県に組織を構築することが考えられた。警察の目を逃れるためにもあらゆる努力をしなければならなかった。このような状況では世間一般の決まりを守りながら活動を行うことは甚だ困難なことであった。様々な努力がなされたがいずれも失敗に終わっていた。若干の県では組織の活動家が決められいささかの額ながら月々の生活費が支給されていた。半年以上もこのようにして活動は続いたが、いささかなりとも経済支援をしてくれた人たちもやがては手を引くようになった。われわれの置かれた状況は甚だ苦しいものとなった。一切の責任は私が負うようになってしまっていた。だれも如何なる形の支援もしてくれなくなってしまっていた。あちこちの県から活動家たちが月々の費用を求めてやってきていた。私を直接訪ねて来た人も幾人かいた。私は借金をしてその人たちに一か月の費用を与えた。幾人かの人たちに借金を負った私はそれを返却できなくなっていた。ある支部の活動家たちは資金が手に入らなくなると活動を止めて去ってしまった。私にその人たちの腹を満たしてやるだけの手立てがあらうはずがなかった。全くお手上げの状態でなんとかその人たちに理解を乞うしかなかった。

間もなく革命運動を呼びかける檄文^{*3}が届いた。全国一斉に定まった日に檄文が飛ばされたのだ。ラングーン、ボンベイ、ラーホール、アムリットサル、カルカッタ、それにベンガル州の主要な都市と連合州の主要な県に相当数の檄が届けられた。インド政府は同じ日にインド全土に檄が飛ばされるとはどれほど組織立った団体が背後にあるのかと大いに警戒した。その直後に私は執行委員会を開催し本部の欠けていたところに一人を任命した。本部ではいささか変革も行われた。というのは政府のもとには連合州に関して相当数の情報が届けられていたからである。今後の活動方針が決定された。

(註)

*1 非協力運動 原文には असहयोग आंदोलन とある。もともとは M.K. ガンディーが南アフリカで行った抵抗運動に発するものであるが、ここではガンディーがインドで指導したイギリスに対する非暴力的抵抗運動、反英非協力不服従運動のうち第一次サティヤグラハ運動(1919-22)とも呼ばれるものを指す。1922年1月23日に発生したチャウリー・チャウラーにおける警察署襲撃事件をうけてガンディーはこの運動を停止した。

*2 スワラージ党(स्वराज्य दल) 英語では Swaraj Party とも Swarajya Party とも記された。州立法機関への参加を巡って国民会議派内の対立が生じ立法機関内からの議会闘争の必要性を説いたモーティヤーラール・ネルーや C.R. ダースらが 1923 年 1 月に結成した。

*3 1924 年 10 月に連合州のカーンプルにおいて革命運動家たちが集結し全国的な会議が開催され中央組織 Hindustan Republican Association (インド共和国協会) が結成された。その中心となったのはバナーラス陰謀事件によりアンダマン島への終身流刑に処せられたが、'20 年 2 月に大赦により釈放されたシャチンドラナート・サーンヤル (1893-1942 शचीन्द्रनाथ सान्याल, Sachindranath Sanyal, ショチンドロナト・シャンナル), ベンガル(ダーカー)のアヌシーラン党(オヌシロン・ショミティ)から連合州に派遣されて来っていたヨーゲーシュチャンドラ・チャタルジー (1895-1967 जोगेशचुचन्द्रो・चाटार्जी Jogesh Chandra Chatterji) やラーजेन्द्रナート・ラーヒリー (Rajendra Nath Lahiri), サティシュチャンドラ・シンハ (Satis Chandra Sinha) らであった。会が発行した機関紙 'Revolutionary' は 1924 年に配布された。ビスミルもこの会議には参加していたようであるからここに言及されていることはこの会議の前のことと思われる。

窮状

その頃の組織のメンバーたちは甚だ惨めな状態にあった。ヒヨコマメ^{*1}すらろくに手に入らないのだ。誰も彼もがなにがしかの借金を背負っていた。誰一人まともな身なりをしていなかった。一部のものは学生を装って宗教施設の炊き出しで食事にありつくような有様だった。若干の者はアジトを離れてしまった。私は借金をしていた 400 ルピー以上の金を使い果たしていた。この窮状に私は大変苦しい思いをした。私自身も十分な食事が出来なくなっていた。援助を乞いにシンパのもとを訪ねてみたが全く相手にされなかった。どうすればいいのか全く見当がつかない有様だった。優しい心根の青年たちが私を取り囲んでどうしたらいいのかと問う。私は青年たちのこけた顔を見ては国のために思い立ち上がったために思わず物乞いの人たちよりも惨めな姿になっている有様にしばしば涙を流した。どの青年のクルターもドーティーもまともなものはなかった。着替えがないものだからタオルを腰に巻いての沐浴である。一食は宗教施設で施し物の食事をするがもう一度は 2 パイサーのはったい粉を食べる。これまで 15 年間私は日に 1 度は牛乳を飲んでいたので青年たちの有様を見ては到底牛乳は飲めなかった。私も皆と一緒に はったい粉を食べていた。これほどの青年たちの一生を台無しにして一体どこへやろうとしているのかと考えた。組織のメンバーにした時には大きな期待を抱かせたものだった。幾人かは学業を中断して運動に引き入れていた。もしもこうなることが判っていたならばこのような組織には協力しなかったものを。悪いものに引っかかったものだ。どうすればいい

のかさっぱり判らなくなった。ついに肚を決めて断固としてやり抜く決断をした。

ちょうどその頃ベンガル条令^{*2}が發布された。逮捕が始まった。その影響でついには活動家たちの意気が消沈し始めた。どのような対策を講じたらよいのか少しも決断できないでいた。毎月100ルピーが手に入るような工面をしようと努めた。各支部の代表に組織のメンバーから少し援助してもらい月々の会費を徴収しようと頼んだが誰も聞き入れてはくれなかった。幾人かの人に給料の一部を毎月寄付してくれるように個人的に依頼したが誰からも全く相手にされなかった。メンバーは毎日私のところへ訪ねて来る。飢え死にしそうだ、なんとかしてくれとの依頼の手紙はぞくぞくと来る。二人ほどの人には商売を始めさせた。2、3の県では活動を停止した。その他のメンバーたちには次のように明言した。毎月を送金できないので生活の何らかの手段がありそれをもとに活動出来るのであれば活動を続けてくれ。送金が可能になった際には送金するが毎月決まった額の送金をする義務を負うものではない。20ルピーの借金を申し込んでくる者もいれば50ルピーの請求書を寄越す者もいた。幾人かは納得できずに活動を止めた。私もそれもいいだろうと思った。しかし、それほどにしても生活は成り立たなかった。

(註)

^{*1} ヒヨコマメ ヒヨコマメ (雑豆) とはガルバンソとも呼ばれる豆の一種であるが、安価な穀物の代表の一。そのまま煎っても食されるが、ひき割りにしたものをダール (豆汁) にしても食される。「煎ったヒヨコマメを食べる」という表現で食べ物に甚だ困窮することや粗食を表現する。

^{*2} ベンガル条令 (Bengal Ordinance) インド総督が1915年3月に制定された大戦下のインド防衛法に類似の権限を当局に与えるためベンガルでのテロ活動の活発化に対応するとの名目により規模を拡大して1924年10月25日に公布した総督令。恣意的な逮捕や審判無しでの無期限の拘禁や財産没収を可能にした。

気負う青年たち

先輩の一部には自分の体面を保ったり自分を立派に見せることが自分の義務のように考える人がいるが、そのことから甚大な損害が生じるものだ。純真な人たちはそのような人を信頼して勇気や能力、技量を過大に期待し信奉するものだ。しかし、その時が来ればその期待は失望に変わるものなのだ。この類の人たちが何らかの理由で名誉を得たり帆に風を受ける状況で何か高邁な活動に協力したとなると自らを偉大な活動家であると宣言する。世間の人たちも無批判にその人の言葉を信じてしまう。特に青年たちはこの人たちが仕掛ける罠にいともしずにかかってしまうものだ。このような人たちこそ主導権争いのため一人よがりなことをするものなのだ。だからこそいろんな徒党が出来る。このような人たちはどの社会にもどの民族にもいるものだ。革命組織もそれを免れることは出来ない。青年たちは気持ちが安定していないものだ。落ち着いて組織的な活動をするのが大変苦手である。青年たちの胸には強い思いが湧き起こるものである。僅かばかりの武器が手に入るとなると当局に対してしてやったりと思うものだ。私も革命組織に協力しようと思っていた頃にはリボルバーが一挺手に入れば10人や20人のイギリス人を撃ち殺してやろうと熱望したものだった。これと同じような感情を抱いている青年を幾人も私は見てきた。どうにかしてリボルバーやピストルが手に入れば自分の手元に置いて

おきたいと強く念じるものだ。リボルバーを手元に置く利点は何かと彼らに問うたことがあるが、彼らは何ら満足の行く答えを返すことが出来なかった。幾人もの青年がこのような嗜好を満足させるために数百ルピーを無駄にしたのも私は見てきている。革命運動のメンバーでも特別の活動をしているのでもなくただひたすら趣味のためにリボルバーを所持するというわけだ。正にこのような少数の青年たちのグループをある人が結成した。皆が品行方正で誇り高く真面目な活動家たちであった。このグループは外国から好みに応じて十分な数量の武器を入手するすぐれた手蔓を手に入れていた。その武器の値段も大したことはなかった。十分な数量、それも新しいのが入手出来るのであった。金さえ工面して必要な時に支払えば借りられ、また、種類も数量も必要だけ手にはいるような段取りがなされていた。いや、そればかりかいざという時に特別の装置の付いた銃砲も製造してもらえるのであった。その頃、われわれのグループは資金的に甚だ苦しかった。この手蔓が見つかりそれを利用したい気持ちがありながらも資金がなく何の見通しも立たなかったのだ。どうしても資金の調達^{*1}をしなければならなかった。それをどうするか。寄付をしてくれる人も金を貸してくれる人もなくついに強奪の方法に頼ることが決定された。しかし、だれか個人の財産を奪いたくはなかった。そこで強奪するのならと考へついたのは政府の金という公金はどうか、ということになった。どうしたものかとあれこれ考へていた時にある日私は汽車に乗っていた。私は車掌室の近くの車輦に乗っていたのだが、駅長が運んできた現金袋を車掌室に投げ込んだ。がたがたという音が聞こえたので車外へ降りてみると車掌室には鉄製のケースが置かれていた。その中に現金袋を投げ込んだに違いないと思った。次の駅ではその中に袋を投入するのを目にした。鉄のケースは車掌室に鉄の鎖でつながれていて錠前がついており必要に応じて錠前が開かれるのに違いないと想像した。それから数日後にラクノウ駅に行く機会があった。ある客車から赤帽たちが公金の入った鉄製の金庫を下ろそうとしているのを見た。注意してみるとその鉄の金庫には鎖も錠もつけられておらず無造作に置かれていた。正にその時これを襲う決心をしたのであった。

(註)

^{*1} 資金の調達 列車強盗事件に先立ってビスミルが指揮して行われたとされる従来の強盗事件が2件記録されている。(इन्द्रविद्या वाचस्पति, भारतीय स्वाधीनता-संग्राम का इतिहास, नई दिल्ली, पृ. 254) ビスミル自身は言及していないが、列車強盗事件に直接参加した M.Gupta は次のように書いている。「何らかの理由で、多分密かに船で大量の武器が運ばれて来たのでそれを購入するのに数千ルピーの金が必要となり皆は出来るだけ自分の家から金を持ち出した。また、寄付も募ったが足りなかったので強盗を働くことになり実際1箇所では強盗も行ったのだが全く金にならなかった。そこでラームプラサードが列車強盗を思いついたのだった。アシュファークは「そうすれば政府に挑戦することになり政府は革命運動の決意を知り一層警戒を強めることになるとして反対した。」前段については確認のしようもないがアシュファークの意見はあり得たことと思われる。Gupta, op.cit. p.242

列車強盗^{*1}

正にその時から思い詰めるようになった。直ちに列車の時刻表を見て列車はサハーランブル駅から出るのでラクノウ駅までの間に毎日1万ルピーの金が入るに違いないと想定した。用意

万端整えて実行者を集めにかかった。10人の活動家を集め、列車が小さな駅に停車した際に駅の電信所を占拠し輸送中の金庫を下ろし破壊して得られるだけのものを手に入れて姿をくらます、ということ考えた。しかしそうするにはもっと多くの人手が必要であった。そのため走行中の列車を客室についている緊急停車用のチェーンを引いて急停車させ強奪するということが決められた。3等車のチェーンを引いても停車しないかも知れない。というのは3等車の設備はお粗末だからである。そこで2等車に乗り込んだ。停車すると全員が降り立って車掌室に向かった。金庫を下ろしてたがねを用いて切り裂こうとしたが役に立たなかったのが用いられた。

客車から地面へ降り立った乗客たちには客車に戻るように伝えた。車掌は車に乗り込もうとしたが車掌のいないままで動き出さないように地面に伏せているように命じた。2人のメンバーに線路から離れた草むらに立って発砲を続けるように命じた。仲間の一人が車掌室から下へ降りた。その男もモーゼルを携帯していた。モーゼルを撃つようなこんな好機はまたとあるまい。彼は興奮してモーゼルを水平に構えて撃ち始めた。私は彼を見つけてすぐさま叱りつけた。彼には銃を撃つ任務は全く与えられていなかったからである。それにもしも乗客が好奇心から窓から首を出せば被弾するに決まっているからである。実際その通りのことが起こってしまったのだ。一人の男性が自分が乗っていた車輛から降りて女性専用車に乗車している妻のところへ行こうとして被弾したのであった。この仲間が撃った弾が当たったのだと思う。というのは彼は車掌室から降りた際にはわずか2、3発しか発射していないからである。ちょうどその時女性が騒ぎ立て夫が近くへ行こうとしたところでのぼせ上がったそのメンバーの気まぐれな一発の餌食になったというわけである。銃を構えて立ち向かって来ない限り、あるいは、対抗しての発砲がない限り誰に向かっても発砲するなと私は万全の準備をしていたのであったが。私は殺人まで犯して列車強盗を陰惨なものにはしたくなかった。それにもかかわらず私の命令に従わず自分の任務を放棄して発砲した結果がこれであった。発砲する任務を与えられていたメンバーは経験豊かで熟練した人物であったので絶対に間違いが起こるはずがなかった。彼らが所定の位置から5分間隔で5発発射していたのを私は確認している。それが私の命じたことであった。

金庫を破壊して全ての現金袋を3個に束ねた。全員に幾度も忘れ物がないようにするように念を押した。それにもかかわらず一人のメンバーはチャーダルを車内に残してきた。途中でわれわれは現金袋から金を取り出して束ね直ちにラクノウ市内に入った。誰も誰何したりどこから来たのかと問う人はいなかった。こうして10人のメンバーで1つの列車を停止させ強奪を行ったのであった。列車には小銃もしくはライフル銃を持った者が14人乗り合わせていた。武器を持ったイギリス人兵士2人がいた。だが、全員おとなしくしていた。機関士と助士は2人ともすっかり動転していた。2人ともイギリス人だった。機関士は機関車の中で横たわっていた。助士は便所に逃げ込んだ。乗客は相手にせず公金を強奪するのだと伝えてあった。そのため乗客たちもおとなしくしていた。乗客たちは30～40人ほどが列車を包囲したのだと思った。わずか10人の若者たちがこれほどの大騒動を起こしたのであった。一般に多くの人々は10人の青年たちが列車を止めて強奪したことを信じようとしまいだろう。ともかく事実はこの通りであった。この10人のメンバーの大半は年齢が二十歳過ぎで頑丈な体格の持ち主でもなかった。この成功を見て私は意気軒昂となった。自分の考えていたことが思い通りになったのであった。警官の勇気については見当がついていた。この事件により将来について大きな希望が湧いた。

青年たちの士気も高まった。借金は全て返却した。武器の購入のため 1000 ルピーほどを送金した。各地のセンターに人員を適切に派遣して他の州にも活動を広げる決定をして若干の手配をした。青年の一つのグループは爆弾製造の準備をした。私にも援助を求めた。私は資金面で援助してメンバーを一人派遣する約束をした。だが幾つかの失敗が生じ全体が大混乱することになった。

外国の革命運動家たちがその始めにわれわれと同じような努力をしたのかどうかということを知ることが出来なかった。もしも経験が十分であったならばこれほどつまらない失策はしなかったであろう。たとえ失策があったとしても少しも混乱の生じることはなかったろうし秘密が暴かれることもなくこのような状況に陥ることもなかったであろう。自分が組織化したものにはどこから見ても何の弱点も見えなかった。なんらの欠点も見えなかったので目をつぶってじっとしていたのだ。しかしながら、獅子身中の虫というのがいたのだ。そいつに徹底的に叩きのめされることになった。

そはわが首の飾りと思いが

今やわが身に噛みつくくちなわとなれり

若者たちは競争心からしばしばあら探しの言い争いや喧嘩を始めそれが猛烈な様相を呈することがあった。話が自分のところへ持ち込まれると優しく自分たちの集団全体の置かれた状況を考えさせるようにして皆をなだめることにしていた。時には主導権を巡って言い争いになることがあった。一つの支部の支部長に対してそこのメンバーたちが甚だ不満をかこっていた。支部長の経験不足から若干の失策が生じていたからだ。それを見て私は大いに残念に思うと同時に驚きもした。主導権争いは一番恐ろしい化け物だからだ。この化け物がとりつくとい切が駄目になってしまう。ひたすらお互いのあら探しに時を過ごすことになり憎しみはついには恐ろしい結果を生み出すことになるものだ。この類の知らせが耳に入っただけで全員を呼び寄せて激しく叱責した。皆が己の非を認め悔いて仲良く活動を始めた。だが、ついに党派争いが生じることになった。党派が出来てしまったのだ。だが、皆は私には信頼を寄せてくれ私の言うことを聞き入れてくれていた。そのようなことがありながらも私には誰に対してもいささかの疑念はなかった。だが、神様はこのような結末をお望みだったのだ。

(註)

*1 列車強盗 1925 年 8 月 9 日に北部鉄道の連合州のサハーランブルラクノウ線のラクノウ駅の一駅手前のアラムナガル駅 (Alamnagar) ともう一つ手前のカーコーリー駅 (Kakori) との間で行われた鉄道公金の強奪事件。実行犯は M.Gupta によれば 10 名。実行犯に下された刑を見ると死刑 4 名、1 名終身流刑、1 名は共犯証人になり放免、1 名は逃亡、その他は有期刑。この事件に関しては実行犯以外にも受刑者があった。

逮捕

カーコーリー列車強盗事件の直後から警察は警戒を非常に強めた。大々的に調査が始まった。シャーージャハーンブルに幾人か新しい人物が現れた。警察の特別任務を帯びた連中が私にも面

会した。街中は列車強盗が誰の仕業であったのかの話題で持ち切りになった。ちょうどその頃町中には強奪された札が 1,2 枚出てきたので警察の調査・探索は一段と厳しくなってきた。幾人かの友人が私に用心するようにと忠告してくれた。私が逮捕されるという確かな情報をくれた人も一人二人いた。私はどうしたものかさっぱり分からなかった。仮に逮捕されたとしても警察は私に不利な証拠は何も入手できないだろうと考えていたのである。自分の頭の良さを過信していたのだ。他人よりも自分の方が頭がいいのだと思っていた。国民の共感を確認してみたいという思いもあった。自分たちが命を捧げようとしているその国の国民がわれわれに対していかほどの共感を抱いているのか。刑務所の体験も少しはしなければならなかった。実際、私は活動を重ねているうちに疲労してしまっていた。これから先には更に多くの人を殺さなくてはならないことを考えて茫然となるのであった。人が私に伝えてくれることを少しも心配していなかったのだ。

夜 11 時頃に友人の家から自分の住まいに戻った。途中で秘密警察の刑事たちと出くわした。その時も私の動きを特別に見張っていたのだった。私はそれを特に気にもせず住まいに戻って床についた。朝方 4 時に目が覚めた。用足しなどを済ませると表から銃床の音が聞こえてきた。警察が来たのが判った。私はすぐさま戸を開けて表に出た。一人の警官が近付いてきて私の腕をつかんだ。逮捕されたのだ。私が着ていたのはアンゴーチヤーだけで警官はさほど恐れている様子ではなかった。家に武器があるなら差し出せと言うので私は、家には不都合なものは何一つ持っていないと答えた。警官は大変紳士的な態度で接し手錠などは一切かけなかった。家宅捜索の際に私の服のポケットに入っていた 1 通の手紙が見つかった。私は 3, 4 通の手紙を書いていた。郵便局で出してしまうとしたのだがその日の便は出た後だった。投函しようと思ってそれらの手紙は皆手元に置いていた。投函するのも手元に持っているのも同じことだと思い家に持ち帰っていたのだが、そのうちの 1 通が不都合なもので警察の手に渡ったのだった。逮捕された後本署に連行された。そこで秘密警察の幹部と対面した。幹部は私以外にはもう一人の人物しか知らない話を幾つかした。第三者はそのような詳細を知り得ない事柄だった。私はひどく驚いた。だが私はもう一人の人物に全身全霊の信頼を寄せていたのでその人物を疑うことは出来なかった。シャージャハーンブルで逮捕された人たちの逮捕の様子も不思議なものだった。誰も何ら疑うことのなかった人のことを警察がどうして知るに至ったのだ。シャージャハーンブル以外の地では何が起こったのかは全く知ることが出来なかった。拘留所に行ってみて多分他のところでも逮捕が行われたに違いないと多少推察することが出来た。逮捕が行われたとの知らせを聞いて街にいた仲間たちは皆怯えた。誰一人拘留所の中にいるわれわれのところに情報を伝える手配さえすることが出来なかった。

刑務所 *1

刑務所に着くなり秘密警察はわれわれ仲間を離ればなれにしたのであったが、それでもわれわれは話が出来た。一般の犯罪人と一緒にしておくとか容易に会話が出来るので皆を離ればなれの独房に閉じ込めたのであった。同じ容疑で逮捕の行われたところでは他の県の刑務所でも同じ扱いがなされた。われわれを離ればなれにしておくのは一人ずつ個別に会って話が出来るものだから警察には好都合なことだった。脅すかと思えば世間話をして秘密を開き出そうとする。経験を積んだ人たちは警察と話をしようとしな。会って話しても得になることは一つもない

からだ。状況を知り情報を得ようとして少しは話に応じる人がいる。警察官と会って話をするというようなものではない。連中は手練手管を用いて吐かせるのを仕事にしているわけだ。一生をそのようなことに費やしているというわけだ。青年たちがそのようなこすつからさを弁えているわけがない。そのような作り話が彼らに出来ようはずがない。

情報が一切得られないとなると人は大いに動揺するものだ。警察がどう動いているのか運命はどのような結末をもたらすのか分かりはしない。時間が経つほど心配は増す。警察は刑務所の責任者に会って被告人が面会人と家のこと家族のことについての話をするのは許しても裁判についての会話は許可しないように指図する。便宜を図ってもらおうと思えばまず最初に信用のおける弁護士が然るべき時に訪れて話が出来ようにすることが必須である。弁護士はなんらの制約を受けない。弁護士と容疑者・被告との会話を第三者は誰も聞くことが出来ない。そのような法律があるからだ。このことは後になって知った。逮捕された後シャージャハーンブルの弁護士たちに会いたいと思ったがこの街には法廷闘争に怖じ気付くような臆病者の弁護士しかいないのだ。

秘密警察の警部が私に会いにやってきた。少し話をして私を共犯証人、すなわち、検察側証人にしたいとの意向を表明した。数日後一人の友人が自分も捕らえられるのではないかと怯えバナーラシーラールと面会し言いくめて彼を検察側証人に仕立てた。バナーラシーラールは誰が助けてくれようか、きっと処罰されることになると非常に動揺した。もしも弁護士と面会していたならば彼が精神的に潰れることはなかったであろう。シャージャハーンブルの弁護士パンディット・ハルカランナート氏が訪れた。氏が被告のプレミアムクリシュン・カンナーと面会した際にカンナーは氏に私と他の被告たちと面会してくれるように随分と頼んだ。同氏がもしカンナーの言う通りにしてくれていたならバナーラシーラールは気力を保ち続け動揺することはなかったであろう。その夜、一人の警部補がまずバナーラシーラールに会った。次に私の就寝後警部補は彼を外へ連れだした。朝5時頃バナーラシーラールの独房から何も物音がしないので彼に声をかけてみた。すると模範囚で看守の代わりに見張りに立っていた男からバナーラシーラールが吐いてしまったことを知らされた。彼については友人たち誰もがあの男には裏切られるぞと言っていたのだが私自身には全く納得できなかった。彼をよく知っている人たちは誰もが危険が迫ればあの男は動揺せずにはいられないだろうと話していた。そのため誰もが彼を秘密の相談事には参加させないようにしていた。今やことは済んでしまっていたのだ。

数日後私は県の警察本部長でもある県長官と会った。絞首刑になるぞ、命が惜しければ白状しろと宣った。私は一言も答えなかった。その後で秘密警察の警部と会った。警部とは随分話し合った。幾つもの書類を示された。警察の調べがどこまで進んでいるのかがおぼろげに判った。警察の目をくرامそうと考え幾つかの作り話をしたが、警察はすでに信頼すべき情報筋をおさえていたのだから作り話に乗ってくるはずもなかった。警察は最後に私がベンガルとの関係話しボルシェヴィキとの関係についてなにか吐くならば罪を軽減してやり判決後間もなく獄から出してイギリスに送り御上から15000ルピーの褒賞金をもらえるようにしてやるとの意向も告げた。私は心の中で大いに笑いながら聞いていた。最後にはある日秘密警察の警部が再度私に面会にやってきた。私は監房の外へ出ることを拒否した。警部は監房の中に入り随分と話をしたがとうとう諦めて帰って行った。

事実認定が行われた。警察は得られる限りの証人を集めて確認を行った。運命のなすところアイヌツディーン氏が担当判事に任命された。同氏は可能な限り警察の味方をした。事実

認定に際しては被告に対し普通の裁判官なら与えるはずの便宜すら与えなかった。見せかけだけは書面上の問題はないようにした。言葉遣いは甚だ丁寧であった。どの被告に対してもとても優しく接し優しい言葉遣いをしていた。被告たちは自分たちに同情してくれているものだと思っていた。表面には見えない深い傷を負わせていることにだれも気付いていなかった。これほど狡猾な官僚は他にはいないだろう。同氏が担当していた間どの被告にも不満な思いはさせなかった。たとえ何か問題が生じた場合でも誰も不快な思いをしないように処理しようと努めるのであった。しばしば公開裁判の席で被告人に赦しを乞うことすら躊躇しないほどであった。しかし、書類上の手続きは常に被告人に不利になるように巧みに処理されていたのだ。裁判が治安裁判所の法廷に移され令状に記された論拠が示されて始めて被告人たちはどれほど深手を負わされていたかに気付いたのであった。

裁判所の審判にかかる前にバンワリーラールがラーエバレーリーで逮捕された。私はそのことを知ったのでパンディット・ハルカランナート弁護士に他のことはさておきすぐさまラーエバレーリーに直行しバンワリーラールに面会してくれるように依頼したのだが、パンディットは私の意見に一顧だにしないかった。私はもともとバンワリーラールを疑っていた。というのは、彼の生活態度が感心しないものだったからだ。他のメンバーと暮らしていた頃は自分は県の組織の統轄をしている幹部なのだ。おれの命令に従うようにしろ、おれの使用した食器はお前が洗うようにしろ、などと話していたからだ。贅沢好きでもありいつも手鏡と櫛、石けんを携えていた。私は彼に不安を感じていたのだが、わが党の主要メンバーである幹部の信用が篤い人物になっていた。幹部は数百ルピーを与えて彼の支援をしてきていた。だからわれわれも最後まで彼に月々の支援を続けていた。私は随分と努力してみたが全くの失敗に終わった。そして心配していた通りのことが生じたわけだ。金目当ての男は重荷に耐えられず警察に吐いてしまったわけだ。彼は逮捕前に一部のメンバーが彼の所持していた武器を手渡すように要求したにもかかわらず引き渡しはしなかった。県幹部の大きな顔をしていたわけだ。逮捕されたとたんにもその大きな面は泥にまみれてしまった。バンワリーラールが自供したために検察側はしっかり優位に立った。もしも彼の自白がなかったならば検察側の立場は甚だ弱いものだった。全員が各地から集められラクノウの県刑務所に移された。しばらくは別々に留置されたのだが、裁判が始まる前に一ヶ所に集められた。

裁判には金が必要であった。被告たちが持っているはずがない。金を集めることがどれほど困難なことであったか。どのようにして過ごしていたことか。被告たちの大半の家族は弁護人さえ立てられなかった。たとえ家族があったとしても妻子を養い所帯を守らなくてはならない。あるいは、長期に亘って訴訟を続けることが出来ようか。もしもしっかりした弁護側が4人もいれば検察側の4分の3は負けになるものだ。裁判はラクノウというなよなよした都市で行われたのだ。傍聴にやってくる市民すらいない。せめても裁判の進行のこと法廷で行われていることの一切を報道するまともな新聞記者がいたならばと思う。インディアン・デイリーテレグラフ紙は情けをかけてくれた。たとえすぐれた記者が来たとしても、また裁判の進行状況を正確に報道したとしても警察が裁判長と結託して記者をその場から引きずり出したのだ。一般民衆からの同情は全く寄せられなかった。警察・検察の思いのままに進められたのだ。その有様を見て裁判長は勇気百倍となった。裁判長は思いのままに振る舞った。被告たちは悲鳴を上げたが全く聞き入れてもらえなかった。そればかりかダーモーダルスワループ・セート氏に警察は刑務所の中で惨たらしい扱いをした。100ポンドあった体重が66ポンドになってしまい幾

度となく死に瀕した。絶えず失神するような有様でおよそ 10ヶ月間食事をとることが出来ずほんの少量の牛乳が胃に流し込まれるとその苦しみ様子を誰も側では正視出来ないような猛烈な苦しみを受けるのであった。3人の医師から成る医療委員会が設けられたが委員会が理解できないとなるとセート氏は何の病気にも罹っていないということになった。

被告たち全員が一緒に過ごすようになるとこれまでになかった大きな変化が生じた。私はそれを見てただただ驚くばかりであった。一番驚いたことは誰も彼もが大きな顔をする事だった。長幼の序や上下の区別がすっかりなくなったのだ。年長者や先輩が軽んじられるようになった。規律というものがすっかりなくなった。しばしば逆に言い返されるようになり実につまらないことを巡って意見の対立が生じた。このような意見の対立がついには憎しみにまでなってしまう。喧嘩も起こる。ともかく人が集まればごたごたが起るものだ。この連中は人間の姿はしていたが主導権争いのため徒党を組むようになり刑務所の外では先輩の命令を至上のものとしていたのにその先輩を軽蔑するようになったのだ。この種の言い争いはしばしば恐ろしい形を取るようになる。出身地にかかわる事柄になってしまったのだ。ベンガル出身者と連合州出身者との間で互いの活動が非難されるようになったのである。ベンガル人が革命運動で他州の人たちより大きな活動をしたのは確かではあるのだがベンガル人が一人でも働くようになるとそのオフィスや職場は短時間のうちにベンガル人ばかりになるというのが実際である。ベンガル人が居住している都市で彼らの居住区^{*2}は別個のものである。言葉が違う。飲食するものが違う。正にそうしたことを刑務所の中で私は体験した。

献身的な活動の鏡と私が仰ぎ見ていた人たちの中にもベンガル人最良があるのを私は見た。革命組織のメンバーの中にさえ郷土最良が入り込んでいるのだとは塙の外では夢にも考えたことがなかった。革命組織にとってはインド全体を独立させるための努力をしているのだから特定の州や地域とは関係が全くないものだとは私はずっと理解してきていた。しかしながら、私はどのベンガル人の頭の中にも詩聖ラビンドラナート・タゴールの「わが愛しの黄金のベンガル」の精神が横溢しそれが日常の行動に明らかになるのを自分の目でしっかりと見て確認した。どうしても獄中以外ではそのような経験は全くすることが出来なかった。

私はどれほどの危難に際しても溜息を吐いたことはなかったし愛しい弟の死に際しても涙を流したことがなかったが、この革命組織の一部の人たちは私がその言葉を至上の命令と奉じた人々でありまた厳しい視線を向けられれば耐え難い思いをし厳しい言葉を投げかけられれば胸が突き刺され涙が激流となってほとばしり出るような存在の方々であった。私のこのような有様を見て私の性格を知っていた二、三の友人は甚だ驚くのであった。このように書き記すことに胸の打ち震える思いがするのであるが、そのような人たちはベンガル人のこの上ない過ちや強情さや怯懦を見逃すほどにまでベンガル人と非ベンガル人を差別する意識にあまりにも満ち満ちていたものだ。その人たちの振る舞いを見て他の人たちはますます意を強くして絶えず策略がめぐらされるようになった。互いに策略をめぐらすようになった。ベンガル人が何をなそうとも我慢されるようになった。この一連の出来事に私の胸は粉々に打ち砕かれ悶々とするばかりとなった。

一度は当局と手を打とうかとも考えた。弁護士は秘密警察の警部に相談を始めたことがあったが、そうすることで革命組織の信義が失われてしまうのではないかと考え取りやめた。青年たちは長期の刑罰が下ることだろうから断食闘争^{*3}をして当局に対する刑務所での待遇改善の要求だけでも達成しようと考えた。連合州の刑務所で一般服役者と同じ食事をして生きて出

獄することは並大抵なことではない。これまで政治犯として処罰されこの州で服役した先輩たちのうち6、7人がこの州における劣悪な処遇のために獄死してしまっているのだ。

そのような考えのもとカーコリー事件のほとんど全ての未決囚が断食闘争を開始した。翌日、全員が別々に隔離された。一部の人は郡の刑務所に移され一部の人は中央刑務所に送致された。断食を始めて15日経つと当局にも少しばかり変化が生じた。一方では当局はかなりの打撃を受けつつあった。裁判所や裁判所職員が仕事をしなくても給料を支払わなくてはならなかった。当局は何とかして断食を中断させたかった。刑務所側は一日の食費を8アンナとしたのだが、私は妥協を拒みようやくのことで10アンナにまで引き上げさせた。その断食闘争で私は15日間水だけで過ごした。16日目に鼻から牛乳を注ぎ込まれた。ローシャン氏も同じことをして私に協力してくれた。氏は半月間変わらず体を動かし沐浴などの日常を過ごしておられた。10日間は見知らぬ人が私の顔を見ても私が断食をしているとは想像も出来ないほどだった。

交渉に当たった秘密警察の幹部と被告側の代表幹部との会談はしばしば人目のないところで行われた。なんと交渉終了後も我ら被告側の代表が当局と会合を続けていたのだ。私はそのことをあまり気に付けていなかったのだが時たま断片的に耳に入ることによって断食交渉以外にも何かの話し合いが行われていることが判明した。当局から大いに睨まれていたので私も一度秘密警察の警部に会って話をしたいと願い出たのだが会わせてはもらえなかった。結果的には当局は私の完全な仇敵となった。皆が私の行動そのものに文句をつけるようになった。

秘密警察のお偉方と話をした我らが代表幹部には少し希望の光が射し込んで来たのだ。刑務所から娑婆へ出る意気込みはなくなってしまったのだ。刑務所から外へ出ようとする努力に見られた気力はすっかり張りを失ってしまった。青年たちの私に対する敬愛の念を無くそうとして様々なことが言われるようになった。最高幹部が自ら一部のメンバーに向かって私が幾らかの党費を使い込んだのだと告げた。私は一銭一厘についての記録までも残していた。このような話を耳にした時に執行委員会のメンバーにその記録を示すことを希望しそのような中傷をする人物を処罰するようにと提案した。そうするとベンガル人たちにはそれに応じる気力はなかった。何と私の品行に難癖がつけられたのだった。

私が抗弁を終えた日に検事は立ち上がって私の抗弁を数百人の弁護士がした以上にすぐれたものであったと称えた。私は手を合わせて感謝の意を述べた。それまで私は裁判所で法廷に出たことはなく検事と弁護士の問答を聞いて自分も勇気を奮い起こしたようなことであった。その後まず最初にわれわれの代表幹部に検事が尋問を始め厳しい対応を見せた。わが代表はさんざん有様だった。というのは、代表は証拠不十分で釈放されるかせいぜい5年から10年ほどの刑に処されるとの期待を抱いていたからである。とうとうじっとしていられなくなった。秘密警察の幹部を呼んで拘留所の中で二人きりで一時間半話し合った。青年たちはこのことを知ると皆が一緒にやってきた。何故今になって秘密警察の幹部と話し合いが行われているのかと尋ねた。私が問うと判決後に刑務所での処遇はどういうことになるのかについて相談が行われているのだと言う。私は納得が行かなかった。2、3日後、代表幹部が一人座って何やら書き物をしていた。書き上げると書類をポケットに入れ食事に立った。「一体どうなっているのだ」という魂の呼びかけに私はポケットからその書類を取り出して読んだ。それを読んで受けた悲しみと驚きはたとえようがなかった。秘密警察を介して当局にお詫びの嘆願書が送られようとしているのであった。今後は如何なる暴力的な運動や活動に参加しないという誓約がなされていたのだ。私は幹部たちにその経緯を話しわれわれはこのことについて一切の相談に与ること

が出来ないほどの能なしなのかとわけを問いただした。すると、これは個人的な問題だとの返事であった。私は、これは決して個人的な事柄ではあり得ないのだと激しく反対し厳しい非難の言葉を浴びせた。私の言葉を聞いてその場は騒然となった。何と狡猾な方法を採用したことかと私は激しい憤りを感じた。私に対しあちこちから攻撃がなされた。はかりごとがなされ不当な非難が浴びせられた。青年たちの将来を楯にして指導者面をしたかと思えば少し自分に不都合が生じると二十歳そこそこの青年たちに重い刑を受けさせ牢獄に突っ込んでおいて自らはその縛りから逃げ出そうと努めたのだ。このような人生には呪いあれだ。私は思いとどまって無言を貫いた。

(註)

*1 刑務所 これは刑務所を兼ねた拘置所。

*2 大都市などへ流入する人々は移住に際しても定住化に際しても同じ出身地からの人的繋がりを利用するために移住後にも近隣関係を築くことが多く特定の地域の出身者が集中する居住区が形勢されることが多い。ヒンドゥー教の聖地であるバナーラスには古くからベンガル人の巡礼者が定住化したこともありベンガル人居住区とも言うべきベンガル人が集中して居住する区域が出来上がっていた。ラシュビハリ・ボースが長期に亘り同地に潜伏することが可能になったのもそのためと思われる。特にベンガル出身やベンガルとの関係の深い参加者の多かったこの事件に関しては巻末のグプタ (Manmathnath Gupta) の文章を参照されたい。

*3 断食闘争 カーコーリー事件の被告たちは獄中で一般受刑者たちと違う政治犯に対する別個の待遇を当局に対して要求しハンガー・ストライキを行った。16 日間に及ぶ断食の後、当局は白人の受刑者と同程度の 1 日あたり 10 アンナ (0.625 ルピー) の食費とする妥協案を出したので被告たちは応じたが結局それは刑務所長の認定による医療的な措置であつてもし認定がなければ実際的にはなにも得るものがなく騙されたも同然であつた。そのため後に 1929 年 7 月バガット・シンやボトゥケツショナル・ドットらのヒンドゥスターン共和国軍 (Hindustan Republican Army) によるラーホール陰謀事件の被告たちがやはり待遇改善の断食闘争を開始した際に M. グプタなどのカーコーリー事件の受刑者たちもそれに呼応して参加した。その過程でジョティン・ダーシュのような犠牲者が出るなどしたが 1930 年 2 月 9 日に受刑者の A.B.C. のランク付けという形で成果を得た。断食闘争は単に革命運動家たちの待遇改善運動ではなく命がけのイギリス当局との対決という側面を持っていた。断食闘争が社会に報道されることにより広範な民衆へ独立運動をアピールする力が生じた。ただ、R.C.Majumdar は M.K.Gandhi がこの断食闘争の過程で、1929 年 9 月 13 日に Jatin Das が殉難したにも拘わらず言及しなかったことについて次のように記している。“It is somewhat remarkable that Gandhi did not approve of the hunger-strike. He studiously omitted any reference to the martyrdom of Jatin Das in his speeches and writings and no mention of it was made in his Young India.” (R.C.Majumdar, op.cit. III. P.320)

訴追

カーコーリー列車強盗事件後、事件調査のため警察の特別調査チームが編成された。ホートンという人物がこの特別調査チームの責任者になった。事件現場及び鉄道警察の報告書を見て

これは革命運動家たちが起こした可能性があるかと推察した。州内の運動家たちについての調査が開始された。時を同じくしてシャーージャハーンブル市で事件で奪われた3枚の紙幣が見つかった。奪われた札は百枚以上ありおよそ1千ルピーの額に達した。そのうちおよそ700～800ルピー分の紙幣が真っ直ぐ国庫に届いていた。そこで当局は紙幣^{*1}のことについては沈黙を守った。それらの紙幣はリストが公表される以前に国庫に届いていたのである。警察がリストを公表する意味がなくなった。国庫の中から数枚の紙幣がリストが公表される前に人々のもとに届いたのだった。そのため紙幣は人々の手元に現れたのだった。

その頃県の秘密警察は私が1925年の8月の8日から10日までの間シャーージャハーンブルにいなかったことを知るに至った。詳しい調査が始まった。その調査の過程で警察は市の公立学校のインドゥブーシャン・ミトラという学生のもとへ私宛の革命組織関係の手紙が届けられることになっているのを知るに至った。その学校の校長を介してインドゥブーシャンのもとへ送られてきた手紙の写しが作製されてホートンのもとへ送り続けられていた。その手紙によりメーラトにおいて県レベルの革命委員会の会合が予定されているのが判明した。ホートンは警部補を一人会合の予定の判明したメーラト孤児院に派遣した。時を同じくしてホートンはある特別の筋から間もなくカンカル^{*2}での強奪準備を革命委員会のメンバーが行っており、また大都会の郵便局の公金強奪の可能性のあることも判明した。ホートンはある筋から私の手書きの手紙を入手した。それには9月の13日に決められていた祖父の法要のことが記されていた。その手紙には祖父の法要が9月13日にNo.1で予定されているので是非出席してくれ孤児院で待つとあり、ルドラという署名があった。

予定された強奪を防ぐためにホートンは州全域で1925年9月26日に約30名を逮捕した。ちょうどその頃インドゥブーシャンのもとへ届いた手紙で若干の物品がバナーラスのある学生の部屋に隠されているのが判明した。隠されているものは武器であろうと推察された。調べてみたところバナーラス・ヒンドゥー大学のある学生の部屋から2挺のライフル銃が出てきた。その学生はカーンプルで逮捕された。インドゥブーシャンは私が逮捕されたとの知らせを手紙でバナーラスへ送った。その手紙の受取人を警察はすでに逮捕していた。というのはそのラームナート・パンデーヤ宛の手紙は私の逮捕時に私の家から発見されていた。ラームナート・パンデーヤの手紙はすでに警察の手に渡っていたのだ。そこでインドゥブーシャンの手紙を見てインドゥブーシャンが逮捕されたのだった。彼は翌日自供した。すでに逮捕されていた人たちの一部と結んでシャーージャハーンブルにいたバナーラシーラールも自供をし共犯証人、すなわち、検察側証人に仕立て上げられていた。バナーラシーラールは少し多くのことを知っていた。彼の供述に基づき革命組織機関紙の小包の所在が判明した。バナーラス郵便局から発送された小包の受取人たちを警察は逮捕した。カーンプルで小包受取人のゴーピーナートは逮捕されるとすぐに自供し検察側証人に仕立てられた。全く同じようにラーエバレーリーで小包の送られた学生のクンワル・バハードゥルも逮捕されると同時に自供し検察側証人に仕立てられた。彼はバンワーリーラールの郵便受取人になっていたので現金書留もいつも彼のところへ送られてきていた。彼はバンワーリーラールの一人の親類の住所を告げたのでそこも取り調べが行われてバンワーリーラールのトランクが一個見つかった。このトランクに実包入りの軍用リボルバー1挺、それに数発の実弾が警察の発見するところとなった。バンワーリーラールは追跡を受け逮捕された。逮捕の数日後に警察の人間が会って色々となだめたりすかししたりしたので彼も自供し自白被告にされた。バンワーリーラールはカーコーリー強奪事件に参加したこと

を自供した。一方、カルカッタのダクシネーシュワルのある民家で爆弾製造器具、完成した爆弾 1 個、リボルバー 7 挺、ピストル及び叛乱呼びかけの叛逆扇動の印刷物が発見された。この家で裁判から逃亡中であったラージェンドラナート・ラーヒリー *³ 文学士が逮捕された。

インドゥプーシャンが逮捕された後、校長は中央州当局から 1 通の手紙を受け取った。校長はそれをそのままホートンに転送した。この手紙によりモーハンラール・カトリーなる人物のマディヤ・プラデーシュ州のチャーンダー *⁴ での所在が判明した。同地からの探索で警察はプナー市のラームクリシュン・カットリーを逮捕しラクノウに移送した。バナーラスに送られた小包に関連してジャバルプル市でプラナヴェシュクマール・チャタルジーが逮捕され移送された。バナーラス陰謀事件で終身刑（アンダマン島流刑）になりバーンクラで *⁵ で 'Revolutionary' というパンフレット頒布の嫌で懲役 2 年の刑を受けていたシャチンドラナート・サーンヤル氏 *⁶ がこの裁判に関連してカルカッタからラクノウへ移送された。ヨーゲシュチャンドラ・チャタルジー氏 *⁷ はベンガル条令で逮捕されていたのが服役中のハザーリーバーク刑務所 *⁸ から移送された。チャタルジー氏は 1924 年の 10 月にカルカッタで逮捕されていた。同氏の手元には連合州の各県名が記されておりそのうち 22 県において秘密組織の活動が展開されているとの記述がある 2 通の書類が発見された。この書類は今度の事件に関連があるものと判断された。ラージェンドラナート・ラーヒリー氏はダクシネシュワル爆弾事件で 10 年間の流刑になった後、今度のこの裁判に関連してラクノウへ移送された。合計およそ 36 名の人が逮捕された。28 人に対して治安判事の指揮する審理が始まった。3 人、すなわち、シャチンドラナート・バクシー氏、チャンドラシェーカル・アーザード氏 *⁹、アシュファークウッラー・ハーン氏 *¹⁰ は逮捕を免れ逃亡を続けた。その他の全員は起訴されずに釈放された。28 人のうち 2 名は法廷で起訴猶予になった。2 名は検察側証人（共犯証人）になり赦免された。最終的に治安判事は 21 名を治安判事裁判所の審判に委ねた。治安判事裁判所に移されてからダーモードルスワループ・セート氏の病状が悪化した。出廷が不可能になったので最終的には 20 名の被告ということになった。20 名のうちシャチンドラナート・ヴィシュヴァース氏とハルゴーヴィンド氏の 2 人は治安判事法廷で釈放になり残りの 18 名に刑が下された。

バンワーリラール氏は司法取引により自白被告 *¹¹ になった。この人はラーエバレーリー県コングレス（国民会議派）委員会の委員長にもなったことのある人物だった。同氏は非協力運動の際、6ヶ月間の投獄を受けたこともあった。その上今度は警察の脅しにより命が危うくなったという次第だった。同氏はわれわれの組織が最も多くの費用を費やしたメンバーであり毎月同氏には相当な送金がなされていた。体面を保つためにわれわれは可能な限り月々の送金をしていた。自分たちの食べるものを減らしても毎月送金していたのだ。それにもかかわらず仲間の首にナイフで切りつけたのだった。同氏はせいぜい 10 年ほどの刑にしかならなかったはずだ。同氏に対する証拠と同じ証拠を示された他の被告たちは 10 年の刑を受けた。そればかりでなく警察の指示により法廷で証言した際に自分の口から新しいことまで付け加えたのだ。その中で私が活動資金を流用して家族まで扶養していると述べたのだ。これを聞いておかしきもあったが、命がけで生活を支えてやりその人のため夜も昼もなくさんざんな苦勞をし自分の親の世話すら何一つすることのなかった者にこのような非難の言葉を浴びせるものかと胸に大きな衝撃を受けたのであった。

同じグループに属していた仲間がこのような振る舞いをしたのだ。グループとは別に普通の暮らしをしながら後援してくれていたシンパの人たちも奇妙な様子を見せるようになった。あ

る地主の手元にカーコピー強奪事件で奪われた紙幣が見つかった。街で手に入ったものだった。逮捕されて判事に保釈を願いだした。判事は 4000 ルピーの保釈金を求めた。誰も身元引受人になろうとしなかった。地主の老いた兄が私のところへ来て私の足元にすがりついて文字どおり泣きついた。私は保釈の手配に努めた。私の両親は警察に刃向かうことになり警察に通報されることになるから裁判所に出向いて申し開きをしないようにと最後まで言っていたのだが私はそれに耳を傾けなかった。裁判所に出向き努力した結果、保釈が認められた。私自身が拘留所に出向いて貰い下げてきたのだ。ところがなんとその人物が私が件の事件の証人として申請したのに対し警察の脅しが入ると 3 度に亘りラームプラサードなる人物を全く知らない警察に書き送ったのだ。ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が対立し騒擾が起こっていた頃、その家屋敷を守ってやりその家族は私を頼りに安心して暮らしていたその人がなんと私に対して偽の証言をこしらえて寄越したのだ。たとえ世の中がひっくり返ろうとも足元のぐらつくようなことはない人だからという数人の友人の言を頼りにその人を証人として申請したのであった。約束したにもかかわらず警察の圧力が加わるとその人までが証言を拒否したのであった。自分の命より大切な人、自分の兄弟とも思っただけで世話をしてきた人、どのようなものであれ必要とあれば力の限りそれを叶えてやるために力の限り努力して来た相手の人が刑務所にやってきて顔を見せることもなければ死刑囚の独房を訪ねて慰めの一言をかけてくれることもなかった。裁判所に来て十分ほどの間離れて立ち姿を見せ情けと勇気を示してみせた御仁は一人二人いることはいた。こうしたことは全て警察が与える畏怖感のため捕まりはしないかという気持ちから生じることであった。それでもそれなりのことをしてくれた人に対してはわが身の幸せを思うし厚く感謝する次第である。

墓石も揺らすは君の供えし花なるぞ
情けの花のひとつは 山のごとくに重かりき

だれもが機嫌よく幸せに過ごせるようにしていただきたいというのが私の神様へのお願いだ。何もかも覚悟の上でこの道へ踏み出したのだった。裁判を受けるまでは世間のことは全く知らなかったのだ。刑務所の中を見たこともなければ法廷に出たこともなかった。入獄してみ始めて別世界にやってきたのに気付かされた。裁判を受けるまでは筆跡鑑定というものがあり筆跡を見て誰が書いた字かを鑑定することが出来る専門家がいることすら知らなかったのだ。筆跡がどのように比較されるのか、一人の人の筆跡にどのような違いがあるのか、どうして違いがあるのか、筆跡鑑定により署名を鑑定出来るということすら知らなかったのだ。このようなことの経験も知識さえ持たずに一つの州の革命集団の全責任を負いその運営をしていたのだ。革命運動の教育を施すような学校というものはないものだ。先輩の活動家や経験を積んだ活動家からいささかなりとも学び取ることが出来たはずだ。どれほどの人がベンガルやパンジャーブの陰謀事件で逮捕されたことか。だがだれ一人後輩のためにいささかなりともその体験を知ることの出来るようなものを書き記そうとはしてこなかった。

世間の人はこの事件がいとも簡単に警察の知るところとなったのは警察が運に恵まれたのか、警察は千里眼なのか、どのようにして秘密が調べあげられるのかと強く知りたと思うであろう。このような状況は我が国にとっては不運であり政府にとっては幸運と言わねばなるまい。ベンガル州の警察については私はあまり発言する資格がない。自分には特別の体験がないのだから

ら。連合州の秘密警察は常識的なことすら弁えていない間抜けだ。連中は一般の警察から配属されてくる。のほほんと巨額の賄賂を懐に収め太鼓腹になっている。苦勞のあろうはずがない。仮に気の利いたのが一人二人いても短い間だけ大きな出世を願って活躍振りを見せかけるため忙しかけず回るのが少し出世したら何もかもおしまいなのだ。連合州には正規に教育を施す本格的な警察の情報組織は存在していない。それに仕事をしているうちに経験が積み重なって行くものなのだ。マインプリー事件や今度の事件でわれわれがほんの少し巧妙に活動していれば警察が事件を暴くことは甚だ困難だったということが確認された。実際、警察は少し運がよかったのだ。この事件の調査が開始されてから警察は連合州の疑わしい革命運動家に注目し接触し話をするようになったのだ。一人二人の人を脅迫させた。「泥棒のあごひげには薫すぼがついている」（心の鬼が身を責める）という諺通り警察は一人の人物から秘密の一切を探り出したのだ。われわれはだれしも警察がこれほど素早く秘密を知ったのはどうしたわけかと茫然としたものだった。われわれは件の人物のことは全く考えてもみなかった。私が逮捕された時に警察幹部が私との会話の中で私と件の人物以外にはだれも知ることが出来ないことを全て語ったのだ。その人物が知り得たことを警察が知り得たということのさらにもっと確実な分かりやすい証拠が見つかった。その人物が知らなかったことは警察にもどうしても判らなかったのだ。こうしたことからこれはその人物の仕業であると決定付けられたのだ。もしもその人物が警察に捕らえられて秘密を暴露しなかったならば警察は地団駄を踏むばかりで何一つ判明しなかったであろう。確証がなければどれほど危険な人物に対しても手出しをする勇氣は生じないものだ。なぜなら民衆の間に運動が広まり自分たちの不名誉となるからである。政府の責任問題となる。せいぜい2、3人が逮捕され最後にはその人たちも釈放しなければならなくなる。だが、警察には正真正銘の糸口が見つかったのだ。それを証明する書き物の証拠が警察の手に入ったのだ。それでも警察がなにもしないとすれば一体いつ逮捕するだろうか。ともかく起こってしまったことは神の欲するところである。私はこれまで次の信条を貫いて生きてきた。

裏切り者に苦しもうとも
何も語らず嘆きの声を聞かせるな
忠に従う俺たちの信義の道は他の道
首斬り人の足元に跪拝するのが俺たちの
いつも変わらぬ作法なり

この裁判で私が果たした役割、あるいは、私がその命を預かっていたことの大部分はアシュファーク・ウッラー・ハーン・ワールシー君にかかわるものである。自分の最期に当たりこの筆で同君について一言述べるのが自分の責務であろうと思う。

(註)

*1 紙幣 英領インド時痔には商取引の際使用された100ルピー以上の紙幣の番号を帳簿に記録することになっていた。それらの紙幣をナンバリーノート（番号紙幣）と呼んだ。

*2 カンカル 原文では कंकल とあるが不詳。

*3 チャーндアー चिंता ナーグプル市から約130km南方に位置。当時はマディヤ・プラデーシュ州に属していたが、現在はマハーラーシュトラ州内。

*4 ラーजेन्द्रドラナート・ラーヒリー राजेन्द्रनाथ लाहिड़ी バナールス在住のベンガル人であったが、シャチンドラナート・サーンヤール、ヨーゲーシュチャンドラ・チャタルジーなどと連合州における革命運動に参加した一人。ラームプラサードらと共にこの事件で処刑された4人の中の一人。

*5 バーンクラバँकुड़ा カルカッタの北西約150kmに位置する西ベンガル州の都市。同名の県庁所在地。

*6 シャチンドラナート・サーンヤール (ショチンドロナト・シャンナル शचीन्द्रनाथ सान्याल 1893/1895 - 1942/1945 ?) インドの革命運動家。いわば急進的な革命運動の先進地ベンガルと連合州、デリー、パンジャブ、ラージャスターンなどを結ぶ革命運動の組織化に重要な役割を果たしたとされる。バナールスで理学部の学生であった頃から革命運動に身を投じた。ダッカにあったアヌシーラン・サミティ (オヌシロン・ショミティ) の名にちなんで表向き肉体の鍛錬や道徳的・知的向上を目的とするクラブを開設。後に Young Men's Association と改称。1914年にラシュビハリ・ボースが主な活動の場をバナールスに移してからはその右腕的存在となる。ラスビハリー・ボース, Pingley, Kartar Singh らの企図したパンジャブ、連合州など北インド各地の連隊のインド兵の反乱による革命運動は未遂に終わった。その失敗したラーホール陰謀事件により革命運動家たちには多数の犠牲者が出た。ボースは日本へ亡命した。シャンナルはそれに連動していたバナールス陰謀事件の中心人物として1915年6月26日に逮捕され1916年2月14日に終身刑及び全財産没収の判決を受けた。アンダマン島への終身流刑に処せられたが、大戦後の大赦 (1919年12月23日布告) により1920年2月に釈放された。ガンディーのサティヤグラハ運動には参加せず政治犯の救援や労働組合での活動などをしていたがその後再び北インドでの武力革命運動の再興を志し1924年6月に地下潜行、カルカッタにおいて Hindustan Republic Party を Pratulchandra Ganguli や Trailokyanath Chakrabarti らと結成した。(रतन लाल बंसल, कुछ पूरक तथ्य, बन्दी जीवन, दिल्ली, पृ० 437)。1925年には Hindustan Republican Association を結成した。その際に執筆した冊子 'Revolutionary' を配布したことで反乱扇動文書の頒布の嫌で1925年に逮捕され服役中であったが、カーコーリー事件の首謀者の一人とされ再び終身刑を受けた。1937-38年の会議派州政権の下で釈放された。第二次大戦中は自宅に軟禁されたが肺結核のため1942年に病状が重く釈放されたが病没。(ラテンラール・バンサル) の記述による) 1922年及び1938年にいずれも獄外にいた時期に自らの関わった事件の回想及びインドの武力革命運動についての考察を「幽囚記」(三部作) बन्दी जीवन, दिल्ली, 1963 として遺している。第一部は1922年に発表された。第二部は1925年にベンガル語雑誌に掲載された。第三部は一部分を除き没後に刊行された。

*7 ヨーゲーシュ・チャンドラ・チャタルジー (ジョゲシュ・チョンドロ・チャタジー योगेशचंद्र चटर्जी, 1895 - 1965) 民族運動家。ベンガル (ダッカ) のアヌシーラン党 (アヌシーラン・サミティ/オヌシロン・ショミティ) により連合州での革命運動の組織活動に派遣されていたが、後にその組織をサーンヤールの組織と合同させこれが Hindustan Republican Association となった。ビスミルが言及しているサーンヤールと並ぶカーコーリー事件の幹部級の人物の一人。この事件で終身流刑 (実際は、12年の禁固刑) に服した後、釈放されたが第二次大戦中に再度拘禁され46年まで獄中にあった。本書が刊行された1958年当時は国会議員。

*8 ハザーリーバグ हज़ारीबाग 当時はビハール州内、現在はジャールカンド州内。

*9 チャンドラシェーカル・アーザード चंद्रशेखर आज़ाद バローダーの東方、当時の Central

India Agency に位置した小侯国（アリーラージプル अलीराजपुर रियासत）のパラモンの家庭に生まれた。11,2 歳でサンスクリット語の勉強にバナーラスに出たが、非協力運動に参加し 15 歳ぐらいであった 1921 年鞭打ちの刑を受けたことで著名な人物となる。P.K. Chatterji や M. グプタらとの接触により武力革命運動に参加するようになったものと思われる。カーコーリー事件の実行犯ではただ一人逃亡を続けた。その間革命運動家の中では恐らく最も低い学歴の身ながらその愛国の情熱、勇気、親愛の情の溢れる行動と実際の判断力でカーコーリー事件以後の革命運動で重要な活動を行った。カーコーリー事件以後、Hindustan Socialist Republican Association (Army) の結成に携わるなどパンジャブ、デリー、連合州などの広い地域を活動の場とした。バガット・シンらと共にデリーやパンジャブなどで諸々の事件に参加し第二のラーホール陰謀事件でも重要な役割を果たした。その際も逮捕されなかったが、1931 年 2 月 27 日アラーハーバードで警察と交戦の末射殺された（グプタによると重傷を負い自害）。彼は死を迎える 2,3 週間前に J. ネルーに直接会って「ガンディー・アーヴィン会談の結果として見込まれる仲間の身の安全について」話し合っているが、ネルーの言によると、その際自分も含め大多数の仲間も「純粋なテロリスト的方法は無益で、無力であると確信している」とも述べている。ネルーはアーザードの「今自分はどうすべきか」との問いについては何ら解決策を持っていなかった、と述べている。この際であろうか M. グプタによればネルーはアーザードたちに 5000 ルピーの寄付を約束したという。（M.Gupta, op.cit. p.305）ガンディー・アーヴィン協定（1931 年 3 月 5 日）では非暴力運動の政治囚の釈放、政治犯の没収財産の返還、製塩の無税などが認められた。M. グプタは彼が革命運動家として越えなければならなかった障碍について、カースト観、不可触制、女性観、肉食などを列挙してそれらを乗り越えて行ったことを記しているが、それらはまた彼のみが戦わなければならない問題ではなかった。

^{*10} アシュファーク・ウッラー・ハーン (Ashfaq Ullah Khan) アシュファークの出自は家格の高いパターンで何不自由ない家庭に育ったとされる。（*इन्द्रविद्या वाचस्पति, भारतीय स्वाधीनता-संग्राम का इतिहास*, नई दिल्ली, 1960, पृ. 255）ビスミルとの関係については本文に詳しいが、カーコーリー事件では直接参加した 10 人の中の 1 人で、この事件で死刑に処せられた 4 人の中の 1 人である。彼とシャチンドラナート・バクシーとは 1 年後に逮捕された。彼はビスミルと並びウルドゥー文学史の中では愛国詩人 (Patriot-poet) として愛国詩 (Patriotic poems) を詠んだとされている。（Ali Jawad Zaidi, *A History of Urdu Literature*, New Delhi, 1993）彼がどれほどの数の作品を遺しているのかは訳者には未だ確認出来ていない。

^{*11} 自白被告 इक़बाली मुल्जिम

アシュファーク

大赦令 ^{*1} の出た後、シャージャハンプルに戻った際に君と学校で出会ったことを記憶している。君は私にとっても会いたがっていた。そしてマインブリー事件について少し話をしたがった。私は学生であるイスラム教徒の青年がこの類の話をしたがるのは何故なのかと思い君の問いかけに対して気の乗らない返事をしたのであった。君はその時とても残念がっていた。強い気持ちで君の表情に現れていた。君は自分の意志をいい加減にせず固く守り続けた。出来る限り会合の席で話をし、親友を介して自分が見せかけの人間ではなく国家に奉仕する気持ちを持っていることを信じてもらえるように努力した。ついに君の勝利となった。君の努力により君が

私の胸の中に場所を占めたのだった。君の兄上は私のウルドゥー語ミドル課程での同級生であり友人であった。このことを知り私はどれほど嬉しく思ったことだろう。間もなく君は私の弟同然になったのだった。いや、それだけでは満足せず私と対等になりたがった。友人のうちに数えられることを望んだ。その通りになったのだ。真の友人となったのだった。周囲の人たちは、一方が頑なアーリヤ・サマージストなのに対して他方はイスラム教徒という組み合わせは一体何なのだと驚いた。私はイスラム教徒のシュッディ*²の活動に従事しアーリヤ・サマージの寺院に暮らしていたのに君はそんなことをいささかも気にしていなかった。私の友人の一部は君がイスラム教徒であるため嫌悪の眼差しを向けていたが君の志は微動だにせず絶えずアーリヤ・サマージ寺院の私のもとを訪れていた。ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の対立が生じた際には君の住居の境界の人たちはだれしもあからさまに君を罵っていた。邪教徒とまで呼ばれながらも君は決してその人たちに同調することはなかった。常に両教徒の団結を支持していた。君は真のイスラム教徒であり真の愛国者であった。君の信条はただ一つ、神がイスラム教徒に与えた分別があるとすれば、それはイスラム教徒はヒンドゥー教徒と協力してインドの安寧を図ることではしかなかった。私がヒンディー語で何か文章を書いたり書物を著したりするとイスラム教徒も読めるようにウルドゥー語でも書いてくれないかと言うのであった。君は愛国心をよく理解するためにヒンディー語をしっかりと学んだ。家の中で母上や兄弟と話す際には君の口からヒンディー語の言葉が出てきては皆を驚かせたものだった。

君のこのような行動を見て多くの人は君がひょっとしてイスラム教を捨ててヒンドゥー教徒に転じるのではないかと思った。だが君の心は不浄なものでは全くなかった。ならば君に浄めるべきものがあるのか。君のこのような歩みに私の心は完全に虜になった。イスラム教徒を信頼して裏切られることになりはしないかと仲間同士の間で話になることがあった。君は勝利したのだ。君と私は一心同体だった。たびたび同じ器で食事をしたものだった。ヒンドゥーとイスラム教徒は違うという意識は私の胸から消え去ってしまった。君は私に対して揺るぎない信頼を寄せ計り知れない深い愛情を抱いていた。そうだ君は私を名前で呼ぶことが出来ずいつもラームと読んでいた。一度君は心悸亢進の発作のため意識を失ったことがあったが、君の口からは幾度も「ラーム、ああラーム」という声が発せられていた。そばにいた親族たちは「ラームラーム」と唱えるのに驚き「アッラーアッラー」と唱えるように呼びかけるのであったが、「ラームラーム」が繰り返されるばかりであった。ちょうどその時「ラーム」という言葉の秘密を知っていた友人が訪ねてきた。直ちに私が呼ばれた。私が訪れると君は落ち着きを取り戻し皆は「ラーム」の言葉の秘密を理解したのであった。

この親愛の情、友情が如何なる結末をもたらしたのか。君も私の考えに染まってしまい堅固な革命家となった。それからあらゆる方法でイスラム教徒の青年たちにも革命精神を広げ、青年たちが革命運動に協力するようにと日夜努めることになった。君は全ての兄弟、友人たちに自分の理想を伝えようと努めた。私がどのようにして一人のイスラム教徒を革命組織の立派な一員に仕立て上げたのかと革命組織の仲間たちもしばしば驚いていたものだった。君の私に対する振る舞いは申し分のないものだった。ただの一度も私の命令を無視したことはなかった。いつも忠実な信徒のように待機してくれていた。君の心は広く君は高邁な精神の持ち主であった。

もしも私の心に安らぎがあるとすればそれは君がこの世で私の顔を照らしてくれたからだ。アシュファーク・ウッラーが革命運動に力を尽くしたということもインドの歴史に特筆されるべきことだ。君は兄弟や親類縁者の説得にもいささかも動じなかった。逮捕されてからもその

考えをいささかも変えなかった。君は頑健な肉体の持ち主であったが、同時に心の強者、高邁な精神の持ち主であることが証明された。そうしたことのために君は裁判で私の右腕と決めつけられ裁判長は判決文を書くに当たり君の首にジャイマール、すなわち、勝利の花輪（絞首刑の綱）を掛けたのだ。愛しい弟よ、君は両親の財産を国のために捧げ両親を物乞いにおとしめ、兄弟姉妹の将来までも国のために供え己の身も心も財も一切のものを母国のために捧げ最期の犠牲までも捧げた男が親しい友アシュファークまでも母国に捧げたと思い満足してくれるであろう。

恋の館に命保つは罪なるぞ

首を保ちて夢立ち入るな (アスガル)

(註)

*1 大赦令 政治犯に対する大赦令は 1919 年 12 月 23 日に発令された。ラームブラサードはこの間マインブリー事件で地下に潜行中であった。

*2 シュッディ (शुद्धि) 本来は浄めること、浄化の意。イスラム教やキリスト教に改宗したと考えられた元ヒンドゥー教徒を浄化して再びヒンドゥー教徒に再改宗させようとしてアーリヤ・サマージの一部が取り組んだ運動の一。19 世紀 90 年代から始まった。スワミー・シュラッダーナンドらが推進した。

処刑場

最期の時が近付いた。二つの絞首刑が頭の上に揺れている。娑婆にいた時にそして新聞や雑誌の中で警察を思う存分呪った。公開裁判の場では裁判長、秘密警察の幹部、判事、検察官それに政府を激しく非難した。私の言葉は今もその人たち全員の胸に突き刺さったままである。今や頼りになる友人も知己も支援者もない。ひたすら最高神を念じる。バガヴァッド・ギターを誦して心に安らぎを得る。

全て為したることは汝の為したること

余の為したることにはあらず

余の為したるところには汝あり

その果をブラフマンに委ねて執着心を去り行為を為す人は

罪惡によって汚されることはない

蓮の葉が水に汚されないように (バガヴァッド・ギター V. 10)

「結果を望まず行為をブラフマンに委ねて為す人は罪惡に汚されることがない。あたかも蓮は水中にあってもその葉は水の中にないのと同じである」

生涯に亘っての私の行為は全て母国のためを思って行ったものである。もしも体を養ったとすれば、頑健な肉体で母国への奉仕をしっかりと為し得ると考えたからに他ならない。ようやくのことでこの目出たい日が迎えられた。この卑小な身が連合州においては 1857 年のガダル（叛乱）以来、革命運動で母なる神、母なる国の神を祀る祭壇に捧げられるこの州の住民の中では最初の生け贄となる榮譽を受けるのだ。

政府は私を責め苛みたいのだ。だからこそこの暑熱の季節に控訴審の日程を3ヶ月半後に決めたのだ。3ヶ月半の間、絞首刑を待つ独房の中で私は暑熱に炙られるのだ。この独房は鳥かごよりもひどいものだ。ゴーラクル刑務所の死刑囚を収容する独房は平地に建っている。近くに日陰を作るものは何もない。朝の8時から夕方8時までお日様のおかげで、それに周囲は砂だらけの地面であるから火が降り注ぐのだ。9×9フィートの独房の前面には6×2フィートの扉がある。背後には地面から8〜9フィートの高さに1×2フィートの窓がある。この独房の中で食事、水浴び、排泄、睡眠が行われる。蚊は夜通しその心地よい声を聞かせてくれる。ようやくのことで3、4時間眠るが、時には1、2時間しか眠れないこともある。食事は陶器で出される。夜具としては掛け布と敷布が一枚ずつ与えられている。厳しい修行の日々である。修行のための一切の手だては整えられている。一瞬一瞬が教訓を垂れている。最期の時に備えよ、神に祈れと。

私はこの独房に大いに満足している。だれか修行者のこもる洞窟に自分も幾日かこもってヨーガの修練をしたいものだと願っていたのだが、最後にその願いも叶えられたわけだ。この独房の中で最後の言葉を書き記して同胞に託す好機に恵まれたのだ。私の生涯を知ることだれかのためになるかも知れない。この好機はようやく得られたものである。

死を呼ぶ風が吹きつける
今こそ人生の秘密が明かされる
恋の苦しみも味わい晴れ晴れとした歓喜も見た
無為にして感動を越えたのではない
心を忠に捧げよ、命を邪惡に供えよ
恋をするには一切の持ち物を捧げ尽くさねばならぬ

今やこれこそがわが願いである。

悟りの海に急ぎ流れよわが骸
命断ち切る刃には飢えし魚の泳ぎたる
焼き尽くせこの絶望の悲しみを
毀れし胸の荒れ野さえやがて賑わう人里となる

結び

11年間に亘り力の限り渾身の努力をしたにもかかわらず己の目的をどこまで達成することが出来たであろうか。どのようなことを考えたとしてもそれで何らかの目的が達成されるわけではない。何故ならば革命運動に参加したのは損得とか勝ち負けということを考えてのことではなかったからである。すべてが己の義務、自己の本分と考えてのことである。本分と判断するに当たって私がどこまで理性的に行動したかを考えてみるのが適当であるように思える。政治的にはわれわれの活動は若干の有為の青年たちの生涯を全く難渋なものにし空しいものにしてしまった。いささか財まで費消することになった。ヒンドゥー教の教えによれば、人が不慮

の死を迎えることはないと言われる。人がどのようにしていつ死ぬかは前もって定められているものなのだ。定められたように定められた時に死ぬものなのだ。だが、そのきっかけとなる原因が生じるものである。何十万というインド人がコレラやペストなど様々な病気で死亡する。数千万の人が飢饉で食べ物がなくて死ぬ。しからばその責任はだれが負うのだ。財貨の費消は如何なるものか。その程度の財貨は金持ち連中の結婚祝いに費やされるものだ。著名な金満家たちが月々の贅沢に費やす金額はわれわれが一つの事件を起こすのに当たって費やした程度のものであろう。われわれをダーク（強盗）と名付け絞首刑と流刑に処した。だがわれわれは弁護士や医者をつねにわれわれ以上のダークだと考えている。弁護士や医者は昼日中にタアルクダール^{*1}たちの地所を奪い取って食べ物にする。弁護士たちが貪り食べたアワドの大地主たちは数え切れないほどのものであるし弁護士たちの聳え立つ大邸宅は大地主たちを嘲っている。だがこの国では昼日中のダークが尊敬されるというわけだ。さもなければ夜に現れる通常のダークと昼中のこうしたダークとの違いは全くないのだ。両者ともそれぞれの目的を達成せんがために知能の冴えでもって人々の財貨を奪うのである。

歴史的に見ればわれわれが行ったことは甚だ大きな価値のあるものだ。どのような形にもせよこの墮落した状況にあってもインドの青年たちの胸に自由への思いがある。彼らは自由になろうとして力の限り努力している。もしも恵まれた状況ならばこの僅かな青年たちがその努力によって世界を驚かせることであろう。そうなればインドの国民もフランスの青年たちがフランス共和国建設の際に述べた

The monument so raised, may serve as a lesson to
the oppressors and an instance to the oppressed.

という言葉を使う幸運を得ることになる。

ガージー・ムスタファ・ケマルパシャ^{*2}がトルコから逃亡した際にはわずか21人の青年が随行しただけであった。何一つ持ち合わせもなく死の追討令が後を追いかけていた。だが、一転してそのケマルが奇跡を起こし世界を驚嘆させたのであった。あの人殺しのケマル・パシャがトルコの運命を決する人となったのであった。かのレーニン氏はある日酒樽の中に潜んで逃げなければならなかった。そうしなければ死はそこまでやってきていたのだ。そのレーニン氏がロシアの運命の決定者になったのだ。シヴァージーは強盗とか追い剥ぎとかに考えられていた。しかしヒन्दゥ教徒がシヴァージーを自分たちの指導者と牛とブラーフマンの守護者であるシヴァージー大王に仕立てたのだ。インド政府までもが自分たちの利益のためにはシヴァージーの記念碑を建立しなければならなくなったのだ。ロバート・クライヴ^{*3}は人生に失望した一介の生意気な書生であった。時の転変がその生意気な書生をイギリスによるインド支配の創始者たるクライヴ卿にしたのだ。時の流れが支那の謀反人孫逸仙（孫文）が亡命者であったのに中華民国の大総統になしたのだ。成功こそが人の運命を作り出すのである。失敗すればその同じ人を野蛮人、強盗、アナキスト、謀反人、人殺しの呼称で飾りつけるのだ。成功がその人たちの名を慈悲深い人、民を愛する人、正義の人、民主主義者、聖者と変えるのだ。

インドの歴史にはわれわれがなした努力については必ずや記述せざるを得ないであろう。しかしながら、現今インドの政治的、宗教的、また社会的、いずれの状況においても革命運動にふさわしいものはない。その原因はインド人の間に教育が十分でないことにある。インドの民はごくありふれた社会的発展すらなし得ないのである。それなのに政治革命のことをだれが唱

えるであろうか。政治革命を行うに当たっては一番に革命家たちの組織が様々な妨害や障碍が出現しようとも如何なる誤りも生じないようなものでなければならないのだ。あらゆる活動が持続されなければならない。活動家は一人欠ければ代わりの者が常に待機しているほどに有能且つ十分な数だけいなければならない。インドでは幾度となく反逆の陰謀が暴露されたことか。そして積み重ねられたことが無に帰したことか。独立革命組織がこのような状況にあるとすれば一体だれが革命に努めるであろうか。国民が現在の統治者の政策を理解して自分たちの利害を理解できるほどに教育を受けていなければならない。現在の政府を取り除くべきか否かについて十二分に理解していなければならない。それと同時に国民はどのようにすれば統治者を排除できるかについての認識を備えていなければならない。革命組織とはなんぞや、何を欲するものであるのか、それは何故なのか。このようなことの一切を民草の多くが理解できること。革命家たちが民衆の完全な共感を得ていること。そうして始めて革命組織はインドの国土に足場を得ることが出来るのだ。これは革命組織結成の初歩的な事柄である。革命となればずっと先のこととなる。

革命という言葉そのものが甚だ恐ろしいものである。どのような革命も相手を恐怖させるものなのだ。夜があるところでは夜に活動する者たちは昼が来るのを知って辛い思いをするものだ。寒冷な風土に棲息する鳥獣は暖かい季節が訪れるとその生息地からさえ立ち去るものなのだ。その上政治的な革命というものは甚だ恐ろしいものなのだ。人間は習慣の集合体から成っているものだ。これに反して何かの障碍が生じた際には恐怖を感じるものである。さらにいずれの支配者にも支援者たる資産家と地主がいるものだ。この連中はどのようにでもあれ自分たちの安楽や贅沢が妨げられるのを嫌うものだ。したがって連中は常に革命運動を破滅させようと努めるものである。仮に何らかの形で他国の支援を受け時の利を得て革命組織が革命運動に成功し革命が成ったとしても有能な指導者がいなければ無秩序となり無意味な殺戮が発生しその過程で無数の有能な先導者や学識者が滅することになるものだ。このことをはっきり示す例が1857年のガダル^{*4}である。たとえフランスやアメリカのように革命によって政権を転覆させて民主政体を確立したとしても大金持ちたちがその財力で一切の権利を押さえ込んでしまうものだ。それを運営する組織の中で資産家たちが大きな権限を手に入れるのである。統治機構の中で資産家の意見のほう为重んじられる。その財力で国内の新聞、雑誌や工場を自分たちの支配下に置くのである。頭の良い連中までもが時機を見てその知力で民草の営々たる稼ぎによって得た権利を横取りしてしまうのだ。自分の利益に目が眩み労働者や農民に発展の機会を与えない。ついにはこの連中までもが資産家の側に立って民主主義の代わりに金権主義政治を樹立するものである。ロシア革命の後に正にこのことが生じたのである。ロシアの革命家たちはすでにこのことを知っており、したがって彼らは支配権力に対して戦い独裁政治を終わらせたのであった。その後、資産家やインテリが妨害しようとしたのですぐさま彼らとも戦い本当の民主政治を築いたのであった。

さて今やわれわれは、インドの革命運動に役立つどのような手段が存在するのかについて検討しなければならない。自分の体験から組織のメンバーを養うためにどれほど苦痛を味わわなければならないかなかったかについては先述したところである。必死の努力をしたにもかかわらず非協力運動が終わってからは革命運動を支持し協力しようとした連合州の青年は数えるほど少数しか見つからなかったのだ。この少数の人たちの中にも心から共感を抱いてくれた人、命がけであった人がどれだけいたかは申すまでもないことだ。どれほど大きな期待を抱かせてそれら

の人たちを革命組織のメンバーにしたことであったろうか。

それも非協力運動の連中が政府の側に立ち革命運動に対する憎悪を作り出すあらゆる努力を惜しまず公然とわれわれの革命運動について存分に批判の宣伝をしていた状況であった。それにもかかわらずボルシェヴィキによる支援の期待を抱かせ革命運動家の高い理想と犠牲の手本を示して鼓舞したのであった。青年たちの心には革命運動家に対する大きな愛着と敬虔な思いがあるものだ。彼らは武器を持ちたいという自然な気持ちやリボルバーやピストルに無意識な愛着があるために革命組織への共感が生じるのである。私は革命運動の中でリボルバーやピストルを所持したいという欲求を持たないような青年には一人も出会ったことがなかった。リボルバーを目にした時には自分の信奉する神様を拝んだかのように思い人生の半分は有意義なものになったように考えるものだ。その時点からは革命組織はこのような武器を山のように多数持っているに違いない。だからこそこれほど巨大な政府と戦おうとしているのだと理解するのである。資力に事欠くこともないに違いないと考えるのだ。そうなると組織の費用であちこちへ行く機会にも恵まれるだろう。名だたる自己犠牲の化身のような人たちにも拝謁できよう。秘密警察のことについても様子が知れよう。発禁になったり没収される書物も少しはその前に読ませてもらえよう。決して手に入れることの出来ない高級な文献も読めるようになるだろう。革命運動家たちは著名な王侯たちも味方になっているに違いない。間もなく政府も転覆させよう。爆弾の製造法も教えてもらうに違いない。不死をもたらす薬草が手に入るだろう。等等ということだ。だがしかし、青年革命家が組織のメンバーになり真心から組織の活動に参加するようになると短時日のうちに特別のメンバーになる資格を得てアクティブ・メンバーとなり組織の真の秘密をいささか知るようになる。その時に彼はどれほど凄いの活動に自分が手を染めたかを知るのである。そうすると例の鼻欠け一門^{*5}の仲間入りをした心境になるのである。どの方角を見ても失敗と不信感が押し寄せて来ればこのような道を進むならばこのような結末が生じるに決まっていると思うようになるものだ。外国の革命運動家たちの歩んだ道にもこれと全く同じ障碍が生じたに違いない。自分の目標を諦めない人が英雄と呼ばれるのだ。このようなことで心を落ち着かせるのだ。インドの一般民衆については問題にもならないが、教育を受けた人の大半ですら革命運動が何たるかを知らないのであるからその革命運動に携わる人たちに共感を抱くはずがない。同胞の共感を得ずして、あるいは、民衆の声なくしては政府も何も心配はしないものだ。2、3人の教育ある人が一つ二つの英字新聞に声を潜めた文章を一つ二つ書いたところでそれは荒野の叫びと同じく無駄なものとなる。その声は空しく宙に消え去るのである。今、それらを総合して考えてみるに私は逮捕されてよかった、逃げなくてよかったという結論に達している。私は逃亡しようと思えば逃げられた。逮捕される前に自分が逮捕されることがはっきり判っていた。逮捕前に私にその気持ちがあったなら警察には私の居場所の気配すら感じられなかったであろう。だが、私は自分の力量を試さなくてはならなかった。逮捕後、半時間の間私は拘束を受けずに歩き回っていたのだ。警察は静かに腰を下ろしていた。私が警察本部に着いたのは昼時であったが署の事務室に何らの拘束を受けずに自由な姿で腰を下ろしていた。徹夜の勤務をした警官が一人だけ監視のために近くに腰を下ろしていた。夜通し起きて逮捕に従事していた警察の幹部たちも全員が休憩のため席を外した。監視役の警官も猛烈な睡魔に襲われて眠り込んでしまった。部屋には書記がただ一人書類を作成していた。その書記も被告人ローシャン・シンの父方のいとこだった。もし私とその気なら気付かれぬように立ち去っていたであろう。しかし私は、書記はそのために大変な災難に遭うことになるだろう

と考えた。私は書記を呼び寄せてもし将来の災難を覚悟しているなら自分は姿を消すつもりだと言った。書記は以前から私の顔見知りだった。彼は私の足元にひれ伏し「私は逮捕されることになります。手前の妻子は飢え死にすることになります」と言って哀願した。私は哀れに感じた。1時間後アシュファーク・ウッラー・ハーン氏の自宅搜索を済ませた警官たちが署に戻ってきた。アシュファーク氏の兄上の実包付の銃と実弾のついた弾帯が運び込まれて書記のそばに置かれた。私はすぐそばで縄を打たれずに椅子に腰掛けていたのだった。巡査が一人だけ手に何も持たずに立っていた。私は銃を手に取り弾帯を首から下げようか、だれも立ち向かって来るものかという気持ちになった。しかし、書記に災難が襲いかかることになるのはいけないと思い返した。ちょうどその時、秘密警察の警視が正面に現れた。警視は私の片側に銃弾と銃が、反対側にはプレームクリシュン氏のモーゼルと実弾が置かれているのに気付いた。というのも押収された物品はすべて書記のところに集められるようになっており私は拘束を受けずにその真ん中に腰を下ろしていたからである。警視は懸念をして即刻銃とピストルをその場から収納庫に入れさせた。逃げるのは今だと心に決めた。用足しをしたいと言って室外に出してもらった。巡査が一人本部棟から手洗いのため私を連れだした。他の警官たちがその巡査に腰縄をつけておくようにしきりに言った。巡査は、この人は絶対に逃げないと信じていると言った。手洗いは全く人気のないところにあった。巡査は私を便所に行かせてその場に立って前方で行われていたレスリングを見物し始めた。私は塀に足をかけ上に登てみると巡査はレスリングに熱中していた。手を伸ばせば塀を越えて一瞬にして外に出られる。そうすればだれが私を捕まえることが出来よう。しかし、私を信頼してこれほどの自由を与えてくれた巡査を裏切って巡査を刑務所送りにするつもりなのか。それでいいのか。巡査の家族は何というだろうか、とすぐに思い返した。その思いが私の胸に衝撃を与えた。深い溜息をついて塀から下り便所の外へ出た。巡査を伴って本部の留置場に戻り閉じ込められた。

ラクノウ刑務所ではカーコーリー事件の被告たちには随分と自由が許されていた。看守長のラーイサーハブ・パンディット・チャンパーラールのおかげで自分たちが獄中にいるのか親類の家の客になっているのか分からないほどであった。小児はことごとに親にすねるものだが、われわれの態度はそれにそっくりだった。われわれはことごとに職員に対してすねていた。チャンパーラール氏はわれわれを自分の子供に対する以上に愛情を寄せるような心の持ち主だった。われわれのだれかに少しでも辛いことがあると大変悲しい思いをされるのであった。われわればかりでなく他の一般囚人も、看守も掃除係も事務員もだれ一人として辛い思いはしなかった。誰も彼もとても機嫌よくしていた。そればかりでなく私の日常の振る舞い、毎日のヨーガの修行、読経などのお勤めに励んでいる姿を見て見張り当番の看守たちは私を自分たちの師匠以上に鄭重に遇していた。私は季節に関係なく早朝3時に起床し早暁の祈りと読経を済ませると護摩を焚いていた。どの看守も私を神様のように拝んでいた。看守たちは自分の家族にだれか体調の悪い人が出るとその護摩の灰を持ち帰るのであった。護符を私に求める者もいた。その人たちの信頼があるため効能があり、またそのため敬虔な気持ちがいつそう増すのであった。その結果、脱獄の準備が完全に整えられた。自分の好きな時に獄外に出られるのだ。ある夜、心づもりをして立ち上がった。見張り番の男は私に支えられて見張りをしていた。いつも眠くなれば眠り、その気になれば起き上がって床に腰を下ろしていた。というのは、看守や看守長が刑務所の正面に召集をかければ私が助けてくれるのを知っていたからである。看守たちは私については全く脱獄の心配をしていなかった。辺りは静寂であった。ただ、切断された鉄格子を

持ち上げて部屋の外に出る工夫をすればよいだけになっていた。鉄格子はすでに4ヶ月前に切断してあった。切断した後また巧みにつながれていたので、格子が洗われ塗料が塗られ3日毎に刷毛で払われ8日毎にハンマーで打ち鳴らされ刑務所の幹部が決まって毎夕巡視し目を光らせて行くのであったが誰にも全く気付かれなかった。脱獄しようと考えて立ち上がった時に何もかも不自由のないように情けをかけてくれたパンディット・チャンパーラールがあと少しで年金受給資格が得られるようになった晩年に果たして彼を裏切って脱走してよいものかという思いが浮かんた。これまでの生涯にただの一度も人を裏切ったことがないのであるから今も裏切りはするまいと思った。その時自分には自分が絞首刑に処せられるのが判っていたのだがそうしたことを考え脱獄を思いとどまったのであった。こうしたことは世間の人には世迷い言のように思われるだろうがすべて正真正銘の真実でありすべて証拠が残っているのである。

現在の私は次のような結論を得るに至っている。もしもわれわれが命がけで民衆の教育に努力を傾注していたならば、その努力は革命運動よりはるかに永続的で有益なものになっていただろう。インドのこれからの世代や若者たちが革命運動の組織を作るよりも民衆の心を国家への奉仕に向けさせる努力をするならば、そして労働者や農民を団結させて地主や資本家の横暴から守ってやるようにするならば願ってもないことである。インドの資本家や地主たちは政府を支持している。中流階級の人たちは何らかの形でこの三者に依存している。ある人は勤め人でありある人は商いに従事している。この人たちも前者に頼らざるを得ない。残るのは労働者と農民だけになるがこの人たちは腹を満たさんがため宗教や社会、それに政治に少し注意を向けることが出来る時間が見つけられない。飲酒などの悪癖のため品行も正しく保つことが出来ない。子供の多さや早死に、それに様々な疾病から生涯に亘って解放されない。農民にあっては勤勉というものは名ばかりのものさえ見出されない。一人の農夫が村で地主のところでの賃働きで、あるいは、犁を使って働くことで今から20年前に一日2アンナ、もしくは、月額4ルピーの賃金を得ていたとすると今日も全く同額の賃金が続いているのだ。20年前にはその農夫は独身であったが今は妻と4人の子供までいる。しかし、昔と同じ賃金で暮らしを立てなければならないのだ。農夫はそれで諦めなければならない。一日中ジェート月（陽暦5〜6月）の熱風と日差しの中サトウキビ畑で水やりの仕事をしているうちに夜盲症になり夕闇が迫ると同時に目が見えなくなるのだが、その報酬は3合ほどの腐りかけの糖蜜かヒヨコマメと一日6パイサーの労賃でありそれで家族を養わなくてはならないのだ。

インドへの奉仕の気持ちを胸に抱く人や母国インドを自主独立の国にしたいと願う人は農村を組織化して農民たちの生活を改善し彼らの心を運命観から反らして勤勉に向かわせる教育を与えるようにするのが望ましい。工場、鉄道、船舶、鉱山など労働者のいるところでは彼らの暮らしを改善するために労働組合を設立して彼らに自分たちの境遇を自覚出来るようにして工場主たちが横暴な振る舞いが出来ないようにすることが必要である。また、およそ6千万人もの人が不可触民とされるような国の国民に自主独立を求める権利があろうか。それと同時に女性たちが自分たちを人間の一人と自認するようになるまで女性の地位が改善されなければならない。女性が履物とか人形のように考えられることがあってはならない。インドの大多数の人が教育を受け善悪の判断が出来るようになった時に教育のある人たちが賛同するあらゆる運動は必ずや成功を収めるに違いない。世界最強の力もそれを抑圧することは出来ないであろう。ロシアで農民たちが組織化されるまでは政府側は愛国の士たちに対して思いのままに暴虐を働き続けた。エカテリーナ^{*6}が農民の組織化を手掛けるようになり各地に農民の地位改善団体

を設立した。ロシアの青年男女が各地を訪れツアーに反対する宣伝を始めた。やがて農民たちは自分たちの境遇を認識するようになったのだった。農民たちが誰が自分たちの友であり誰が自分たちの敵であるかを理解するようになった時からツアーの独裁体制の基盤は揺らぎ始めたのだった。労働組合も設立された。ロシアでストライキが始まった。その時以降権勢についていた連中の目は民衆の動きを見て開き始めたのだった。

インドの一番の弱点は青年たちが都会風の生活に憧れそれに溺れてしまっていることなのだ。青年たちは美しい衣服を着て舗装道路を歩き、甘味、酸味、そして刺激の強い食べ物を食べ舶来品で美しく装い繁華街をぶらぶら歩きテーブルや椅子の暮らしをして官能に溺れてしまっている。農村での暮らしを若者たちは甚だ味気なく無味乾燥なものと考えている。彼らの理解では農村には半開、もしくは、未開の人間が暮らしているのだ。英語を教育の媒介語とする学校やカレッジに学んでいる学生が何かの用事でだれか親類の家のある田舎に行き 2、3 日過ごさなければならなくなると甚だ耐え難くなる。小説を持って行って一人離れて読んでいるかごろごろ寝ているかのいずれかになる。だれか田舎の人と話をすると頭が疲れてしまう。あるいは、そのような話をするのは自分の沽券にかかわるものと考えなのだ。自分の息子に英語を習わせる田舎の地主や資産家たちも同様に息子が出来るだけ役人になることを願うものだ。田舎の子供が都会に出て都会のきらびやかさを見るとファッションにのぼせてしまい類を見ないようなファッション狂になってしまうものだ。間もなくその影響はその子らの行動にも影響を及ぼし不良どもの手にかかって甚だしい悪癖だらけの人間になってしまう。彼らは生涯に亘って自分自身を改めることが出来ないのであるから農村の人たちを良い方向に導くことが出来ようはずは全くないのだ。

非協力運動の活動家たちはこれほど大勢いるにもかかわらず誰も彼も都会の演壇から大演説をぶつのを己の義務と考えていた。農村でいささかなりとも活動した活動家は甚だ少数であった。その中では大半の者はひたすら人々に大騒ぎを起こさせることを国興しと考えていた。その結果、運動が少し沈滞したとたんに一切が大混乱を来してしまった。だからこそデーシュバンドゥ・チッタランジャンダース氏^{*7}はその最晩年に農村の組織化を生き甲斐とされたのであった。私の考えるところでは農村の組織化の最も易しい方法は青年たちが都会風の生活を捨てて農村生活に親しむようになることだ。8 年生、10 年生、学士などの課程を終了するために巨額の金を無駄にして月々 10 ルピーとか 15 ルピー、あるいは、20 ルピーや 30 ルピーの勤め口を見つけるためにさんざんな苦勞をしているが、勤めるのを止めて何か実際的な仕事口、すなわち、大工職、鍛冶職、洋服仕立て、クリーニング、製靴、機織り、建築業、左官業などなどを習得すべきである。もしも、いささかこざれいなものを望むならばインドのアーユルヴェーダ医術を学ぶことである。人口の多い村や町へ行って仕事を始めることだ。先に述べた職業のうち 4～5 時間の労働で月収 30 ルピーにならないようなものは一つもないのだ。農村での月収 30 ルピーというのは都会での 60 ルピー以上のものに相当する。何故かと言えば、農村では燃料としての木材や乾燥牛糞は甚だ安価であり、もしもザミーンダールの好意があれば枯れ木を一本伐ってもらえば半年間は燃料の心配はなくなるからだ。不純物の混じらない純粋なギーや牛乳が安価に得られる。そして仮に自ら 1、2 頭の牛や水牛を飼育するならば、「マンゴーは果肉ばかりかその種までも」という譬えのようにおまけまでついてくる。餌は安価に手に入るしギーや牛乳は子供たちが利用し牛や水牛の乾燥した糞は燃料になるというわけだ。もし親切心のある人がいれば麦の収穫時には牛車 1、2 台分の藁が無料で手に入る。大半の職人は村では

資料や燃料のために金を費やすことはない。ヴァイディヤ^{*8}や仕立屋、洗濯屋が住んでいない適当な村が幾千とある。その住人たちは20マイルも40マイルも離れたところに頼みに行かねばならない。その人たちはわれわれが推測することすら困難なほどの辛い思いをしている。結婚式などの際には衣裳が間に合うようには手に入らない。生葉はかなり大きな町でも手に入らないものだ。一般的な薬種商になって町に住みつくなれば、そして2、3の手引き書を読むだけで月々30〜40ルピーの収入は確実になる。こうして食べることで家族の扶養が可能となる。村の多くの人たちと知り合うことになる。知り合うばかりではない。一度だれかのお役に立つことがあれば、その人はそれを恩に着るのだ。やさしい眼差しを向けるようになる。いざという時には直ちに力を貸してくれる。村に住んでいて鍛冶屋や大工、洗濯屋、仕立て屋、陶工、ヴァイディヤ^{*8}とかかわりのない人はいないものだ。村の有力者たちがこのような職人や技能者たちにいつも随分と気を使っているのを私は知っている。

日常的に用事があり関係があるのでもしほんの少し努力するならば、そして村人たちにわざわざ説明して村人たちの暮らし向きがよくなるように努めるならば時を経ずして目的が達成されるものだ。短時日のうちに村人たちは真の愛国者、カッダル^{*9}を着用する人になるであろう。もしもその人たちの中に一人でも二人でも教育を受けた人がいるのであれば励ましてあげて新聞を取り寄せられるようにしてあげるがよい。インドの今日の状況について少しは認識出来るようになるであろう。同様にして解りやすい本に書かれている話を語って聞かせることで村人たちの陋習も取り除くことが出来る。折に触れてラーマーヤナやバーガヴァタ・プラーナ^{*10}の物語を語ってあげるがよい。もし定期的にバーガヴァタ・プラーナを語って聞かせるならばかなりのお布施も寄せられるだろう。それで図書館を設けるがよい。その話の中にどれだけ政治的なことを付け加えても密告するような秘密警察の回し者はいないものだ。もしもカッダル着用の人が村の中で村人に向かって一席ぶつならばすぐさまザミンダールが警察に注進するだろうが、町のインド医や子供たちを教える人や物語を語る人たちが何か言おうとも皆は黙ってその言われたことを実行しようと努めるだろうしその人に詰問することもないだろう。こうして様々な便宜が得られるので村人たちの生活環境が改善されよう。夜間学校を開けば貧しい人々や不可触民^{*11}の子供たちに教育を与えることが出来る。労働組合を設立するならば都会で暮らすことは出来よう。だが、そのためには労働者たちと共に多くの時間を費やさなくてはならないだろう。そうすれば労働者たちが仕事を終えて休憩する時に言葉を交わして興味深い話をして労働者たちに自分たちの置かれている境遇を指し示してやる機会が得られよう。労働者たちの自由になる時間は実に僅かなものであるから興味を引く手段で説明する要領で、例えば、幻灯機などを用いるなどして人々を一ヶ所に集めたり夜間学級を開いて労働者やその子供たちにも対応するのがよいだろう。高等教育を受けていながら無駄な金を使いたい人がいればその人はせいぜい英語の10年級までの能力を身につけて何らかの技術を身につける努力をするがよい。そしてその技能によって自分の暮らしを立てるがよい。

資産家の名士で国のために大きな大学や学校を設立する人々にはそのような学校を設立するばかりでなく併せて実業学校、工芸学校、技芸学校を設立していただきたいものだ。これらの学校の生徒は著名人の権力争いに巻き込まれないようにしていただきたい。学生には質素に暮らし高邁な精神を持ってもらいたいものだ。これらの学校にはそれぞれ学生が意見の述べ方を学習出来るように弁論部を設けていただきたい。国家への奉仕の気持ちを胸に抱いている青年たちに苦勞を耐え忍ぶ習慣をつけ永続的な感化が残るような活動をしっかりとすべきだ。

年はブラハで反ソ連派の活動家として知られた。「ロシア革命の祖母（おばあさん）」と呼ばれた。エカテリーナに関する言及をはじめこの項でビスミルがもし生きながらえていたならば実行したかったであろう活動の数々はニコライ・チャイコフスキーの農民や労働者への働きかけを目指した「人民の中へ」の活動や教育運動と密接に関連しているのは確かであろう。なお、Sister Nivedita は 1908 年に入獄前の Bhupendra Nath Datta にマッツイーニの自伝とクルポトキンの著作を与えている。(R.C. Majumdar, op.cit.I,p.464)

*7 チッタランジャン・ダース (1870-1925) 敬称はデーシュバンドゥ (国の友, 兄弟の意)。ベンガルの法曹界で活躍してきた家系で弁護士の子としてカルカッタに生まれた。英国留学を経て帰国後カルカッタ高裁で弁護士業を開業。民族運動への理解と志向を深めるなか民族運動に関連した裁判官襲撃や爆弾襲撃などによる一連の事件 (Alipore Bomb Conspiracy Case 1908 年) でのオロbind・ゴーシュ (Aurobind Ghose) の弁護やダッカ陰謀事件 (1910 年) などの弁護で献身的な弁護活動を行い著名となる。1920 年に弁護士業を廃業し民族運動に集中した活動に移り 1923 年に会議派内のスワラージ党の結成に動き立法機関への進出による民族運動路線を採った。ここに言及されているのは、C.R. ダースが 1922 年 12 月のガヤーにおける国民会議派議長演説の中で述べた主張 — 村落生活の組織化と小規模地域の自治を州自治や中央の責務以上に重視する — Scheme of Government and Village Organisation にかかわるものと思われる。

*8 ヴァイディヤ インドの伝統医術であるアーユルヴェーダの知識を持つ医者。

*9 カッダル (खदर) 手織りの綿布のことでカーディーとも呼ばれる。国産品愛用運動の一つとして重要な意味を持つものであったが、自立自足の精神的な象徴としての意義が大きかった。カッダルダリー खदरधारी とはこれを用いた衣服を着用する人のことで一時は国民会議派の支持者の謂であった。

*10 バーガヴァタ・プラーナ भागवत पुराण ヒンドゥー教ヴィシュヌ派 (バーガヴァタ派) の聖典の一で人口に最も膾炙しているプラーナ聖典。

*11 不可触民 原文ではアチュート (अछूत)

*12 キャサリン 原文にはケョロライン とあり (The grandmother of the Russian Revolution) と書き添えてある。

*13 革命組織 原文ではक्रांतिकारी दल。革命党とも革命団とも訳すことが出来る。

*14 完全な自主独立 原文では पूर्ण स्वाधीनता とある。

*15 真実の共産主義者 原文では वास्तविक साम्यवादी とある。

最期の言葉

今日、すなわち、1927 年 12 月 16 日にこの文章を認めている。1927 年 12 月 19 日 *1 日曜日 (ヴィクラマ暦 1984 年プース月黒半月 11 日) の朝 6 時半にはこの身を絞首台の綱に吊ることが決定されている。したがって定められた時にこの世の活動を終わらなければならない。これは全能の神の為す遊戯である。一切の活動は神の意のままになされる。人がどのようにして肉体を捨てることになるかは至高の父たるパラマートマーの定める規定による。死に至る一切の過程はただ運命なのである。人の業が尽きるまでは靈魂が生と死の束縛を受けなくてはならないことはシャーストラ、すなわち、ヒンドゥー聖典の定めているところである。もっとも、

如何なる業を為せば如何なる肉体を享けねばならなくなるかは最高神パラブラフマのみの知るところである。しかし、私には自分が最高の肉体を得て新しい力を携え至急に再度インドにだれか親類縁者か友人の家に生まれる確信がある。何故なら私が生まれ変わるのとは全人類が自然界に存在する一切のものに対して平等な権利を得るべきことを目標としているからである。人が人を支配してはならない。私は全世界に民主主義が確立されることを願う。インドの現状は実に嘆かわしい状態にある。したがって、私は繰り返し幾度もこの国に生を享けなければならぬまい。また、インドの男女が完全な自由を手に入れるまでは最高神の真正な言葉、「ヴェーダの言葉」の譬えようない声を人々の耳に伝えることが出来るようになるまでこのインドの地に生をお与え下さるように祈るばかりである。どの道を探るかで過つかも知れないが、それは私に特別の欠点があるからではない。私自身も僅かな知識しか持たないちっぽけな生類にしか過ぎないからである。過ちを犯さないことは全知者にしか可能ではない。われわれは自分たちを取り巻く状況に従って一切の行動をするしかなかったし今後もそうしなくてはならないだろう。私が次に生まれ変わって進む道が過誤なきものとなるように勝れた理解力を授けられんことを最高神パラマートマーに祈る。

さて次に私はカーコリー事件の被告たちについて一審の治安裁判所判事が判決を下した後に生じたことについても言及するのが適切だろうと考える。1927年4月6日に判事は判決を下した。同年7月18日にアワド管区中央裁判所 Awadh Chief Court に抗告がなされた。そこで幾人かの刑が増し少数の者の刑が軽減された。上訴期限前に私は連合州知事に宛て請願書を送り今後革命運動とは一切の関係を持たないとの誓約をした。この請願書については中央裁判所の判事たちに提出した最後の請願書の中で言及したが、判事たちは請願を一切認めなかった。私は自ら獄中から抗弁書を書き送った。これは公表された。この抗弁書について中央裁判所の裁判官たちが耳にするとこれは私が自ら書いたものではないのではないかと疑念が持たれた。そうしたことがあってアワド中央裁判所によって私は最も凶悪な謀反人との極印が押された。私の反省について判事たちは信頼が置けずもし被告人（ラームプラサード）が釈放されるならば再度同じ犯行を行うであろうとの意見を表明したのであった。頭の鋭さと判断力に照らして私を「無慈悲な殺し屋」の名で飾り立ててくれた。筆は判事の手にあるのだから好きなように書くだらう。しかし、本事件に関する中央裁判所の判決の全体を通して読むならば私に対して如何なる考えの下に死刑が与えられたかが明らかになるであろう。被告人ラームプラサードは治安判事に悪罵を浴びせ治安警察の幹部たちの名誉を中傷した。すなわち、訴追の際に行われた暴虐に対して声を挙げたのでラームプラサードが一番悪辣な被告人である。もはや今さらどのような詫びを入れようとも赦されることはない、ということであった。

中央裁判所で上告が棄却された後、慣例に倣い州知事に続いてインド総督に宛てて恩赦の申請がなされた。ラームプラサード・ビスミル、ラージェンドラナート・ラーヒリー、ローシャン・シン、アシュファーク・ウッラー・ハーンの名に対する死刑判決の変更を求める意見書に連合州の立法参事会のほぼすべての民選議員が署名して情状酌量の請願書を提出した。私の父は250人の著名人、名誉判事、地主たちの署名簿を添えて嘆願書を提出したのだが、サー・ウィリアム・メリス^{*2}の政府は何一つ受けつけなかった。それと時を同じくして中央の立法参事会及び立法会議の78人の議員たちが署名してインド総督に死刑判決を受けた被告人の死一等が減じられるようにとの請願書が提出された。というのは、治安判事がもし被告人たちが反省するのであれば刑一等が減じられるようにとの意見書を提出していたからである。4名は反

省を表明したが、インド総督は聞く耳を全く持っていなかった。

これについてはパンディット・マダンモーハン・マラーヴィーヤ^{*3} はじめ数名の中央立法参事院の議員たちが総督に面会までして死刑を免れるよう努力して下さった。そうした努力があったので皆は総督により必ずや死一等が減じられるだろうと期待していた。そうした中でヴィジャヤダシャミー祭^{*4} の2日前に密かに刑務所に減刑はないとの電報が送られた。4名全員の死刑執行の日程が決定された。刑務所所長が私にその電文を読み聞かせた際には私は所長に、どうぞ任務を遂行なさって下さいと言った。だが、所長は真剣にイギリス皇帝に情状酌量の電報を送るように勧めた。というのは、総督に情状酌量が認められなかった死刑囚はイギリス皇帝に宛てて州政府に情状酌量の嘆願書を必ず提出することになっているということだった。他の所長であったならこのようなことはしなかったであろう。その嘆願書を認める際、英国枢密院に上訴してみてもどうかという考えが浮かんだ。私はラクノウの弁護士モーハンラール・サクセナー氏にその旨を伝えた。刑務所の外では総督への請願が却下されたことを誰も信じなかった。どうにかこうにかサクセナー氏を介し枢密院に上訴がなされた。その結果は最初から判っていたことだった。訴願は枢密院からも却下された。イギリス政府が全く耳を貸そうとしないのを知っているながら何故政府に誓約書を書き送ったのか。何故次から次へと嘆願書を提出し情状酌量を願ったのか、というような疑問が起こり得よう。私が常に思っていたことは、政治はチェスを指すのに似ているということだ。チェスプレイヤーは必要とあればどのように自分の駒を相手に取らせなくてはならないかを知っている。ベンガル条令関係の被告人たちを釈放するか公開裁判に処するかは提案がなされた時に政府は十二分な証拠を握っていると強い口調で宣言した。公開裁判を行えば証人に不都合なことが生じ得る。もしもベンガル条令関係の被告人たちが革命運動との関係を一切断つと書面で誓約書を提出するならば政府は釈放について検討することが出来る。ベンガルのダクシネシュワル及びショーバーバーザールでの爆弾事件^{*5} の裁判はベンガル条令の成立後に行われた。秘密警察の副本部長殺害事件^{*6} の裁判も公開で行われたが、何一つ不祥事は起こらなかったし殺人事件発生の情報を警察も出すことは出来なかった。カーコーリー事件の裁判もまる1年半に亘り公開された。証人としてはおよそ300人が出廷した。幾人ものスパイ、幾人もの共犯証人が大手を振って歩いていたが何か不祥事が起こったとか脅迫があったということは何一つ警察も報告していない。政府側のこのような主張のインチキを暴露するために私は書面で政府に誓約した。政府によればベンガル条令に関わる被告人たちに関して政府は十分な証拠を持っており当局は被告人のうち幾人もの人を恐ろしい陰謀組織のメンバーや殺人事件の責任者と理解していたしそのように言明してきた。それならばこれと全く同様にカーコーリー事件の陰謀に加担した者たちが書面で誓約したことを何故誰も真剣に考えなかったのか。「叩いておいて泣かせもせず」という諺がある。連合州において進められている政治犯裁判のすべての判決は秘密警察の意向のままに書かれていることを私はよく知っている。バレーリー警察署の警察官殺害の嫌疑では全く無実の青年たちが毆にかけられ秘密警察の連中が自分たちの日誌を示しながら判決文を書かせたのであった。当局のあらゆる術数を承知してながらも私は当局の大嘘の正体を暴露するためにあらゆることを行っただけである。カーコーリー事件の死刑囚について情状酌量をしない特別の理由が当局にあるわけではない。当局がベンガル条令により逮捕された人たちに関して述べたのと同じことをカーコーリー事件の被告人が行ったに過ぎない。死刑判決を撤回することで国内にいささかなりとも治安が乱れたり何らかの騒乱が発生する可能性はなかったのだ。インド中のすべて

のヒンドゥー教徒とイスラム教徒の議會議員たちが口添えしたのであるからなおさらのことなのだ。陰謀事件についてこれだけ多くの人たちの口添えはかつてなかったものである。しかしながら当局は自分の都合のいいように正義の秤の棹を水平に保ちたいのだ。自分たちの力に自身があるのだ。サー・ウィリアム・メリス自身がシャージャハーンプルとアラールハーバードのヒンドゥー対ムスリムの宗教間対立の暴動の被告たちの死刑を破棄しているのではないか。これはアラールハーバード高等裁判所が死刑に処することを適切と判断したものであったし被告人については昼日中人殺しをした直接の証拠が存在したのだ。これらの刑はヒンドゥー対ムスリムの宗教間暴動が激化する一方であった時期に破棄されたのだ。もしもカーコーリー事件の被告人たちの死刑を刑一等減じることによって他の人たちの意気が上がるのであれば同じことは宗教間暴動についても生じることはないか。だが、事の展開はそういうことではない。すなわち、インドの穏健派の一番の指導者さえも法定委員会^{*7}のメンバーに任命されず一人のインド人も選定されず保守党のインド担当大臣バーケンヘッド^{*8}や他の労働党の指導者幹部たちの演説によりイギリスがどのようにしてインドを隷従の鎖に繋いでおくための策謀をめぐるしているかがよく判ったのである。

命を捨てるに当たり私はわれわれの犠牲が無駄になったとしても絶望はしない。われわれの密かな秘められた嘆きの声がこのような結果をもたらしたのだと確信している。すなわち、神がバーケンヘッドの頭の中にインドのヒンドゥーとムスリムの対立を利用しインドを縛りつけている鎖を更にきつく締めつけるようにとの考えを作り出したのだ。「(神様のもとへ) ローザー(断食)を止めさせてもらいに頼みに行ったらナマーズ(礼拝)を多くさせられる羽目になった」という諺^{*9}がある。インドのすべての著名な政党とヒンドゥー教徒のほとんどすべての指導者とイスラム教徒の大半の指導者たちが声を一つにして(インド法定)委員会の任命とその委員に対する猛烈な反対を展開している。次のマドラスでの国民会議派(コングレス)の年次大会^{*10}においてすべての政党の指導者たちとヒンドゥーとムスリムは一つになろうとしている。インド総督がわれわれカーコーリー事件の死刑囚の助命嘆願を拒否した際私はモーハンラール氏にインドの政治指導者及びヒンドゥーとムスリムに向かって次のコングレス大会において参集してわれわれのことを思い起こすべきだと書き送った。当局はアシュファーク・ウッラーをラームプラサードの右腕であるとした。彼が厳格なイスラム教徒でありながら全くのアーリヤ・サマージストであるラームプラサードの革命組織において右腕となることが出来るのであるならインドの独立のためにヒンドゥー教徒とイスラム教徒とがそれぞれの小さな利益を顧慮することなく一心同体となれないものだろうか。

神は私の訴えを聞き入れて下さり私の願いは叶えられるように思える。私は自分の仕事をやり遂げた。イスラム教徒の中から一人の青年を選び出しインド人の前にあらゆる試練に完全に合格したことを示した。今やイスラム教徒を信用するなどは誰一人言えないだろう。完全に成功した最初の試みであった。そこで同胞各位に向かっての私のお願いは、もしもわれわれが処刑台に上がるのを少しでも悲しむのであればヒンドゥー教徒とイスラム教徒、そしてすべての政党は一つになってコングレスを自分たちの代表と認めてくれることだ。コングレスが決定することをすべて完全に受け入れてそれを実行されたい。そうすれば、イギリス政府がインド人の要求の前に頭を下げざるを得なくなる日は遠くないであろうし、もしそうなれば独立は遠くにあるものではなくなるだろう。何故ならそのようになればインド人に活躍する十分な機会が得られるだろうからである。ヒンドゥーとムスリムの団結こそがわれわれを記念するものであ

りわれわれの最後の願いである。それがたとえどのような困難を伴って得られるものであるにせよだ。私の申し立てはアシュファーク・ウッラー・ハーン・ワールシー君の考えと全く同じである。というのは、控訴審の際、われわれ二人はラクノウの刑務所の中でそれぞれ死刑囚の独房に数日間向かい合わせに入っていたからである。二人で様々な話題を論じた。逮捕されてから判決が下されるまで君は一度私と会いたいと熱望していたのだが神が願いを叶えて下さったのだった。

君はイギリス政府に対し助命嘆願をするのに同意しなかった。慈悲深き神以外の誰に対しても慈悲を乞うべきではないという君の考えであったが、私のたつての願いに政府に対し助命嘆願をしたのであった。親愛という神聖な権利を利用してアシュファーク・ウッラー・ハーン君に固い決意を翻させた咎は私にある。私は一通の手紙に自分の誤りを認めてブラートリ・ドゥヴィティーヤー^{*11} 祭の折りにゴークラプル刑務所から手紙を書いて同氏に赦しを乞うた。その手紙が君の手元に届いたかどうかは神のみの知るところだ。何はともあれ神はわれわれに絞首刑が下りインド人が心の傷に塩がかけられて悶え苦しみわれわれの魂が彼らの行動を見て冥福を得ることを望まれたのだ。われわれが新しい肉体を得て国への奉仕に協力するその時までにはインドの政治状況は完全に改善されているだろう。人民の大半はよく教育されていることだろう。田舎の人たちも自分たちの義務を弁えるようになってきていることだろう。

枢密院に上告して私は無駄なことをしたわけだが、それにも一つ特別なわけがあった。上告した目的はいずれも死刑が私たちに対する適当な刑罰ではないと主張することにあった。というのは、誰の撃った弾で人が死んだのか判らなかつたからである。もしも強奪を行ったことの責任ということで死刑が下されるのであれば中央裁判所の下した判決によっても認められているように私が諸々の強奪事件の責任者であり首謀者であり州の代表者でもあったのだから死刑は私のみに下されるべきであった。他の三人が死刑に処されてはならないはずだ。それ以外の刑はすべて受け入れていたであろう。だが、どうしてこういうことになったのか。私はイギリスの裁判所についても試してみても同胞に先例を遺しておきたいと願ったのであった。もしも政治に関連した裁判が行われる際には間違ってもイギリスの裁判を信用しないことだ。その気になれば雄弁に抗弁するがよい。さもなくば、私の意見ではイギリスの裁判所では決して抗弁せず何ら弁明しないことだ。カーコーリー事件の裁判で教訓を得て欲しいと思う。この裁判にはあらゆる事例が存在する。枢密院へ上訴した特別の意味は処刑の期日を遅らせて青年たちがどれほどの気概を持っているのか、同胞がどれだけ協力することが出来るのかを試してみたからである。このことでは絶望的な失敗をした。そうすれば、他の3人の死刑も免除しなければなるまいし、もしそうしなければ私がそうさせようというつもりであった。私は幾度も脱獄を試みた。だが、外部からは如何なる支援も得られなかつた。自らがこれほど大きな革命運動と陰謀組織を築いた国で私の命を救うためにただ一挺のレボルバーさえ手に入れることが出来なかつたということに私の胸は衝撃を受ける。ただ一人の青年も救援¹² にやって来れなかつたのだ。ついに絞首刑を受けるのだ。絞首刑になることは私にはいささかも悲しくはない。神はこれを望んでおられるのだという結論に達したからである。しかしながらそれでも私は青年たちに丁重に申し上げておきたい。なすべきことについての正しい知識を得るまでは間違っても如何なる革命運動には参加しないようにすることだ。もしも国への奉仕の気持ちがあるのであれば、開かれた形の活動を介して力の限り活動されたい。さもなくば君たちの犠牲は役に立つまい。他の方法によればそれ以上の奉仕活動が可能となり一層有益なものとなるであろう。

状況が悪ければこのような活動での努力はしばしば無駄なものとなる。相手の為になると思っ
て行うことなのにその相手から名誉を汚され、ついには苦悶のうちに命を捨てなくてはならな
くなる。

同胞への私の最後の願いは、何を行うにしても協力し合って国のために行動していただきた
いということだ。そうすれば万人が幸せになろう。

おおビスマイルよ、ローシャンよ、
おおラハリーよ、アシュファークよ *13
暴虐の嵐にたとえ散ろうとも
赤き血潮の流れより生まれ出る人限りなし *14

私が好みそして折りにふれて暗唱した詩歌の一部もここに記しておきたいと思う。 ¹⁵

(註)

*1 処刑日 1927年12月16日にビスマイル自身はゴーラクプル刑務所での自分の処刑日時
をこの通り記しているが、R.C.Majumdarによれば、12月18日となっている。M.Guptaに
よればやはり12月19日となっている。

*2 Sir William Sinclair Marris (1873-?) インド政府内務相

*3 パンディット・マダンモーハン・マラーヴィーヤ (1861-1946) 連合州出身の教育者、
ジャーナリスト、弁護士、政治家。ヒンディー語ジャーナリズムの振興、ヒンディー語の振興
及び地位向上運動、パナーラス・ヒンドゥー大学の創設、ヒンドゥー・マハーサバーの結成な
どにも尽力した。1910年から中央立法参事会の議員を務めた。

*4 ヴィジャヤー・ダシャミー祭 インド暦第7月(陽暦9~10)アーシュヴィン月の白半
10日に行われるヒンドゥー教の祭礼。ラーマのラーヴァナに対する勝利を祝う。ダシャラー祭。

*5 爆弾事件 カルカッタ近郊ダクシネーシュワルなどでの大規模な爆弾製造工場の摘発は
1925年11月10日に行われた。

*6 ダクシネーシュワル爆弾事件で服役中の Hindustan Republican Association のメン
バー Pramod Chaudhari が Alipore Central Jail で Supecial Superintendent を殺害した事
件か。

*7 法定委員会 サイモン委員会 (Simon Commission) イギリスは1919年のインド統治
法改定のための調査を目的とした評価委員会(法定委員会)を予定より2年繰り上げて1927
年11月8日に任命したが、これにはインド人委員は一人も含まれていなかった。そのため翌
年のサイモン委員会の訪印はインド側の諸党派からの激しい反対・抗議運動を招くことになっ
た。’27年12月には全政党会議が委員会のボイコットを決議している。ビスマイルの表現では
Royal Commission の訳語と思われるシャーヒー・コミッション शाही कमीशन とある。

*8 バーケンヘッド (Frederick Edwin Smith Birkenhead) (1872-1930) イギリスの法律家、政
治家、当時のインド担当大臣。

*9 諺話 イスラム教徒が断食月の長さに閉口して神様のところに期間の短縮を願い出たと
ころ代わりに毎日の礼拝の回数を増やされたという諺話がある。僅かな苦勞を避けようとして
かえって大きな苦勞を抱え込むことのたとえ。

*¹⁰ マドラス大会 1927年12月26～28日 インドの独立を最終目標と宣言し全政党会議を開催し憲法草案の作成を提唱した。

*¹¹ プラートリ・ドゥヴィティヤー祭 ヤマ・ドゥヴィティヤーともバーイー・ドゥージュとも呼ばれるヒンドゥー教徒の家庭内での祭り。本来は兄弟は命がけで姉妹を保護し姉妹は愛情を報いることにより兄弟と姉妹の間の絆を強くするものとされる。インド暦8月（陽暦10～11月）白半2日に祝われる。

*¹² 救援 M.グプタによると1926年には拘置所から裁判所に被告を移動させる際に襲撃を行い被告たちを奪還しようとの計画がバガット・シン、チャンドラシェーカル・アーザードらによって練られたが諸般の事情により実行されずに終わった。(M.Gupta, op.cit., p.261)

*¹³ M.Guptaによるとビスミルは当日の朝母親に宛てた手紙を認めその中に国民へのメッセージを残した。部屋を出る際には「バンデーマータラム（母国万歳） वन्दे मातरम्」「（母なる）インド万歳 भारत माता की जय」を唱えた。次が遺詠であるという。

わが姿消ゆるとも わが望み尽きるとも 天地の栄え弥増せ
わが息の根の留まるかぎり わが身に血潮流るるかぎり
汝が名のみわが唇に 汝が光のみわが眼まぐ

処刑場に到着すると次のように叫んだ。 ‘I wish the downfall of British Empire’

遺骸はゴラクプルの中を進み香華が手向けられ盛大な葬儀が行われた。(M.Gupta, op.cit. p.247)

ローシャン・シン रोशन सिंह はシャージャハーンブル県ナワーダー(नवादा)出身のクシャトリアで妻は二人あったという。政治活動に入る前は一般の犯罪人でもあったが、非協力運動が始まってからはシャージャハーンブル県とバレーリー県の農村部を回って非協力運動の宣伝活動をしていた。彼が処刑6日前に友人に宛てた次の手紙がある。 「多分今週中に絞首刑を執行されるものと思う。君の親愛の情に心から感謝する。私のことを決して悲しまないでくれたまえ。私の死は喜びの元となるものなのだ。人はこの世に生まれたからには死ぬのが定めである。この世に生まれた者は悪事を働いて名を汚さぬことと死に際に神を念じることを忘れてはならない。神様の慈悲を賜り私にはこの二つともがそろっている。したがって、私の死は何ら悲しむべきものではない。私はこの2年間家族と離れている。この間私は神を念じる十分な時間を授かったので妄念はなくなり何一つ思い残すことはない。この世の苦難に満ちた旅路を歩き終え安楽の待つ世界に向かうところだ。経典には正義の戦いにおいて命を捨てる者は森の中で苦行を行う人と同じ解脱を得るものとされているのだ。以下略」

処刑執行の当日、イラーハーバード県刑務所において刑務官に呼ばれるとローシャンはバガヴァッド・ギターを手に持ち微笑を浮かべて歩き出した。処刑台に上がるとすぐ「バンデーマータラム」と叫びオームを念じながら宙に浮いた。人々は遺骸を火葬するため受け取り市街を葬列を作って進もうとしたが当局が許可しなかった。遺体は葬列を作らず静かに火葬場に運ばれアーリア・サマージ式で荼毘に付された。(M. Gupta, op.cit.p.250)

アシュファークは公金奪取の計画そのものに政府転覆の意図を公然と表すものとして、また、組織に危険をもたらすものとして反対した。犯行現場でも彼は列車に同乗している軍人や警備兵による危険を察知して実行の中止を訴えた。M.Guptaは血気にはやった自分たちを反省している。(M.Gupta, ibid. p.242)

アシュファークの処刑は12月19日にファイザーバード刑務所で行われた。 アシュファーク

クは聖コーランの入った包みを肩から下げイスラム教の巡礼者がするように「アッラーよ、御前に参りました…」で始まるタルビヤを唱え、また、「アッラーのほかに神なく、ムハンマドはアッラーの使徒である」という信仰告白を唱えながら処刑台に近付きそれに口づけしてから「わが手は人の血で汚れたことはない。吾にかけられた嫌疑は誤りである。神の御許で正しい裁きがあろう。」と述べ、アッラーと唱えながら処刑された。遺骸はシャージャハーンブルまで鉄道で運ばれた。途中ラクノウ駅で目撃した人の話では死後 10 時間も経っていたが大変安らかな表情であったという。次が遺詠である。

われもまた 非道に倦みて ファイザバードの牢屋より黄泉の国へと旅に出る

(M.Gupta,P.249)

*14 この詩はビスミルが友人の一人に宛てた手紙に記されているとのことでありさらにこの後に次の 1 聯がある。

益荒男どもの艱難は国の誇りを弥増さん／苦しみの影永久に消えなん

(M. Gupta, p.240)

*15 以下にビスミルが愛唱したブラジ・バーシャーによるものも含めヒンディー語、ウルドゥー語の新旧の詩歌 12 篇が記されている。(省略)

完

母御は再び泣き崩れた

アシュファークとビスミルの住んでいたこの街は学生の頃の私には夢に見る町であった。やがて革命黨員となってからはカーコーリー事件の共犯証人を探し求めてかなりの間土埃を浴びながらこの街を歩き回った。それはともかくこの街に到着するとまずはビスミルの母御を訪ねて御挨拶を申し上げたいと思った。

随分探し回ってようやくのことで家の所在が判明した。小さな家の一間に世を忍ぶ苦難の母御は人生の最後の時を刻んでいた…人に知られることも省みられることもなく。

近付いて跪き母御の足元に手を触れて挨拶をした。母御は視力がほとんど失せてしまっているため相手が誰とも判らぬまま私の頭に手を触れ祝福の言葉をかけて挨拶を返すと私に尋ねた。

「どちらさんですかね、あなたさんは。」

どう答えたらいいのか言葉が出てこない。重ねての問いかけである。

「あなたさんはどちらからおいでなされたのかね。」

今度は氣力を振り絞って身の上を明かした。

「ゴーラクプル刑務所へご一緒に連れて行っていただきましたね、お母さん。倅だと言って。」

母御はぐいっと私を抱き寄せると私の髪を撫でながら尋ねた。

「ああ、お前さんはあの時の倅ですかね。そうですかい。今までどこに過ごしておいでたのかね。あたしやいつもお前さんのことを思い出しておりましたのじゃが急に来て下さらんようになったもんでお前さんもやっぱり家の倅と同じ道を歩んで行きなされたのかと思っていたわけですがね。」

母御の胸は熱い思いに溢れた。ずいぶんと古い傷跡に一時に痛みが走ったのであろう。次々と思い出されるのは幸せであったあの頃のこと、ビスミルのこと、絞首刑のこと、絞首台のこと、縛り首の綱のこと、死刑執行人のこと、若い息子の茶毘のこと。そしてどれほどの思い出が光を失った母御の目から涙を溢れ出させたのであろうか。母御は泣き崩れた。

話題を変えようと思って尋ねた。

「ラメーシュ君（ビスミルの弟）は今どこにいますか。」

私の問いが今度は母御の目から大雨を降らせることになろうとは知る由もなかった。母御はまたしても激しく泣き崩れた。幾年もの月日せき止められていた水が堰を切って洪水となって溢れ出たのであった。しばらくして氣を取り直した母御は語り始めた。

事件の直後には世間の人たちは警察を恐れて家にも寄りつかなくなった。老いた父御には何もきまった収入の途はなくなっていた。数年後にラメーシュは病気になったが薬も治療も十分には受けられず病状は重くなるばかりであった。一切の家財道具は売り払ったにもかかわらず十分な治療は受けさせてやれなかった。食事での養生も及ばず薬石の効もなく結核の餌食となった息子はある日母親を息子のいない女性にしてあの世へと旅立った。父御は親切を見せかけるだけの世間にすっかり嫌気がさして極度に神経質になった。家財は一切合切売り払われて

しまっていた。やがて飢えに苦しんだ父御も母御をこの世に頼る人もいないひとりぼっちにしてあの世へと旅立って行った。

命の糸を繋いで行くにはほんの僅かな食べ物でも腹にかき込まなくてはならないものだ。やがて家の一部を間貸しすることになった。警察が恐ろしくて借家人が来ない。そしてやってきたのはなんと警察の関係者だった。世間は警察と手を結んだと言って謗った。そのことで母御のもとにただ一つ残されていた名誉までもが失われてしまった。長男を失い次には愛しい次男を失い最後に残った名誉すら失ってしまったのだ。

母御の目から涙が溢れ出るのを見て絞首刑が執行されたあのゴーラクブル刑務所での出来事と思い出された。カーコーリー事件の4人の被告にはすでに生死を決する判決が下っていたのだ。

To be hanged by the neck till they be dead.

「絶命するまで首を吊るすべし」

絞首刑執行の前日が最後の面会日だった。知らせを受けて父御はゴーラクブルに到着した。母御のか弱い胸にはこの打撃は到底耐えられないであろうとの思いから父御は母御を伴わずに到着しておられた。早朝われわれが刑務所の門前に到着してみるとなんと母御はすでにそこに待ち構えていられるではないか。刑務所構内に入る際に私をどうやって連れて行くかが問題となった。その時、母御の勇氣と機転とを目にして一同は驚嘆した。私に口を利くなど命じると母御は私を伴って歩き出したのだ。そして係員の質問に対しては「私の妹の倅」だと言っていた。われわれは中に入った。

母御を見てビスミルはわっと声をあげて泣き出した。だが母御の目には一滴の涙もなかった。そして母御は大きな声で言った。

「あたしゃお前はイギリスの御上だってお前の名前を耳にしたら震え上がるほどに勇ましい息子だと思っていたのに。まさかお前が死ぬのを怖がるとは知らなかったよ。泣いて死ぬぐらいなら無駄にこの仕事にかかわったもんだよ。」

ビスミルは母御を安心させようとして死ぬのが恐ろしいための涙ではなくて母親への思いから涙が流れ出たのだと話した。

「おっかさん、死ぬのが怖いからじゃないんだよ、ほんとに。それだけは信じておくれ。」

母御は私の手を引っ張ると前へ押し出しながら言った。

「この人はお前の仲間だ。党のことはこの人に何なりと話していいんだよ。」

その時母御の姿を見て刑務所の幹部職員たちまでもが、この勇ましい母があればこそこの勇敢な息子がいるのだと言わざるを得なかった。

あの日は母御が時間に勝利を収めたが今日は時間が母御を打ち負かしたのだ。打撃に続く打撃が母御の鋼の心を脆くしてしまったのだ。目に入れても痛くない二人の愛し子を失った母御の両の目がくれてしまっても驚くことがあろうか。そこには来る日も来る日も黒雲から雨が降り続くことだろう。

つくづくこの世は摩訶不思議なところだと思う。一方では「ビスミル万歳」のスローガンが叫ばれ選挙の票を集めるためのビスミル顕彰門建設の話があるかと思えば、他方ではビスミルの家族の影さえも避けようとする世間がある。一方では息子を失った未亡人の母御に不名誉な悪罵の打撃が加えられる。他方では独立運動殉難者への支援基金の名目で数千ルピーの寄付金

が集まるかと思えば、ビスミルの弟は食費や治療費にすら事欠き肺病で悶死した。これが烈士や殉難者の鎮仰というものであろうか。

「お母さん、またお伺い致しますからね。」と言って辞去したが、心には計り知れない重荷がずしりとのしかかってきた。

シヤージヤハーンブルにて

1946 年 2 月 23 日

(註)

*1 シヴ・ヴァルマー バガット・シン、チャンドラシェーカル・アーザード、スクデーヴらと Hindustan Socialist Republican Association (Army) の結成に参加し連合州の組織責任者になった。後にバガット・シンやスクデーヴが絞首刑に処せられたラーホール陰謀事件の裁判の特別法廷で 1930 年 10 月に他の 6 名と一緒に終身流刑に処せられた。

*2 शिव वर्मा, मेरी डायरी का एक पृष्ठ

【追記】 編者の B. チャトゥルヴェーディーの記しているところによるとこれが書かれた 1 年半後ぐらいに連合州政府からビスミルの母への月額 60 ルピーの独立運動殉難者遺族年金の支給が開始された。彼女の死去の年月は特定出来なかったが恐らくそれから 7~8 年後のことであった。また、これが出版された 1958 年時点でビスミルの唯一の親族は未亡人になって生活に困窮している妹一人と小学校 5 年終了の学歴しかなく自動車の運転助手をしている彼女の息子のみである。

マンマトナート・グプタ「ラームプラサード・ビスミル自伝」について

17歳の学生の身でカーコーリー事件に直接参加した一員としてマンマトナート・グプタ *मन्मथनाथ गुप्त*(1908 - ?) は懲役14年の禁固刑に処せられたが、チャンドラシェーカル・アーザードを *Hindustan Republican Association* に結びつけた人物の一人でもあったようだ。出獄後の1939年に『インド革命運動史』(*भारतीय क्रांतिकारी आन्दोलन का इतिहास*)を著したが、それは出版直後に発禁処分を受けた。この改訂版は1960年に刊行された。独立インドにおいてはジャーナリスト・雑誌編集者・作家として活躍した。彼は革命運動の先輩であり後に立場を異にしたシャチンドラナート・サーンヤール(ショチンドロナト・シャンナル *Sachindra Nath Sanyal*)からすでに1939年に揶揄気味に「同志」と呼ばれているのでかなり早くから共産党員になっていたものと考えられる。

彼の考えによれば、インドの武力革命運動は武装闘争ということ自体ではなく独立インドの進むべき道を社会主義的社会的建設という方向に定めて行った点に歴史的意義を有する。ただし、'20年代、'30年代の武力革命運動が社会主義的展望を持つに至った先見性によってそれに先行する時代の運動が過小評価されたり等閑視されてはいけぬ。また1942年の「インドから去れ」運動はガンディー主義的運動ではなく革命運動から発したものでありそれが一面でガンディー主義的大衆運動と繋がったものであったというのが彼の主張である。

本訳書の「はじめに」において触れたことだが編者のバナーラシーダース・チャトゥルヴェーディーにラームプラサード・ビスミルの自伝を旧版のまま手を加えずに刊行すべきか否かについての意見を求められたのに対してグプタが述べている見解^{*1}をここに紹介しておくべきであろうと思う。

編者には、ビスミルがベンガル人幹部との対立について述べている部分をそのままにしておいていいものか否かについて躊躇する点があった。グプタは次のような論点から旧版のまま再刊するように進言した。

第一の理由はビスミルは国家・国民のために一命を賭したのであるからみだりにその内容を改変すべきではないということである。第二の理由はビスミルのベンガル人幹部との対立は次のように理解すべきものであることである。すなわち、この事件のベンガル人幹部とされる人は二人である。一人はラスビハーリー・ボースの右腕とも呼ばれ1915年にはいわゆるバナーラス陰謀事件の廉でアンダマン島への終身流刑に処せられたことのあるシャチンドラナート・サーンヤールであった。大戦後の'20年2月20日に大赦により釈放された彼は非協力運動には参加しなかったが非協力運動が終わりを告げた後、再び革命運動に入った。'25年に反乱扇動文書の配布により逮捕された後カーコーリー事件でも訴追され再び終身流刑に処せられた。第二のベンガル人幹部はヨーゲーシュチャンドラ・チャタルジー(ジョグシュチョンドロ・チャタルジー *Jogesh Chandra Chatterji योगेश चन्द्र चटर्जी* 1895-1969)であるが、革命運動家としての古くからの活動歴がありベンガル(ダーカー)のアヌシーラン・サミティ(ダッカ・オヌシロン・シヨミティ)から北インドの革命運動の組織化のために派遣されていた。その後この組織は本部の意向もありサーンヤールの組織に統合された。この統合された組織は *Hindustan Republican Association* となりその代表がサーンヤールであった。チャタルジーはカーコーリー事件の裁判により終身流刑となったが、12年後に釈放された。しかし第二次大戦中は拘禁され'46年までその状態が続いた。1958年時点では国会議員であった。

この二人の他にベンガル人幹部としてカーコーリー事件で懲役 10 年の刑を受けたスレーシュチャンドラ・バッターチャーリヤ (सुरेशचन्द्र भट्टाचार्य) とゴーヴィンドチャラン・カール (गोविन्दचरण कार) とがいた。バナーラス出身ながらベンガル人の M. グプタを含めベンガル人は若手があと 6 人いた。その内 1 名のラーजेन्द्रラ・ラーヒリー (राजेन्द्र लाहिड़ी) はビスミルと共に絞首刑に処せられた。

M. グプタによれば、党内には組織固めに重点を置こうとしたグループと武装化と闘争を重んじようとしたグループとがあり緊張と対立関係があった。ビスミルは後者のグループの指導的な立場にあった。

裁判において最初強力な弁護団による支援を見て勝利の確信を持てなかった検察側とダーカー陰謀事件^{*2}で検察側との話し合いで被告側が極刑を含めた重罰の可能性があったのを軽減してもらった先例を踏まえてこの事件の被告側の代表格であったサーンヤールが検察側と話し合いを進めていたのは事実であった。(रामप्रसाद 'बिस्मिल', p. 159) サーンヤールは刑死者が出ないように話し合いをしたのだから検察側はその後自信を得てその話し合いを中断した。そのことをサーンヤールは誰にも知らせなかった。グプタはサーンヤールを最高幹部、チャタルジを顧問格と認めておりその意味でビスミルの怒りが二人を筆頭にベンガル人たちに向けられているのは仕方ないことだとする。ただ、覚悟の出来ていたビスミルには話し合いの失敗を伝えるべきであったかも知れないが、他にも極刑を受ける可能性のある人たちがいたのだから前もってその人たちにそのような情報を告げる必要はなかったとの判断を示している。その上でグプタはたとえベンガル人が過ちを犯したとしてもそれを身最良とか郷土最良とかに結びつけるべきではなかったと厳しい表現で批判している。また、4 人の幹部以外のベンガル人はベンガル州ではなく連合州の出身者であったのだからベンガル人対非ベンガル人という構図は成り立たないと重ねて述べている。

(註)

^{*1} मन्मथनाथ गुप्त, पृष्ठभूमि, अमर शहीद रामप्रसाद 'बिस्मिल', दिल्ली, 1958

^{*2} ダーカー陰謀事件 1905 年に結成された Pulin Behari Das を指導者とするダッカのオヌシロン・ショミティのメンバー 36 人が政府転覆を企図した組織として反逆罪に問われ、3 名が終身流刑、33 名が禁固刑に処せられたが、デーシュバンドゥ・チッタランジャン・ダース (C.R.Das) による高等裁判所での控訴審での尽力により 3 名の終身流刑が 6 年間の禁固刑に軽減され残り 11 名のみが有罪となった事件。

追記 サーンヤールは二度目の終身流刑から戻り 1938 年 9 月に彼の『幽囚記』(बंदी जीवन)の第三部となる部分を執筆し刊行しているが、時代の状況が許さなかったためであろうと思われるがラームプラサード・ビスミルについては知り合った経緯やビスミルの対人関係についてなど極めて簡略に述べているだけでカーコーリー事件については全く言及していない。

(訳者)

サーンヤールの位置

ラースビハーリー・ボース（ラシュビハリ・ボース）の右腕とされたシャチンドラナート・サーンヤール（ショチンドロナト・シャンナル Sachindranath Sanyal）についてはラームプラサード・ビスミルの自伝（「訴追」註⁶）とマンマトナート・グプタの「ラームプラサード自伝について」の中ですでに言及した。彼は1920年2月に終身流刑地のアンダマン島から大赦で釈放されて故郷に戻ったが、やがてインドの武力革命運動の再建に取り組み始めた。しかし、反乱扇動パンフレット郵送の罪で1925年に逮捕されさらにはカーコーリー事件の首謀者の一人として二度目の終身刑に処せられた。この時代の背景を理解する上でラームプラサードの自伝にも言及されている同志であり同時代の代表的革命運動家であった彼の活動と思索の跡を彼自身の言葉で辿ることに少なからぬ意味があると思う。

彼の「幽囚記」（बन्दी जीवन, दिल्ली, 1963）は全体としては三部からなるが、その第一部は1922年に刊行された。その後第一部と第二部が併せて刊行された。（その第四版は1938年9月）しかし、その第三部は一部分を除き1963年に初めて刊行された。なお、以下の内、（一）は第二部に（二）は1938年の本書の第四版の序文に、（三）と（四）は第三部に収められている。

（一）革命の試みは何故失敗したのか

インドの革命家による革命の試みは何故失敗したのか。その理由を知るにはその前に彼らが一体何を望んでいたのかを知るべきであろう。彼らの目標を十二分に知ることなくどこまで成功を収めたのか、どこまでが失敗だったのか、その理由が何であったのかを知ることは困難であろう。したがって、彼らの失敗の原因を探るのに先立ち彼らが志向したものが何であったのかを論じなくてはなるまい。

インド人革命家たちが志向したものについてはここで論じることが出来ないほど数多くの事柄がある。と言うのは、これを論じるに当たっては、インドという国土に革命の観念が出現しそれが次第に変化してきた歴史についてどうしても論じなくてはならないからであり、また、論点から大きく離れてしまうほどに大きな論考になるからである。ここでは差し当たりこの問題を説明するのに必要なだけの範囲に限定して論じたいと思う。

インドの革命組織の内部にどれほど意見の対立があったとしてもインドが完全な独立を獲得すべきこと、すなわち、インド以外の如何なる民族もインドのことを思ってインドの安寧のためにインドの如何なる事柄にも干渉すべきではないことについては意見の一致を見ている。インドにとって如何なる政体が一番望ましいかを考えてそれを推進して行く主体はインド人でしかないのである。インドの社会が理想としているものは何か。インドの抱えている社会問題をどのように解決するのが最も望ましいのか。インドは外国とどのような関係を築くべきか。インドの産業と通商をどのように推進すればインドと世界のためになるのか。これらすべてについてインド人自身がその適否を判断すべきであり外国はこれに全く干渉すべきではない。これこそがインドの革命家たちの宿願であったのだ。インドの自由独立はイギリス帝国の中にある限りどのようにしても完全無欠なものではあり得ない。子供が自分の親を一点の曇りもな

く見分けるようにインドの革命家たちもそのことを知っていたのだ。だからこそインドの革命家たちのあらゆる行動の根本にはインドがあらゆる他民族の干渉の手から完全に自由になることが出来るような力を備えるようにするという考えがあったのだ。この他民族の中でイギリス人は例外ではないのだ。いや、このイギリス人を相手に最初の戦いが始まるのだ。直接的にインドのあらゆる希望や宿願、インドのあらゆる活動と密接な関係があるのはイギリス人に他ならないからである。インドの革命家たちはインドをこのように独立させるのに一番中心となる手だてはインドのクシャトリヤ的力、すなわち、武勇の力を覚醒させることだと考えていた。この武勇の力という理想を中心に据えて我が国の革命家たちはその行動力を整えてきたのだ。マハートマー・ガンディーがインドの国政の舞台に登場するはるか以前からインドの革命家たちはこのクシャトリヤ的理想とブラーフマン（ブラモン）的理想とを巡ってずいぶんと論じ合い議論しなければならなかった。今はここにそれについて哲学的な考察を加えたり分析をする場合ではないのでそれはいずれ時間と機会が得られれば別の場所で行いたいと思う。そうではあるが、簡潔にこの点について二、三言及しておいても不都合ではなかろうと思う。実のところブラーフマン的理想とクシャトリヤ的理想との間にはなんらの区別はないのである。ブラーフマン的理想の究極の到達点とクシャトリヤ的理想の究極の到達点とは全く同じなのだ。すなわち、クシャトリヤの本分を生きる人が生得の智慧によって生を営んで得るものとブラーフマンの本分を生きる人が生得の智慧によって生を営んで得るものとは全く同一のものである。すなわち、この世界は最高存在であるブラーフマンの顕現したものである。最高存在のブラーフマン自体が時に属性を持つサグナの形で、時に属性を持たないニルグナの形で顕現するのである。常に転変して行く宇宙もそのブラーフマンそのものが属性を持って顕現したものである。また、それは表現不可能なもの、言葉では明らかにすることができないもの、心や知力が衝突してその中に入れずに戻ってくるもの、如何なる表現によっても表現し得ないもの、すなわち、最高存在たるブラーフマンの無属性のものである。その無属性のブラーフマンと有属性のブラーフマンとの間にはなんらの相違も存在しないのだ。その知識を獲得することこそがブラーフマン的理想とクシャトリヤ的理想の究極の目標であった。ヴェーダーンタ哲学のこの理想に従うならばブラーフマン的理想とクシャトリヤ的理想との間には文字通り何ら相違はないのである。だが、ヴェーダーンタ哲学のこの真理をだれも受け入れない。インドのいずれの宗派も有属性のブラーフマンの可能性を認めない。その人たちは言う。属性を超越したブラーフマンは様々な形姿ではあり得ないのであってブラーフマンは唯一の存在であり一切は無常である。ブラーフマン以外の如何なるものも実体は存在しない。現象的に存在するように見えるがそれは錯覚に過ぎずそれこそがブラーフマンの現出する幻影であり虚妄なのである。この幻影がどこから来たものか、その正体が何であるかについては語り得ないし表現できないとして彼らは世界を常なきものと呼ぶ。そうしてそのことで彼らの生の最高の姿はこの転変する世界を捨てて世俗の世界から離れて人氣のない森林や山岳、洞窟に住んで、つまり世俗を離れて神を拝むことになる。ブラーフマンによって律せられているヒンドゥー社会ではこれこそが永遠の最高の理想とされてきた。これは多数の人の信じるところでありこの理想をこそ人類社会の最高の地位に位置づけるべきものとする。彼らはブラーフマンの本分を支持する。この理想こそ私がブラーフマン的ダルマと名づけて言及したものである。他方、私がクシャトリヤ的ダルマと呼ぶものの中では常に転変する生類の世界を虚妄や幻影と呼んで無視することはない。そこでは生類の世界を、この転変する世界を無属性のブラーフマンそのものと考えなのだ。理想の達成のためにこの転変する世界を

無視するのではなくこれを放擲するのではなくこの世界の善と悪、快と不快、殺生と不殺生、愛と憎を等しいものと考えこのすさまじい戦場にあつてこそブラフマンそのものが生類となつたものでありこの生類の世界の中に存在する善悪はすべてブラフマンそのものでありこの真理を手に入れるために世俗に執着する。すなわち、世俗の行為に執着して、すなわち、世俗の行為をアートマンがブラフマンと同一であることを知るジュニャーナ・ヨーガ（知識ヨーガ）に結びつけ、ダルマにより課された義務を实践することによりカルマ・ヨーガ（行為ヨーガ）の道に進む手だてをすることになる。それを私は正にクシャトリヤのダルマ（本分）と呼ぶのである。この二つの理想の間には文字通り激しい対立が続いて来ている。一方の理想像が仏陀であり他方の理想像がマハーバーラタの戦場に立つたクリシュナである。一方の理想像はチャイトニヤ^{*1}であり他方の理想像はグル・ゴーヴィンド・シング^{*2}である。一方の規範に従うならばこの世界を無常の幻影による知と呼んでこれを無視しなければならない。他方の規範を採るならばこの世界を常に新しい姿に整えて拝まなくてはならない。移り変わる時間の中で創造に向かう抑制のない衝動でこの世界を破壊し粉碎して再び新規に作り出し建造しなければならない。時には知識の光で世界を照らし出し、時には刀の刃で血を流れ出させて大地を染め、時には愛の流れの中で大地の美女を水浴びさせこの世の美を類なき技巧で様々な色調に染め上げ滑らかに且つ艶やかにして人を驚かせなくてはならない。この二つの理想の対立はすべて単に弁舌の巧みさとか言葉の対立で終わるものではなかった。自分が勝れていると判断した一派はその理想の実現に全生涯を費やした。どれほどの多くの人たちが家族を捨て世俗の世界を捨て去ったことであろう。どれほどの人たちが家族や役人たちの与える苦しみと耐え人生の楽しみを弊履の如く捨て去り苦難の中に人生を送ったことであろう。ともかく革命家たちは現代においてクシャトリヤの理想を最高の地位に位置づけたのだ。だからこそこのクシャトリヤの理想をばインドの大衆の中に広めようと努めているのだ。

このようにして革命家たちはインドの最も貧しい一般大衆までも意識していたのだ。しかし、そのような人たちにまで自分たちの願望をどのようにして伝えるのであろうか。実際にどうすれば一般大衆の願望は破壊されずに済むのか。社会の持てる者と持たざる者との間、我が国と外国の事業家たちとの間に様々な権益を巡る対立が生じてきているし権益の争いによって様々な騒乱、格差、不法行為、暴力、激烈な流血事件が発生してきている。それらすべての対立を解決しなければならぬ。本当の革命家であるならば、国家と同様社会をも粉碎して新規に創り出さなければならない。これらすべてのことをインドの革命家たちは十分に理解出来ないでいる。これらすべての課題に注意を向けながら将来の国家像を本当に何らかの独特の形に作り上げなくてはならぬ。彼らはこのことを慎重に考えてこなかった。これらのことはすべて独立達成後に考えればよいとしてきた。しかしながら、革命家たちの大半はインドの政体は共和制を基にするべきだと考えてきた。この過程において大半の革命家は王侯の存在を認めてはいなかった。大半と言うのには訳がある。もしインドのだれか自主独立と呼ばれている王侯がインドの独立獲得の戦争に心身を捧げるならばその人をインドの国王の地位につけることが出来るし、その場合にはインドの政体はイギリスの議会に倣って組織することが出来ると考えていた一部の人がいたからである。マハーラーシュトラのアピナヴァ・バーラタ^{*3}（「新インド」）という秘密結社から‘Choose oh Indian Princes’というパンフレットが秘密裡に配布されたことがあった。この中でバローダーのガーイクワール家^{*4}の王が明確に言及されており上に述べた趣旨が広く伝えられたことがあった。パンジャブのシク教徒の中にはインドに再びカール

サー王国 *⁵ を建設しようという意向の人が少なくなかった。また、革命活動家の大半はヒンドゥー教徒であったのでインドが独立することはヒンドゥー王国の再建という意味を持つものであった。しかしながら、この気持ちは徐々に消え去って行きついにはヒンドゥー教徒の自立を信賴して活動を進めていたのだが、独立インドという設計の中ではインドの如何なる民族をもだれか他の民族に従属させる計画はなくなった。すなわち、インドの独立のためにたとえヒンドゥー教徒が中心になって努力しようとも独立インドのすべての民族は平等な権利を持ち不可侵の權益を持つものである。これこそがインドの革命運動家たちの政治上の理想であった。

我が国のほとんどすべての人がインドの革命運動は完全に失敗したと異口同音に言っている。その人たちの説くところでは、現代の新しい科学の発達により如何なる政治勢力に対しても民衆が武力を用いて反乱を起こすことは出来ないというのだ。また、その人たちによれば、イギリスのような敵を武力によって打破して独立を獲得しようと考えることさえ全く狂気の沙汰なのだ。そのため彼らはインドの革命運動家たちを正気ではない人、無分別の人、あるいは、愚か者と考えていたし今もそう考えている。もちろん、これら批評家たちの言葉通りであるならばインドは未来永劫に亘り属国のままでいなければならない。何故かと言うにそのような批評家たちはインドが完全独立を達成する何らかの方途も示し得なかったからである。また、現代においてさへロシアやドイツの革命組織が強力な政権の武力を打ち破ったのでこのことを認めない術も存在しないのである。だからこそ、現代において如何なる民衆の力も強固な政権の軍勢力を革命により武力により打倒することは出来ないというのも理屈に適っているとは思えないのである。また、インドの革命組織とロシアやドイツの革命組織とを比較するならば、ドイツやロシアの革命家たちは同胞に対して武器を手にとらなければならなかったことに特に注意を向けなければならない。ところが、外国勢力との戦いとなるとすべての同胞の同情と支援が得られる十分な可能性があるものだ。したがって外来勢力に対して反乱を起こすことは内戦を起こすことよりも幾つもの点で容易である。そうではあるが、インドの革命の試みが失敗したのに対してロシア人とドイツ人の革命が成功を収めたことには間違いない。これが事実だとしてもこの失敗の原因については私の意見は他の多くの人の意見とは異なっている。私はインド人が実際に革命の道に進むべきかどうかについて言っているのではない。ここで私は単に反対意見の人たちの主たる論理を分析して示そうとささやかな努力をしたまでのことである。読者諸氏には私が過去の出来事を述べていることを心に留めておいていただきたい。また、過去について論じることだけが歴史を書く際には正しいのだ。だから私は将来どうなるだろうとかどうなるのが正しいとかについて論じる者ではない。とまれ話を元に戻すとインド人の革命運動は何故失敗したのかと言うことである。

多くの人が、時機が熟していなかったからインドの革命の試みは失敗したのだと言っている。すなわち、革命の試みを成功させるのに求められる状況が今もなおインドには存在しないのだと言う。実際、インドの民衆は革命を起こすことを望んではいないからこそこの試みは失敗したのだというわけだ。事実インド人は独立を望んでいない。属国の苦しみを実際に感じていない。だからこそ革命への道を進まないのだ。これが多くの人の革命失敗についての最も一般的な理由である。

しかし、私はインド人が実際に独立を望んでいないとか服従の苦しみを感じていないのだとは思わない。人がその独立獲得のために献身すること、それに求められる勇気といった徳目がインド人には全く欠けているということを認めない何らかの手段もない。しかしながら、イン

ドの無学な大衆はこの革命運動に協力しなかったから革命の試みが失敗したのだという人たちの意見も私には正しいとは思えないのだ。というのは、革命運動家たちは今まで一日たりとも公然と、あるいは、秘密裡にインドの農民や労働者たちにこの革命運動に参加を呼びかけたことがなかったからである。教育ある人たちが一般大衆に呼びかけた際には大衆は幾つもの献身的な行為によりこの呼びかけに応えた。知識人たちが自分たちの義務を認識しながらもなし得ない仕事を無学な一般大衆はしばしば直感的に無意識的・自発的にやってしまうのだ。確かに、無学な人たちは義務に対して長期間献身とか苦勞を受け入れることが出来ないので無学な人たちの考えに頼って何か大きな持続的な活動をするのは不可能である。

また、インド国民の大半の人は無学であるから革命運動の試みは無意味であり国民の大半が無学である限り革命の試みは無駄になるに決まっているという。そういう人たちに対して私はロシアの前例を示して革命運動の首尾・不首尾が民衆の読み書きに依存するものではないと言うことが出来る。

しからばインドの革命の試みは何故無駄になったのか。だが、果たしてインドの革命家たちのこれほどの献身的行為や類まれな勇氣は全く無駄になったのだろうか。その人たちがどれほど苦しみに耐え、どれほどの苦境の中にあってもどのような信念を持って道を踏み外すことなくどれほどの惨苦の中にあっても激烈な打撃に耐え裏切り者の血も涙もない行為にどれほど耐え、またどれほどの敗北の劇痛に耐えながらも決して屈することのない堅固さで繰り返し自分の決断を貫こうと進んだことがみな本当に無駄になったのであろうか。クシャトリヤの理想は我が国では全く尊重されないものなのか。インド人の心から死の恐怖がいささかなりとも去ったことはなかったのか。インドの他の公然活動に対して革命運動はなんらの影響を及ぼし得なかったのであろうか。世界政治に対して世界の文明国に対してインドのこの革命運動は何一つ印象を与えることが出来なかったのであろうか。あるいはまた、この革命運動によって世界に向かってインドの尊厳は少しも増さなかったのか。これに関してはハーバード大学のアイサー教授の『汎ゲルマン主義』、バーン・ハーディーの『ドイツと次の戦争』*6などの書物に読者諸氏が注意を向けて下さるようお願いする。私の言わんとするところをいささかなりとも納得して下さるであろう。

革命家たちの活動によって吉よりも凶のほうが多く生じたのだと大勢の人が語っている。イギリス政府はこの革命家たちのおかげで民衆を苦しめる好機を得るようになり次から次へと一段と厳しい法律を作りインド人の合法的な公開の活動を様々に妨害することが出来るようになったというのである。だが実際はそうではない。合法的な公開の活動が抑圧されるようになってから革命運動が現れるようになってきたのである。また、ローラット委員会の治安妨害関連の報告書の中でイギリス当局が多分図らずもこのようにすべてに亘って論じていることから革命家たちの個々の努力の結果としてその都度イギリス側がインドに政治的な権限を与えてきていることがはっきりと判るのである。

一般的な政治上の権利が意志堅固なインドの革命家たちの尽力により得られたことも多くの人が認めているのは確かである。

それはともかく革命家たちの望んだことは達成されないままである。革命家たちはインドの独立達成を願ったのだったがそれを達成することが出来なかった。革命家たちの主要な努力は無駄になった。

私の考えるところでは思慮深く頭脳明晰な指導者の欠如こそがこの失敗の最大の原因である。

ロシアやドイツの革命運動組織の中には世界的に見て勝れた思想家に数えられるような人が多数いたし現在もある。しかし、インドの革命運動の組織の中には思想家の名で呼ばれるに値する思慮深く器量の大きい人物は一人もいなかった。そのためインドの革命運動の組織はその広報活動を何一つ為し得なかったと言うべきでありそのため然るべき影響を及ぼすことがなかったのである。インドの革命運動の中にはヴィヴェーカーナンドという輝かしい理想像が存在したのであったしインドの革命家たちの大多数がこの偉人から靈感を受けていたのである。しかし、ヴィヴェーカーナンドのような才能に恵まれた人物は目の前の組織の中にはいなかった。オロビンド・ゴーシュやラーラー・ハルダヤールがもしも革命組織の中に踏みとどまっていたならば革命組織の今日の惨状はかなり回避されていたであろう。だが、この人たちは最後には革命組織から去ってしまったのだ。このオロビンドについて私の一人の知人が有名な詩人の詩の一節をよく私に聞かせてくれていたものだった。ここにそれを引用せずにはいられない気持ちである。

He is gone to the mountain And he is lost to the forest;
The spring is dried in the fountain When the need was the sorest.

このような思慮深く才知ある人は別にしてこの革命組織には偉大な文学者も偉大な言論人も偉大な詩人もだれ一人協力してくれなかった。この組織には知識人や識者がいなかったと言える。そのような人たちが特に少なかった。そのため革命組織は広報活動に対してはほとんど無関心なままであった。稀に秘密の冊子などが配布されたことはあったが、それらは単に一時的な衝動に発する報復の感情に支配されたものでしかなかった。思慮深さや慎重さには程遠いものであって人生の何か新しい理想が明かされるものではなかった。それらがインドの文学にいささかの地位を占めるものでは全くないことには疑念の余地がない。インドの革命家たちは何らかの永久に価値のある文献を創り出すことが出来なかったのだ。こうして革命組織の試みは当然無駄になったのであった。しかしながら革命運動の第一期にバリンドロ^{*7}とウペンドロ^{*8}によって発行された『ジュガントル』^{*9}はこの面では大きな働きをした。この出版物の及ぼした影響は今日も見る事が出来る。だからこそバリンドロは流刑地のアンダマン島である日昂然と言いつつ放ったものだ。「おれが一度指し示した道をベンガルは今日も進んでいるのだ。どうだい、だれ一人新しい道を切り開いたりその力量を見せた者はいないじゃないか。」

またこの革命運動組織は地下ではなく表立っては何一つ活動らしい活動が続けてこなかった。公開の活動に参加するティラクやガンディーのように品格のある指導者はこの組織には一人もいなかったのだ。このため革命運動は徐々に一般大衆から遊離して行き袋小路に入り込む結果になってしまったのだ。このように公開活動の指導者になれなかったがために無学な大衆を自分たちの理想の方向へ導くことが出来なかった。このようなことすら革命組織の幹部たちは多分今日なお十分に理解することが出来ないでいるのだ。あるいは、そうした適切な理解の出来る人物が不足したためやむなくこの面を無視し続けてきたのである。革命組織にすぐれた指導者がいなかったためにインドの他の政党の指導者たちは幾度もこの革命組織を様々な方法で食い物にしてきたのだ。ともかくそのために国家に特に大きな損害が及んだことがないとしても革命組織の惨状はそのことによって歴然とするのである。… (pp. 165-174) (以下省略)

(註)

^{*1} チャイタニヤ(चैतन्य महाप्रभु; श्रीकृष्ण चैतन्यचन्द्र) クリシュナとラーダーへの熱烈な

信愛（バクティ）による一派を導いたヒンドゥー教チャイタニヤ派の開祖。（1485-1533）

*2 グル・ゴーヴィンド・シング（गुरु गोविंद सिंह）護教のためシク教徒を強固な信仰集団にまとめあげたシク教第十代教主（1666-1708）。

*3 「アピナヴァ・バーラタ」 अभिनव भारत 1904 年に V.D. Savarkar(1883-1966) によって設立された革命運動組織。マハーラーシュトラ地方を中心に周辺地域にまで影響を及ぼした。大衆も含め広範な人々を啓発し民族意識の覚醒をもたらすような多様で活発な運動を展開した。

*4 ガーイクワール家 गायकवाड़ マラーター同盟の一翼を担ったパローダーの藩王国を支配した王家。

*5 カールサー王国（खालसा）第十代教主グル・ゴーヴィンド・シングの設立した純粹にして固い絆に結ばれた信仰集団にその名の起源を持つシク教徒の支配する王国の意。シク王国。

*6 原文にはプロフェसर ऐसर लिखित ‘पैन-जर्मनिज़्म’ (Pan-Germanism) बर्न हार्डी कृत ‘जर्मनी एण्ड दि नेक्स्ट वार’ (Germany And The Next War) とあるが、原書については不明。

*7 バリンドロ वारीन्द्र कुमार घोष (Barindra Kumar Ghose) (1880-1959) ベンガル出身の革命運動家。オロビンド・ゴシュの弟。Alipore conspiracy case で終身流刑に処せられた。

*8 ウペンドロ उपेन्द्रनाथ बनरजी ウペンドロナト・バナジー ベンガル出身の革命運動家。バリンドロらと革命思想の一般大衆への普及教育活動に参加した。

*9 ジュガントル युगान्तर 1906 年 3 月から新聞取締り法令により停刊になる 1908 年まで Bhupendra Nath Datta, Abinash Chandra Bhattacharya, Barindra Kumar Ghose らのいわゆる過激派の編集により刊行された週刊誌。

（二）共産主義について

流刑地から戻った私は多分 1923 年に初めて共産主義の理論を知った。当時、恐らく革命運動組織のだれ一人としてこの新しい理論を知る人はいなかったであろう。その後、1925 年に再び入獄するまでに私は共産主義の理論についてはかなり親しんだ。ずいぶん沢山の信頼すべき文献も読んだし共産主義者たちともずいぶん議論した。革命運動に携わるかたわら「幽囚記」の第二部を執筆しながら共産主義の理論を必死になって理解しようとしていた。共産主義の理論の一部を自分の中に受け入れはしたが一部は今なお受け入れることが出来ずにいる。共産主義の経済理論の多くを私は受け入れたのだが、経済理論と哲学的にまた理性的に見て真実でないとは判断される共産主義の唯物論の多くの理論とが強引に結びつけられているのだ。私は今も神の存在を信じているし近代科学の発展によって徐々にインド哲学の立場が確かなものとなって行きつつあるように思う。今日我が国の一部の人は猿真似に陥って唯心論を認めずそれを主張する人たちを嘲笑している。（pp.18-19）

実際のところ、各自の関心、育ち、交際相手に影響を受けてその人の考えが出来上がるものだ。慎重に考察して何らかの理論を採り入れることは稀にしかないものだ。国家的レベルで今日献身的にまた勇敢に前進している人たちの影響は当然大きいであろう。ロシアの革命運動の成功に引きつけられて我が国の多数の青年が感化されつつある。唯物論の信奉者たちは近代科学が唯心論を根底から覆したのだと信じている。しかしそういうことはすべて根拠のない話な

のだ。

偏見なしに近代科学について検討してみるならば、科学が単に感覚器官の対象のみを探究していることを認めなくてはならないだろう。したがってわれわれは感覚を超越したものの存在そのものを科学の力でどうして否定できようか。機器の発明によって人は感覚器官の力を増し感覚器官で見えなかったものが機器の力で感覚器官でも捕捉出来るようになったことを知るのである。今日の科学の進歩によって、われわれがよく知っている光線、すなわち、われわれが感知できる光線以外にも既知の光線以上に強力で驚くべき力を有する光線が多数存在していることを知るに至ったのである。機器がさらに発達するならばわれわれの知っている世界、すなわち、われわれの感覚で捕捉できる世界よりも感覚を越えた世界のほうがはるかに広大で驚異に満ちているのがわかるようになるであろう。われわれ人間は既知の世界と未知の世界との境界線上に位置しているのだ。機器に頼らなくても人は感覚を越えた世界を知ることの出来る力を獲得できるのだ。(pp.19-20)

(三) 革命運動組織と共産主義者

もう一つ特に重要なことを記して置く。デリー *¹ ではもう一人の人物に会った。年齢はおよそ 30 歳ほどであったろうか。それまでは会ったことのない人でクトゥブッディーン・アフマド *² と名乗った。名前を名乗った際にマナーヴェーンドラ・ラーイ M.N.Roy(Manavendra Nath Roy)*³ の使いでやってきたということだった。それを知って私は大変嬉しくなり興味を覚えた。アフマド氏は大分以前から私に会いたかったということとラーイが私をモスクワに招いている旨を伝えた。モスクワでコミンテルンの会議が開催される予定があり彼が私にも出席を望んでいるので自分はそのことで私に会いに来たのだということだった。

私は私で以前から共産主義について詳しく知りたいと思っていた。アフマド氏の話は私にとっては渡りに船というところだった。氏とはずいぶん長時間に亘り話し合った。私は人生で初めて共産主義の本質について直接理解することになった。私の人生における一大歴史的事件であった。

アフマド氏は共産主義が目指しているのは社会の一切の財産が個人の所有に帰するものではなく社会のもの、公有制になるようにすることだと話した。それを聞いた途端私の脳裏に浮かんだのはヒンドゥー教の四住期制度のサンニャーサ・アーシュラム(隠遁期)のことだった。そこで私は即座にそれは人間が最高に進歩した場合の話ですねと応じた。人間が最高に進歩せずに社会の富が個人の所有ではなく社会全体の所有物となるのであろうか。するとアフマド氏は、いやそれは革命という方法でも財産が個人の手から社会の手に移りそうした中で教育を介して人間が最高のものになることが出来るような社会秩序をこしらえることが出来るのですよ、と話した。これは私にとっては全く新しい考え方であった。私はしばし目を見張った。次にアフマド氏の話は大いにあり得ることかも知れないと思った。一瞬私の頭の中には隠遁期のことについてふっと疑問が湧いてきた。ヒンドゥー教の社会で一生涯苦行を重ねた結果として到達すべき最高点と定められている場所に人はそれほど容易で簡単な道を通して到達出来るものであろうか。だが、この疑念はほんの一瞬頭に浮かんだだけだった。すぐに、革命が起これば人はヒンドゥー教の社会が示した理想への道を進むことが出来るようになるのかも知れないと思っ

た。共産主義について詳しく知りたいとの思いが深まった。時間を改めて再度アフマド氏と会い共産主義の理論について何時間にも亘って話し合うことになった。

クイーン・ガーデンに腰を下ろしてのアフマド氏との対話は何時間も続いた。氏は古代から現代に至る H.G. ウェルズ^{*4} の著した歴史にかかわる書物から例を引いて、かつて女性が支配者であった時期のこと、その当時女性の支配により社会秩序はすべて女性の意のままであったことや男性は女性に従属していたこと、すなわち、支配者の利益に応じた秩序が出来上がるものであることを語った。氏の言では、風俗・習慣や社会秩序などというものは永遠の理法によって決まるのではなく支配権力を持つ者の意向や利益に基づいて定まるということであった。社会も支配権力によって発展が定まるのだという。政治権力によって社会での教育、産業などの秩序はひとりでに正しくなるのだという。政治権力の支援があって初めて個人が発展する方途も確かなものになるのだという。今日の社会に見られるすべての混乱の根元にあるのは社会の富の生産手段をすべてごく少数の人たちが手中にしていることにある。彼らは自分たちの望むように社会秩序をこしらえ自分たちの都合のいい方向へ社会を導くのだ。政治権力もその連中が握っているのだ。一方には富が溢れ他方には貧困の惨たらしい圧迫により無数の人たちが悲鳴を上げている。民主主義の行われているところでも資本家たちが勝手気ままに振る舞っている。建て前では民衆が国政にかかわる一切の権限を平等に持っているのだが、金持ち連中は貧乏人の投票権を自分たちの金力で手に入れるのだ。だから真の民主主義政治というのは社会に貧富の差別がなくなって初めて可能となるものだ。貧富の差別は富の生産手段が個人の手から社会の手に移った時に消滅するものなのだ。それには革命に頼るしかない。もしも社会に経済的な平等がなければその社会の秩序も国の政策にも欠陥が生じ有害なものとなる。

私は心静かにそして真剣にアフマド氏の話に耳を傾けた。今まで革命運動に関するいろんな歴史書を読んでいし国の興亡について数多くの書物を読んでいたのだが共産主義の経済観によって歴史上の出来事を理解することは学んだことがなかった。人生で初めてアフマド氏の助力により共産主義の経済についての理論の独創性を知って私は驚嘆した。今までこの理論を知らなかったことを恥じ悔しい思いをした。話をしているうちに時には歴史上の根元的な疑問について時には経済の不思議な動きについて、あるいは、経済問題から宗教問題について、また、宗教問題から哲学の一元論や唯物論などについて深遠な哲学の小径を幾時間もの間逍遥したのであった。アフマド氏に出会い話をしたのは大変嬉しかったのだが、また、同時に新しい理論を知って驚嘆もしたのであった。人生にかつて経験したことのない新しい問題が出来したのであった。それまではヴェーダーンタ哲学に囲い込まれて知識と行動の異常な拮抗の中に陥っていた。また、暴力と非暴力の対立にも陥りいささか心に動揺をきたしていた。ガンディー主義及びサティヤーグラハ方式と武力革命方式との間の激しい対立があったので大変厳しい問題に直面しなければならなくなっていた。私は今ついに共産主義の唯物論、経済的な観点からの歴史解釈と政治についての新しい観念から生じた政治的、また哲学的錯綜に陥り人生に新しく複雑な課題を抱えることになったのだった。

財産が個人の所有ではなく社会の公有のものになるということの背景にある偉大な理想を私は否定することは出来なかった。しかし、生産手段そのものが富であるということを私はデリーでは十分に理解できなかった。このことについて私の頭に最初に浮かんだ思いは、自分はこの偉大な理想に従って行く資格がないということだった。私にはやはりサンニャシー、すなわち、隠遁者の理想が思い浮かび自分にはその力量がないということだった。それと同時に

私は社会のあらゆる発展は経済制度によってのみ可能だという見解を受け入れることが出来なかった。アフマド氏に私がヴェーダーンタ哲学の本質について少し説明を始めると氏はそういうことは哲学的な思索の場では立派なことではあり得ようしそれなりの意味のあることかも知れないが、宗教に対して共産主義が敵対していることとこの哲学的思索とは特別な関係にはないのだと語った。

今このようなことを思い返してみるとアフマド氏はヴェーダーンタ哲学についてあまり知識を持っていなかったのではないかという感じがする。あるいは、同氏は私を徐々に自分の土俵に引き込もうとの思いから私の強固な哲学的志向に対し忍耐強さを示して、哲学的思考と宗教的感情とは二つ別個のものであることを私に説明したかったのかも知れない。同氏の、宗教のために世界には惨苦が生じたのだという主張は私もかなり認めなくてはならなかった。しかし、私は、宗教が正しく機能しなかったから宗教そのものも実際には正しいものではないのだという説には全く同意しなかった。歴史上、数多くの機会に宗教が悪用された。だから宗教が正しく役立つことはあり得ないということは理屈に適っていないし歴史的に見ても真実ではない。それに経済的な観点ばかりで歴史を解釈しようとするのも合理的ではない。このようにして共産主義に接することで私は人生に一つの大きく新しい理想に出会ったように感じた。しかし、共産主義の理論には偉大な理想と共にその日私が受け入れることのなかった、そしてその後これほどの歳月思索し研究した今日に至るも受け入れることの出来ない幾つかのものが付随している。私は論理的に、哲学的に、そして悟性という点から唯物論を今日もなお真理だとは思わない。何か新しい理想の観念は単なる唯物論の観点からは生じ得ないものなのだ。(pp.314-318)

(註)

*1 Sanyal は 1923 年 9 月 15～19 日にデリーでインド国民会議派の臨時大会が開催された際に参加していた。

*2 Qutubuddin Ahmed → スミット・サルカール 「新しいインド近代史」 I p.333

*3 マーナヴェンドラナート・ラーイ (मानवेन्द्रनाथ राय マナベンドロナト・ロイ) (1887-1954) 旧名はノレン・ボッタチョルジョ (ナレーンドラナート・バッターチャーリヤ)。ベンガル出身の革命運動家。コミンテルンで活動。インド、メキシコ、中国などでの共産主義運動に携わった。

*4 H.G. ウエルズ (Herbert George Wells) (1886-1946) イギリスの小説家、文明評論家。

(四)「インド共和国協会」 — 綱領と規約

私は革命運動の役割と必要性についてまとめた書物を一巻書き上げたいと願っていた。革命運動に対してなされてきた批判が取るに足らぬものであり、愚か者たちによるつまらぬ自慢に過ぎないことを証明するためこれまで語られてきたすべてについて反駁したいと強く念じていたのだが、甚だ残念なことに何一つなし得ずに今日に至っている。この種の書物を著すには十分な時間が必要であるが、私にはその時間がない。筆を執ろうとすると組織活動が滞ってしまう。組織の仕事に取りかかれば執筆の時間がない。このような状況の中で私は自分たちの組

織の綱領を定めた。自分の考えではインドの革命運動の歴史においてこの綱領書には特別の重要性がある。この文書は今日警察の管理するところとなっている。しかし、カーコーリー事件の判決文の中に相当な分量が引用されているのでその引用部分からこの綱領についてその一部をここに紹介したいと思う。これを読めば読者諸氏には北部インドの革命運動がどれほど確たる理論の上に開始されたものであったかが明らかになるであろう。

ラースビハーリー・ボース氏が北部インドで革命運動を行っていた頃には何の綱領もなかった。米国とカナダで活動していた諸々の革命運動の党はガダル党の名で評判になった。ベンガルに存在した革命党はそれぞれ別個の名を名乗っていた。この度私が結成した組織は The Hindustan Republican Association と名づけられた。アワド中央裁判所の判決文からこの組織の目標と構成及び規約について下に引用する。

* * *

インド共和国協会 綱領と規約 (抄)

名称 本会の名称を The Hindustan Republican Association とする。

目標 組織的な武力革命によりインド共和国連邦の建設を本会の目標とする。本共和国の憲法とその最終的形態の決定とその宣言は人民代表によりその決定が実現可能となったときになされるものとする。普通選挙を基盤として共和国連邦を組織するものとする。本共和国連邦においては人が人を搾取する機会の得られる制度は一切廃止するものとする。

構成

運営委員会 本会のあらゆる活動は中央委員会によって運営されるものとする。中央委員会はインドの各州の代表から構成される。そのすべての決定は全代表の承認によってなされる。中央委員会は絶対的な権限を有する。各州の活動の一切に関する情報を中央委員会は管理する。各州の活動を調整しその目的達成を相互に関連づけそれを管理することを中央委員会の主たる任務とする。外国における活動は中央委員会の所管とする。

州組織 通常、各州に下記の5部門のそれぞれ5人の代表をもって執行委員会を構成する。州のすべての活動を本委員会が管理する。本委員会のすべての決定は全会一致の議決によるものとする。次がその5部門である。 1. 広報活動 2. 人員募集 3. 資金調達及びテロ活動 4. 武器調達とその安全管理 5. 外国との関係樹立

1. 広報活動 (A) 公開・非公開の印刷物による。(B) 個人的な接触による。(C) 公開の集会などによる。(D) 宗教講話を巧みに利用する。(E) 幻灯機の利用による。

2. 人員補充 県の運営責任者による活動による。

3. 資金調達及びテロ活動 資金調達は一般に自発的な寄付金によって行うが、適宜武力によっても行う。外国勢力によって極度に苦痛の与えられる場合にはそれに適切に報復することを本会の義務とする。

4. 武器調達とその管理 本会の各構成員の手元に武器を調達するためのあらゆる努力をなすものであるが、それらはいろいろなセンターに保管され州委員会の管理下に利用するものとする。この部門の長、もしくは、州組織の責任者の許可や承認なく武器を移動させてはならない。

5. 対外部門 この部門の活動は一切を中央委員会の管理・運営によるものとする。

県の運営責任者とその責務 (省略)

県の運営責任者の能力（省略）

州及び中央委員会 それぞれの委員会のメンバーはそれぞれの組織のメンバーが十分に発展を遂げその技能を十分に発揮できるように特に意を注ぐべきである。それをなし得なければ本会は衰退する可能性がある。

活動 本会のすべての活動は公然活動と秘密活動の二つの方法によって行われるものとする。

公然活動

1. 図書館、体育館、奉仕会などの形で様々な会を設立する。
2. 農民と労働者を組織する。本会から有能なスタッフを工場、鉄道、鉱山へ派遣して労働者への影響が及ぶようにし労働者たちが革命的手段ではなく労働者階級の安寧のために革命が行われることをしっかり認識するようにする。農民も労働者同様に組織化する。
3. 各州からそれぞれ週刊の機関紙を刊行しそれによってインドの独立と共和国について広報活動を行うこととする。
4. 外国の現状や思潮の動向などの理解のため小冊子などを刊行するものとする。
5. コングレス（インド国民会議派）及びその他の公共活動に対して可能な限り本会の影響を及ぼしそれにより出来るだけ利益を図るものとする。

秘密活動

1. 秘密裡に印刷所を設置して公刊できない文献や資料を提供する。
2. 上記の文献・資料を広める。
3. 全国の各県にこの印刷部門の支部を設置する。
4. 可能な方法で資金を獲得する。
5. 反乱発生の際、武器工場の運営及び軍の指揮を可能にするための適切な人材を外国で軍事訓練及び科学教育を受けさせるため派遣する。
6. 外国から武器を調達し、またそれらの製造を試みること。
7. 外国在住のインド人革命家たちと密接な関係を保ち完全な協力関係を築くこと。
8. イギリス軍隊に本会の構成員を入隊させること。
9. 時に応じて（イギリスへの）報復の目的で本会の信条に一般大衆の共感を引きつけるような活動を適宜行うこと。そうすれば大衆の共感により利益を得ることが可能となる組織を作り上げることが出来よう。

構成員

1. 構成員は本会の活動に自分のすべての時間を費やすものとする。また、必要とあれば自分の生命を危険にさらす覚悟を常にしておくものとする。各県の運営責任者はこのような覚悟をした構成員を入会させるものとする。
2. 各構成員は県の運営責任者の命令に絶対服従するものとする。
3. 各構成員は自分の個々の能力・技能を向上させるため最大の努力をするものとする。本会の活動の成否と意義は各構成員がどれほど勤勉で自発的であり有能で責任感に満ちているかによる。各構成員はこのことを肝に銘じるべきである。
4. 各構成員はその行動により本会の目的に如何なる汚点もつかぬように行動するべきであり、また直接的、間接的に本会に損害が生じないように行動しなければならない。
5. 県の責任者の許可なくしては本会構成員は他の組織の構成員になることは出来ない。

6. 各構成員は県の責任者に通知することなくその部署を離れてはならない。
7. 各構成員は一般民衆及び警察が活動家との何らかの関係を疑うことがないような行動をとるものとする。
8. 各構成員はその個人的行動、あるいは、ただ一つの過ちによって会全体が崩壊に至ることを肝に銘じるべきである。
9. 各構成員はその日常行動に関して県の責任者に対して一切を秘密にしないものとする。
10. 各構成員は 背信行為をなした場合、会から追放されるか死刑に処せられるものとする。死刑を与える権限はすべて州委員会に所属するものとする。(बन्दी जीवन pp.322-328)

(五)「インド共和国協会」の足場について

インド共和国協会 Hindustan Republican Association, すなわち、インド共和国連邦の綱領と規約とを注意深く読むならば、北インドの革命運動が民主主義と社会主義の理論の上に成り立っていたことが判るであろう。そしてこれは単なる空想の産物ではなかったのである。目的達成のためにインドの選ばれた青年たちが家庭のしあわせを、親の愛情を、兄弟姉妹の愛と温もりを、世俗の誘惑を断ち切って絞首台に上ったり終身流刑の独房の恐怖に決してひるむことがなかったのだ。

当時ロシアにはすでに革命が起こっていた。共産主義の赤い炎に全世界の被抑圧者たちや大帝国の支配者たちは動揺し混乱し怯えていた。それ以来欧米においては共産主義の理論に基づいた激しい運動が生じており日に日に激しいものになりつつあった。そのような状況を念頭に置いて北インドの革命運動を論じるとするとその運動は単なる子供っぽい振る舞いとか近視眼的で生意気な青年たちの無思慮で無礼な振る舞いだとか絶望的な活動家たちの軽率な振る舞いではなかったことが明確になるであろう。もし大仰な言葉遣いで、あるいは、高邁な理論に言及するだけではある運動の意義を考えることができないのだとすると世界に何か新しい理論が広まった際にはその始まりは限定された形でまた主として思想の面でだけ生じるものと言えば十分であろう。この地の革命運動家たちは困難を極めた状況にありながら世界最強の帝国主義の攻撃に耐えインド人の無気力化し沈滞した精神を自分たちの命を犠牲にして甦らせたのだ。1922年初めにサティアグラハ運動が沈滞してから'30年に至るまでの間、マハートマ・ガンディーの関与は何らなかったのだ。この間革命運動だけが全世界に向かって、インド解放のためインドの青年たちが自分の命を犠牲に差し出せることを高らかに宣言したのであった。1929年のラーホールでの国民会議派年次大会での議長パンディット・ジャワハルラール・ネルー氏の演説を注意深く読むならばインドの革命運動がインドの国政政治家たちにどれほど強い影響を及ぼしたかが判るであろう。私の記憶違いでなければネルー氏はその演説の中でインドの青年たちの革命運動こそがインドの民族運動の生命を繋いできたと言ったのであった。(pp.328-329)

われわれの協会のこの綱領のすべてをメンバー全員が十分に理解していなかったことは事実であり得よう。この綱領を完全に理解するには次の二つのことを知ることが特に重要である。インド文明の本質を十分に理解していない人は共産主義の欠陥を正確には理解出来ないのだ。したがってインド文明に愛着を感じない人や人類の発展にインド文明が貢献するものであるこ

とを信じない人はこの綱領を正しく理解できない。また、共産主義の理論全体は不可分なものでありそれを完璧なもの、誤謬のないもの、無謬のものと信じ込んでいる人もわれわれの協会のこの綱領を完全には理解できないのである。何故ならばそのような人はこの綱領には共産主義の全ての理論がそっくり採り入れられていないのでこの綱領の作者は共産主義の理論を正確に理解していないと判断するからである。そのため一方ではジャワハルラール・ネルー氏のような人が革命運動家をファシスト呼ばわりするかと思えば他方では一部の若いマルキストがわれわれの綱領を批判して今になってこの綱領の作者である Sanyal 氏は共産主義理論を十分に理解していなかったから階級闘争について全く触れていないのだとして批判している。(p.329) (中略) …

共産主義理論において経済史的観点からの歴史解釈は特別重要な位置を占めるものである。また、その解釈の根底には階級闘争の観念がその中軸となっている。これらの理論を受け入れない者は厳密な人たちから見れば共産主義者ではないことになる。小子は特別に注意深くこれらの理論を学び慎重に考察を加えたが、今日に至るもそれらを受容できないでいる。しかしながら、独立インド共和国においては労働者と農民の利益を適切に保護すべきであるとした。歴史上繰り返し見られたところであるが、労働者・農民階級の協力によって成った革命であるのに革命後にはそれを成し遂げたその階級が無視されてきたのだ。したがって、革命後の国の再建に際しては労働者、農民の利益を慎重に保護するべきである。しかし、それだからと言って前進するには階級闘争によるしかないとか経済の観点からの歴史解釈を受け入れるべきだとはならないのだ。(pp.330-331) (中略) … ここで次のことを明らかにしておくなくてはならない。われわれの協会の綱領には共産主義の多くの理論が採り入れられている。採り入れられていない理論はわれわれが理解出来なかったからではなく熟慮の上で採り入れられなかったのである。この綱領の一つの特徴は共産主義的観点からこの綱領を作製したにもかかわらずその名称に共産主義とか社会主義という言葉を用いていないことである。社会主義を知らなかったからだとか理論を受け入れられなかったからと解釈するのは誤りである。われわれは社会主義という名称を用いるならばわれわれを支援してくれていた多くの資産家がわれわれに協調しなくなる可能性を心配したからであった。ただ、そのことを考えて社会主義という言葉を用いた名称に用いなかったのだ。パンジャブのサルダール・グルムク・シンの党を見て私も自分たちの組織の名称を社会主義に関連づけたものにしたかったのだが、親友のジャイチャンド教授の忠告があったのでそうしなかったのだ。われわれが逮捕された後にサルダール・バガット・シンがこの協会の名称に「社会主義」を付けたが、特筆すべきことは、その名称以外内容には何ら変更がなされなかったことである。(pp.331-332) … われわれの組織の目的を述べたところには、われわれが志向するインド社会の将来像には人が人を搾取することがあり得ないような社会制度とはっきり述べられている。さらには、協会が発行した宣言書にはインドの将来の国家制度では大工場や産業は個人によって営まれるのではなく鉄道、炭鉱などは国家の管理するものとある。船舶の建造や運行は社会の管理下に入る。公然活動の第2条を読むならば、偏見を持たない人ならば共産主義の根本原理をわれわれが大きく採り入れていたことを理解するであろう。この公然活動に関する第2条を読むならば共産主義理論の階級意識の概念がわれわれの考えや決意の中で作用していたことを疑う余地はないはずである。(p.332) … パンディット・ジャワハルラール・ネルー氏がインドの革命運動家たちはファシストであったと述べているのも全く過った主張である。ここにそのことを論じる必要は全くないものと考える。(p.333)

あとがき

先にバグワーンダース・マーホウル氏の文章について触れたが、彼は序文の最後にビスミルの手記の原稿を探し出して国立アーカイヴズに保存することがインドの独立運動の殉難者たちに対する感謝の念を表明することになるのではないかと記している。

その後ビスミルの手記が発見されたのか探し出す努力がなされたのかどうか知らない。そのようなことについて調べることは久しく自分の仕事の外のことになっていた。合計すればインドに数年を過ごしたことになるがマインプリーもシャーージャハーンブルも訪れたことはない。ゴーラクプルは訪れたことがあるがビスミルの獄死した刑務所を訪ねたこともない。政治犯も収容されていたと聞いたアングラーの刑務所は一年ほど間近に見る機会があったがその中に立ち入る機会もなかった。そこは今は一大商業センターになっているとか聞く。映画の中や一部の文学作品などを読む中でサティヤーグラハ運動の一環として入獄した人々の様子や一般的な刑務所内の様子は想像することが出来たが政治犯として死に直面した人たちの心の中などは到底想像力の及ばぬところである。B.G. ティラクや M.K. ガンディー、J. ネルーなどの獄中生活について知ることとは別次元のことである。そのような人々に関する記録やそのような人々の表現したものが歴史的に甚だ重要なものであり文学的価値さえも備えた貴重なものであることは確かであろうが。

ビスミルの到達した地点はバガット・シンのたちの到達したそれでもない。もう少し長生きしたシャチンドラナート・サーンヤール（ショチンドロナト・シャンナル）の立場とも異なるようだ。ただ、不謹慎な表現かも知れないが、政治犯として死に直面しながら心の裡を誠実に伝えようとしたビスミルの文章には心を強く惹かれる。そしてまたビスミルを一段と身近な人物として感じさせてくれたのはシヴ・ヴァルマーの短い文章であった。

何事につけても安易に一般化して表現するのは慎まなければいけないのは承知の上で敢えて申せば、インドの男性にとっては母親や姉妹の名誉や存在はたとえ自分の命に代えてさえ惜しくはないものである。実際そのような思いがどれほどの拘束力を持つものであるかは別にしてそれが建て前だった。ヒンディー語で「母（が飲ませてくれた）乳に恥をかかせる（माता का दूध लजाना）」とは男子が命がけで勇気を示すべき時に卑怯な振る舞いをするもののたとえである。また「（母なる）インド万歳（भारत माता की जय）」とか「母なる雌牛（गोमाता）」という表現も同様なものと理解すべきものであろう。ビスミルはこの自伝の中で母親への思いをいろいろと書き記しているが、同じカーコリー事件で二度目の終身刑の判決を受けたサーンヤールも母親への切々とした思いをその著「幽囚記」（बन्दी जीवन）に綿々と書き記している。

そのサーンヤールの回想記は第一部と第二部が刊行されてすぐに禁書となったものの密かにはあるが熱烈に読まれたという。しかし、小子には次のような記述を当時の読者たちがどのような思いで読んだのであろうか、どのような感想を持ったのだらうかと気になる。ただ今はそのことをここに書き記すだけに留める。

（ラシュビハリ・ボースなどがパンジャブなどで 1915 年 2 月 21 日に予定していたインド兵の一斉蜂起に連動してサンヤールたちが計画していたバナーラスでの反乱事件について言及する中で）「…夜陰に乗じてバナーラス駐屯の英軍部隊を襲撃し弾薬庫や武器庫を占拠し英人有

力者を捕らえて刑務所に入れ服役中のインド人囚人を釈放しその一部の者の支援も受ける予定であった。当時は囚人や刑務所の実情を全く知らなかったのだ。… 夜明けと共に市民大集会を開き資産家からは寄付金を募り若者たちからはボランティアを募る。バナーラス市には教育水準も知的水準も高く医者、教師、高級役人なども多かったベンガル人市民の諸々の団体がありその団体の構成員は250人を下らなかったのもその人たちを中心にして市内の治安維持や市民生活の安全確保の任務を依頼するのが最適と判断された… 反乱が開始されるとそれらのベンガル人たちと並んでヒンドスターニー人（ベンガル人ではない地元の人の意…訳者註）青年たちの中からもわれわれの反乱に協力するボランティアが多数現れるであろう…と期待された。一旦反乱が起こったとなると武器を所持している兵士たちが勝手な振る舞いをする恐れがあるが、彼らも自分たちの利益のためには教育があり決断力のある反乱側の指揮官の命令に従うしかないであろう。弾薬庫や武器庫を占拠すると同時に自分たち自身が重装備をするように努めなくてはならない。ドイツ（との）戦争（欧州大戦）がこれほど早く始まるとは考えていなかったのも戦略とか作戦計画などについてはわれわれは全く無知であった。ラシュビハリ・ボースがパンジャブに移動した後、自分たちはブリタニカ百科事典で Strategy とか Warfare の項を読み始めた… ブリタニカの中でも Generals are made in the field of battle という文章も読んだしそれを読んで自分たちが優秀な指揮官になれないことはもちろん知っていたのだが… ともかく自分たちがしたことを記すということである。そのことで自分たちの幼稚さが知られようと恥じるものではない。

2月21日（一斉蜂起予定日）に駅と電報局の様子を探りに自転車に乗ってバナーラス・カントンメント駅に行き列車の運行と電信が全く通常通りであることを知った。当日の夕方、同駅である軍曹と会う約束があったので彼を待つ間に購入して読んだ新聞（パイオニア紙）でラーホールで（事件関係者の）逮捕が始まっておりイギリス軍兵士により市中にビケが張られたのを知った。（pp.86-88）…（中略）

（われわれの計画を打ち明けられ反乱に協力を呼びかけられた側の）反応もすべての連隊から期待できるものばかりではなかった。… ムスリム兵士のある連隊からは次のような反応が返ってきた。

君たちは俺たちをまるで子供扱いしているのか。イギリス軍を相手に戦うのは子供の遊びごとではないのだ。君たちの側にはだれかナワーブかマハラジャのような味方がついているのか。そうでなければだれが資金援助をするのだ。反乱が始まったら即刻無線で世界中に情報が伝えられて短時日のうちに君たちは敵軍に包囲されることになる。そうなった時に何とか持ちこたえられるのか。武器弾薬をどの程度確保しているのか。俺たちは餓鬼でもないし狂人でもない。そんないい加減な話を伝えに来るな。そりゃ本当に反乱が始まったとなったらおれたちも国民に敵対するようなことはしないが。でも、まあ見ておれ。何事も起こらぬから…」（p. 89）

*

*

*

ラームブラサード・ビスミルの自伝は小子が1961年7月上旬に最初に渡印するまでの2か月ほどの間、当時第3学年の教材として使用したものである。しかし教材としての使用は当然中断せざるを得なかった。2年足らずで帰国したもののこの翻訳のために十分な時間は得ら

れず部分的な作業のまま今日に至った。歴史とは別の関心から始めたラーजेन्द्र・ブラサード元インド大統領の自伝の翻訳はかなり早くに完了したが、曲がりなりにも発表できたのはその冒頭部分のごく一部にしか過ぎない。

インド独立運動やこの時代に生きた人たちについては今も関心を持ってはいるものの残念ながらそのようなことについて調べものをするものの出来る時間の余裕はもはやなくなってしまった。

関心とは言うものの世間の失笑を買う程度の無責任なものにしか過ぎない。1976年にアメリカリットサル市の1919年のジャリヤーンワラー・バーグ事件の現場で親の代からそこに居住し勤めている公園管理人に聞いた話は全く予想外のものであった。その人の話では子供心に恐いもの見たさにその夜現場を遠くから見たら遺体から貴金属などを剥ぎ取っているらしい人たちがいたので恐ろしくなって家に逃げ帰ったという。また、1975年にアラハーバードを訪れた際には車夫が元アルフレッド・パークに建つチャンドラシェーカル・アーザードの像をだれかラージャーのものだと説明しているのを聞いたように記憶する。サティヤグラハについて一生知ることもない世代や社会階層の人がいても不思議ではないのであろうと思ったものだ。小子が知らないだけのことなのだろうが、15歳そこそこだったアーザード少年がサティヤグラハに参加し官憲から鞭打たれた話やその後の武勇の誉れは教科書にも載っているようだが、その遺族のことや故郷とのつながりの話は寡聞にして聞いたことがない。今も気になっていることである。さらに残念なことであり恥ずかしいことであるが、ラームブラサードの写真もまだ見たことがないし両親の名前も不明のままである。インドが独立を達成してやがて60年が経とうとしている。その後数多くの新事実の発見・発掘があったものと思われる。訳者としてはひたすら不勉強をお詫びするしかない。

最後に私的なことであるが、インドからばかりでなく海外からの書籍の入手が極めて困難であった時期に様々な障碍の中、本書を取り寄せて下さったのは極東書店の内藤氏であった。同氏には公私ともに大変お世話になったというより大変に御迷惑をおかけした。今さらお詫びのしようもないが、ご厚情に対しここに深い感謝の念を記す次第である。

以上のような事情で本書は個人的な備忘録にしか過ぎないことをお断りしておく。

2007年3月15日

訳者

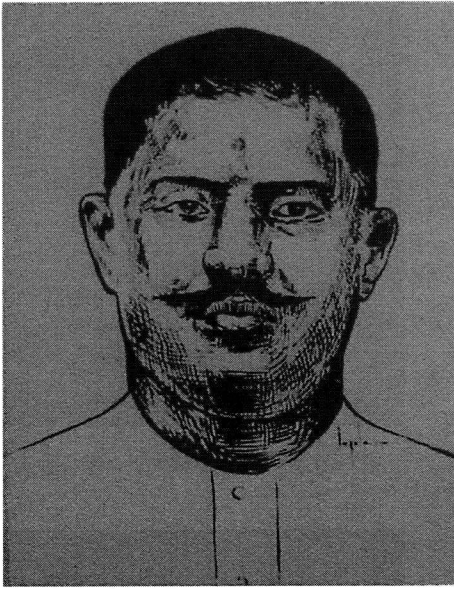
掲載した9名の方々の肖像画及び写真の出所はそれぞれ次の通りです。

ラームブラサード・ビスミル, ラーजेन्द्रナート・ラーヒリー, ローシャン・シンの肖像画

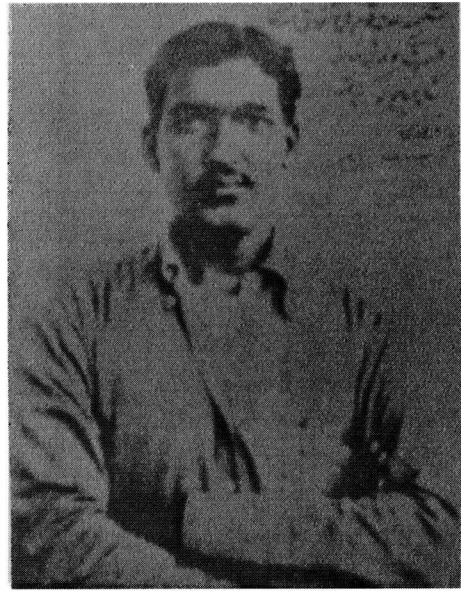
Banarasidas Chaturvedi, Atmakatha - Banarasidas 'Bismil', Delhi, 1958 बनारसीदास चतुर्वेदी (सं०), आत्मकथा रामप्रसाद 'बिस्मिल', दिल्ली, 1958

シャチन्द्रナート・サーンヤール及びゲन्दर्ラール・ディक्シットの肖像画及びアシュフार्क・ウッラー・ハーン, मान्मतनाート・グुप्ता, गानेश्चुशान्कल・वैदियार्लटीयोरगेश्चुचान्द्रा・चैतलजीの写真

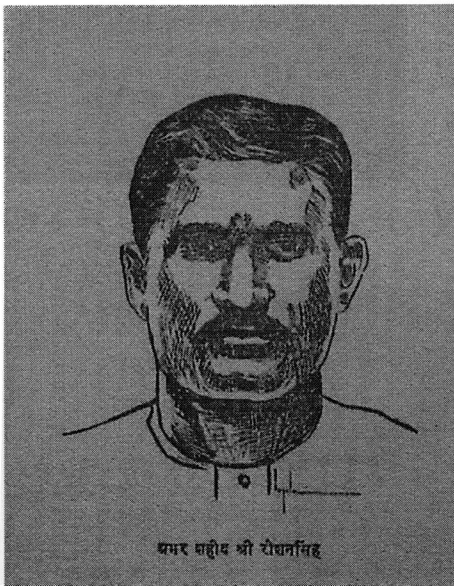
Manmath Nath Gupta, Bharatiya Krantikari Andolana ka Itihasa, Delhi, 1963 (मन्मथनाथ गुप्त, भारतीय क्रान्तिकारी आन्दोलन का इतिहास, दिल्ली, 1963)



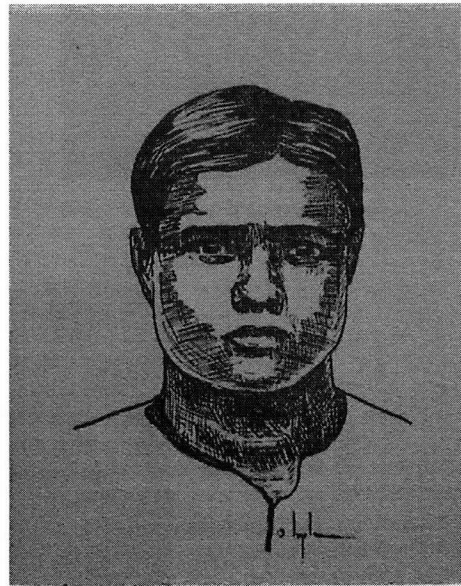
ラームブラサード・ビスミル



アシュファーク・ウッラー・ハーン



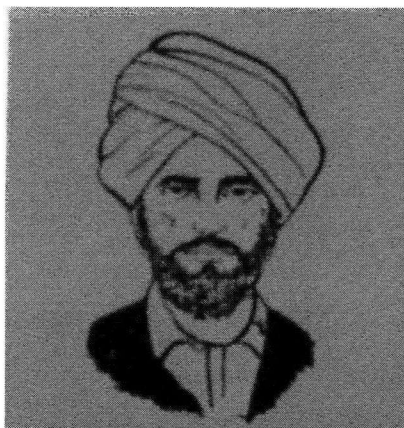
ローシャン・シン



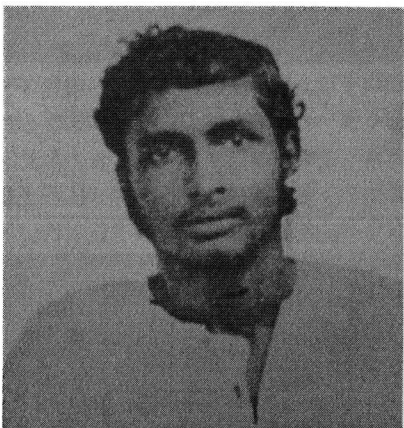
ラージェन्द्रナート・ラーヒリー



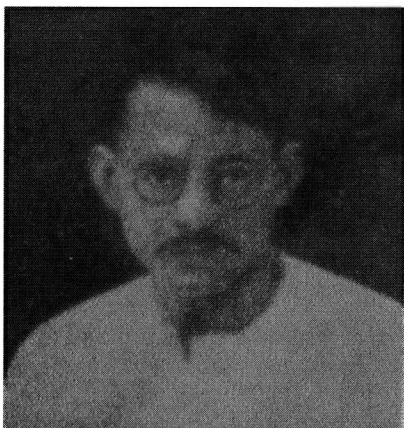
シャチンドラナート・サーンヤール



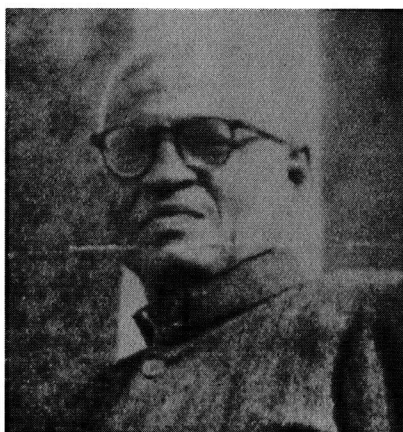
ゲーンダーラール・ディークシット



マンマトナート・グプタ



ガネーシュシャンカル・ヴィディヤールティ



ヨーゲーシュチャンドラ・チャタルジー

ラームプラサード・ビスミル自伝

編訳者	古賀勝郎
発行所	津市河辺町 3501-1
発行日	2007 年 3 月 20 日
印刷所	プリンテック 津市納所町 43-3